東アジア人文情報學研究センター
東方學資料叢刊　第 17 册

陶湘叢書購入關連資料

高田時雄 編

京都大學人文科學研究所附屬東アジア人文情報學研究センター

2010

ORIENTAL STUDIES REFERENCE SERIES
No.17

Materials on the Purchase of Tao Xiang's Collection of the Reprints of Old Chinese Books

Compiled by

TAKATA Tokio

Center for Informatics in East Asian Studies
Institute for Research in Humanities
Kyoto University

2010

目　次

1　陶湘藏書購入始末 1

前言 3

一、陶湘藏書に關する報知 4

二、天津における調査 7

三、書物の搬送と到着前後 8

附：松浦嘉三郎について 12

2-1　倉石武四郎致松浦嘉三郎書簡（翻刻） 19

附一、來熏閣陳氏致松浦嘉三郎信札 33

附二、倉石武四郎發往松浦嘉三郎電報 34

附三、狩野直喜發往松浦嘉三郎電報 34

附四、倉石武四郎發往狩野直喜電報 34

2-2　關係文書――「陶湘藏書購入に關する件」（翻刻） 35

3-1　倉石武四郎致松浦嘉三郎書簡（圖版） 51

附一、來熏閣陳氏致松浦嘉三郎信札 74

附二、倉石武四郎發往松浦嘉三郎電報 76

附三、狩野直喜發往松浦嘉三郎電報 76

附四、倉石武四郎發往狩野直喜電報 77

3-2　關係文書――「陶湘藏書購入に關する件」（圖版） 79

3-3　陶氏叢書第二次送附書目 101

3-4　陶氏叢書點檢目 105

3-5　外務省文化事業部寄贈書册目 109

1　陶湘藏書購入始末

前言

京都大學人文科學研究所の前身である東方文化學院京都研究所では、その創設期に民國の著名な藏書家であった陶湘から計五百九十一種二萬七千八百六十三册[1]の叢書を一括購入した。明治以來、中國から様々な經路を通じて、少なからざる古籍が日本にもたらされている。中でも三菱の岩崎彌之助による陸心源皕宋樓藏書の購得は、宋元の古槧を數多く含むため、文物流出として當時一大センセーションを巻き起こした。陶湘所藏叢書の一括購入は、いわゆる善本の範疇に屬するものではないため、これまでさして注目されてこなかったが、また別の意味で重要な出來事であったといえる。その内容は「あらゆる叢書、彙刻、全集等を網羅し、宛然『彙刻書目』を現物にて示したるものの如く」であり、また「書物の吟味は膏肓に入り、何れも精刻原印に係り、且つ一葉の落頁もなく整備され」てあった[2]。草創間もない研究所に必要な書物を如何にして收集するかという一大懸案がこれによって一擧に解決し、圓滑に研究活動を進める上で大きな利便を提供したことは言うまでもないが、今日ではこれらの書物はすでに相當な稀覯書となっていることも指摘せねばならない。

この册子は、陶湘藏書購得の事實につき、現存する關連資料を公刊するとともに、その資料に基づき簡單に購入の經緯を書きとめておこうとするものである。資料は大きく分けて二種。一は、北京に在って陶湘藏書の購入に奔走した倉石武四郎（1897-1975）が、京都の研究所で圖書受入の責任を負っていた松浦嘉三郎（1896-1945）に宛てた書簡十通ほかの資料一括で、現在人文科學研究所に保管されている。この資料一括は裏に「在天津日本総領事館」と印刷された公用茶封筒に入れられ、封筒の表には「倉石君來函／昭和四年／陶氏藏書購得關係／書類／昭和九年九月 司書所管」と墨書されている。これは松浦がこの年、研究所を離れて滿州國に赴任するに當たり、整理保存しておいたものと思われる。現在保存されている倉石書簡は十通だが、一、二缺落している可能性があるのと、一方の松浦が倉石に宛てた書簡を眼にし得ないことは殘念であるが、これだけでも陶湘藏書

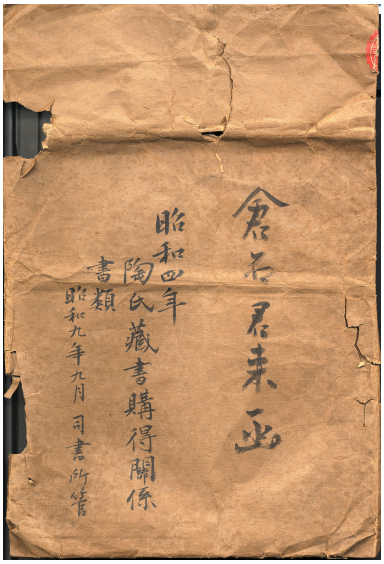


圖 1: 封筒の表書き

[1]册數については、後掲の各關係資料で一致を見ない。ここでは到着後の再點檢を經た信頼できる資料として、3-5 外務省文化事業部寄贈書册目（昭和五年三月四日外務省に提出）の數字による。

[2]倉石書簡（三）の表現。

購得の經緯について恰好の材料を提供してくれる。とりわけ公文書では見ることの出來ない、裏面の事情と倉石の本音が吐露されているのが貴重である。倉石の書簡の文體はいわゆる候文で、しかも現代中國語の語彙をそのままに用いた部分が多く、現代の日本人には少し讀みにくいかも知れない。封筒中にはまた北平の古書肆來熏閣陳氏が松浦に宛てた一通と、關連する電報が三通封入されているが、これも參考のために附録として掲載した。また今ひとつの資料は外務省外交史料館に保存される外務省記録のうち、そのＨ門「東方文化事業關連」ファイルで、その中に陶湘藏書購入に關する文書が「陶湘藏書購入に關する件」の標題で一括されているものがそれにあたる。後者は幸いに外交資料館の許可を頂き、倉石書簡とともに本册子に翻刻と圖版の掲載が可能となった[3]。

一、陶湘藏書に關する報知

義和團の賠償金による文化事業の一つとして計畫された北京人文科學研究所の運營が必ずしも順調ではなかったため、日本國内に研究所を設立することとなり、昭和三年（1928）十月東方文化學院の創設が決定され、翌昭和四年四月には東京と京都にそれぞれ研究所が設置された。後者の東方文化學院京都研究所は、昭和十三年度からは東方文化研究所と改稱し、次いで第二次大戰後の昭和二十四年、京都大學附屬の人文科學研究所と合併して今日に至っている。いま取り上げようとするのはその創立直後の話である。中國文化の研究を使命とする研究所にとって、先ず研究資料として圖書の整備は喫緊の課題であった。そのためには著名な學者、藏書家の舊藏書を一括購入するのが手っ取り早いとして、昭和四年の春頃に葉德輝（1864-1927）の觀古堂藏書及び康有爲（1858-1927）の萬木草堂藏書の購入が檢討されたが、幾つかの問題があり沙汰やみとなった[4]。また同年の五月には在北平

[3]もっともこれらの文書はすでに國立公文書館アジア歷史資料センターのデータベースですべて閲覽が可能である。また倉石書簡の公刊については、池田温教授を通じて、倉石家から許諾を頂戴した。ここに謹んで感謝申し上げます。

[4]後掲「2-2 關係文書」中の（一）狩野直喜書信を參照。また康有爲藏書購得に關する文書は外務省外交史料館東方文化事業關連ファイルの中に「康有爲ノ藏書ノ件」として一括保存されている。『岡部長景日記』（1993 年、東京、柏書房刊）の昭和四年四月二十五日の條に、「三時半外務省に行き、坪上部長、三枝、伊集院、田村君等と先づ研究所補助に關する申請書及補助指令書案につき協議し、…（中略）…次に楊（ママ）德輝及康有爲の遺書購入の件に移り、何れも助成費を交付して購入することとし、其他一、二の件を打合せて五時退去。」とあり、外務省側はすでに購入助成金の支出を内諾しており、問題は經費ではなく、藏書の内容にあったことが窺われる。ちなみに岡部長景（1884-1970）はこの直前まで外務省文化事業部長の職にあった人物で、東方文化學院設立に重要なはたらきをした。舊岸和田藩主岡部長職の嫡男で子爵、貴族院議員、東條内閣で文部大臣をつとめた。

領事館の瀬川淺之進から海源閣藏書出售に關する報告も外務省文化事業部にもたらされて、文化事業部ではそれを東京、京都の各研究所の責任者である服部宇之吉と狩野直喜にそれぞれ傳達しているが[5]、これも實現しなかった。

ところで京都研究所の主任であった狩野直喜は、諸方に情報を求める傍ら、當時北平に留學中であった京都帝大助教授の倉石武四郎にも適當な藏書の物色を依頼していた[6]。倉石は京都研究所の藏書構築計畫に對して二つの案を提示していたようである。書簡の書きぶりから判斷すると、第一案はある藏書家の藏書を丸ごと購入するというもので、第二案は北京の古書肆と連攜しつつ必要な書物を逐一購入するというものであったらしい。倉石は結局、第一、第二案の併用が上策であると判斷し、そのように提案しつつ、第一案の目標を色々と探った。主として相談に與ったのは徐森玉（1881-1971）で、徐は當時北平に置かれた東方文化事業總委員會の圖書部主任であった。

昭和四年（1929）六月十三日、徐森玉が倉石を訪問し、天津の陶湘の所藏品の目録を示した[7]。陶湘は藏書家であるだけでなく、非常な愛書家で、その藏書は裝本にすこぶる意を用い、「木箱まで吟味して造り、之に文字を刻したる入念ぶり」であったため、その價は相當高くなることが豫想された。しかし倉石は「百萬の疏品を備ふるよりも、この一精藏を基礎」とするのが最上であると判斷し、その購入を外務省に働きかけるよう松浦に促した。さらに甲乙兩案を併用することで、清朝文集や經解單行本が補入し得る可能性を說き、その乙案の費用に一萬圓ほど欲しいというのが倉石の考えであったが、その後の成り行きを見ると、これはそのままの形では實現しなかったようだ。注目すべきは倉石が「若しこれ丈の叢刻を備へて其の分類目録を完成されんか、叢刻に惱める學界にとりて一大福音と存候」と言っていることで、後に研究所がその藏書目録を編纂する際に採用した方向性を既に打ち出している點であろう。その分類目録は戰爭最中の昭和十八年（1943）、『東方文化研究所漢籍分類目録 附 書名人名通檢』として出版され、倉石の豫想通り學界に大きな利便を與えることとなった[8]。

---

[5]東方文化事業關連ファイルの内「昭和四年五月 海源閣藏書出售ニ關シ報告ノ件」を參照。

[6]倉石書簡（一）に「研究所にて一家の藏書を購置せらるるの案成立致し候由、御同慶の至に御座候。よって早速徐森玉先生を訪うて、その幇忙を敦請致し候」とあり、これは松浦嘉三郎の五月五日付け書簡に對する返事であるから、松浦はこの時點で狩野直喜の意を承けて、倉石に依頼したものと思われる。

[7]この待賈書目は倉石書簡（三）に附して京都に送られ、すぐ狩野直喜から服部宇之吉の許へ寫しが送附され、更には外務省文化事業部にも屆いた筈であるが、傳わっていない。

[8]增補新版は『京都大學人文科学研究所漢籍分類目録 附 書名人名通檢』として、1963-65 年に刊行された。『東京大學東洋文化研究所漢籍分類目録』は、ほぼ同じ編集原則に基づいて作られている。人文科学研究所の漢籍目録にはまた『京都大學人文科學研究所漢籍目録』（1979-80）があるが、これは叢書の子目を分出した分類目録體ではなく、物理單位としての書物を四部分類順に竝べたも

倉石はまたこの蔵書の購入には、金額もさることながら時間も大きく影響することを指摘し、「相成る可くは研究所より東京に人を派し、膝詰め談判にかけ至急御決定あり度」と書き送り、もし購入決定の連絡を受けた場合には、「小生直に下津の上、詳細に調査を加へて責任を明に致す心算に有之候」と決心の程を披歴している。やがて購入の仲介をした徐森玉から價格三萬圓の連絡がもたらされ、それは六月十九日、電報により京都の松浦嘉三郎に通知された[9]。

倉石からの連絡を受けた京都研究所では、所長狩野直喜が倉石の提案を容れ、陶湘藏書の購入に向けて動き出すことになる。狩野は先ず七月一日に文化事業部長の坪上貞二に宛てて書簡を認め、倉石の紹介になる陶湘の藏書五百九十五種を文化事業部で購入して貰いたい旨の依頼を行った。狩野はまた「右書籍ヲ當局ニテ御購入相成候節ハ、之レヲ二分スルハ面白カラス、此次ノモノハ京都研究所へ御下附相成度、此事ハ豫メ服部東京研究所長ノ諒解ヲ受置候間、右御含被下度相願候」と付け加えることを忘れていない[10]。ちなみに東京研究所のほうでは以前から浙江青田の徐則恂（1874-1930）の東海藏書樓藏書を購入する話が進んでおり、昭和四年十月にこれを三萬四千弗で購入した[11]。

京都の研究所では、狩野所長が坪内東方文化事業部長に手紙を書いた七月一日、同時に北平の倉石に對して打電し、購入の方向である旨を傳え、松浦も詳しく書信でその後の展開を說明したらしい。そこには書籍購入のために狩野所長が東京の文化事業部まで足を運ぶであろうことも書かれてあったらしい。そこで倉石は急ぎ七月十一日に徐森玉を訪問した。その頃、巷間には陶湘の藏書は目録と内容とが一致しないなどという風說があったりしたため、それを問いただすためである。徐森玉は陶湘の實弟である陶洙（字は心如）をその場に呼び寄せ、陶洙から風說が根據のないこと、むしろ目録以外にも書物があるということを確認し、購入が決定次第、天津に調査に赴くことの約束を取り付けた。狩野は豫定通り東京に行き、直接に文化事業部に對して陶氏藏書の購入方を依頼した。當局が正式にそれを認可したのは七月十二日である。狩野は早速、東京から京都の松浦に對して電報で「書籍、買ふことに決まった」と知らせている[12]。同じ七月十二日には、外務省か

のである。したがって子目は各叢書の項目下に書き出してある。

[9]2-1 倉石書簡（附二）の電報。

[10]2-2 關係文書（一）。

[11]購入契約締結の日付は昭和 4 年（民國 18 年）10 月 17 日、書物が實際に東京研究所に到着したのは 12 月である。その關連資料は外務省外交史料館東方文化事業ファイルの中に「東海藏書樓書籍購入」の標題で保存されている。また最新の研究として巴兆祥「日本劫購徐則恂東海樓藏書始末考」『文獻』2008 年第 1 期、131-142 頁が詳しい。

[12]倉石書簡（附三）。

ら幣原外務大臣名で天津の岡本総領事に對して電報が送られている[13]。それは、やがて倉石が陶湘藏書購入の下調べのため天津に向かうこと、その調査終了後には結果を電報で報告せよという内容であった[14]。

二、天津における調査

倉石は七月二十六日早曉にようやく陶洙の同道で天津に向けて出發、同日の午後に天津に着いた。當時京大の大學院學生で、北平に留學中であった水野清一が助手として同行した。その直前、陶湘は天津に居らず、二十九日に天津に歸るという豫定を聞きつけての、慌ただしい旅程であった。倉石の心つもりでは、二十七、二十八日を調査に充て、二十九日徐森玉が天津に來るのを待って正式調印という手筈であった。外務省からも二十六日發で天津総領事に宛て電報が發信され、倉石の調査に協力すべきこと、調査の結果を、圖書の總册數、帙數、印刷製本の良否、價格の點などにつき、倉石から聽取のうえ、その大要を電報で、詳細を郵便で報告するようにという指令が爲されていた[15]。

ところが天津特別一區十號路の陶氏自宅に於ける調査は、案に反してすこぶる難航した。それは陶湘の示した目録が不備であったこと、個々の書物の配置に原則がなく、また天津に置いていない書物もあったりして、圓滑な調査を妨げたこと以外に、陶湘自身のぬらりくらりとした態度に翻弄されたためである。倉石は相當に手古摺ったらしく、松浦宛の書簡で、かなり強い調子で陶湘を非難し、「殊に目録中重要の書、たとへば秘册彙函、八旗通志、原刻汪氏遺書の如き、誤りて書き入れたりと稱し、又はかかるものなしとさへ公言して極力抹消を計り、殆ど讀書人の態度に非ざるものあり」と書いている[16]。購入には正確な目録作製が不可缺であり、倉石が天津に來た目的は、書物を一々實檢した上で、その目録を作製することだった筈で、個々の書目について、あれは駄目これは駄目ということでは、一向に仕事が捗らなかったことが想像される。そんなわけで再び徐森玉に天津までの出馬を要請し、調停を圖るしかなかった。結果、當初提示された目録から十九種を除外、それ以外のすべてを購入することにし、除外した分の代償として、「瓦礫を捨てて珠玉に替ふるの目的の下に」、別の十三種を要求したところ、幸い陶氏

[13]關係文書（二）。電信案が起案されたのは十一日だが、關係文書（三）によると實際に電送されたのは翌十二日である。
[14]2-2 關係文書（二）。
[15]2-2 關係文書（三）。
[16]倉石書簡（七）。

の承諾を得た[17]。その經緯は倉石書簡（七）及び倉石の外務省宛報告書[18]に詳しいが、驅け引きの活寫については斷然前者が光彩を放っている。

かくして二、三日で終了する豫定であった天津の點檢調査は、大幅に延長を餘儀なくされ、八月三日にようやく完了した。二日から開始した箱詰め作業は、水野清一が助手として熱心に働き、また三井洋行社員の援助もあり、五日間かけて六日に完了した。箱詰めされた數は總計百八十八個に達した[19]。八月七日、これらを陶氏の自宅車庫から搬出し、表面上イギリス租界の金城銀行に對する抵當の形式とし、隣接する通成貨棧に運び入れた。そこから先は三井と領事館に任せるのみである。

それ以前の八月一日、岡本総領事は先の外務省からの指令に基づき、倉石の調査結果を蹈まえて、「圖書の總册數二萬四千六百十四册アリ、帙數三千八百三十四帙ニシテ、印刷製本ハ孰レモ可良ナリ。右ノ外現在北平ニアルモノ約三百五十册五十帙モ加ハル筈ニテ、價格三萬一千弗ニ折合ヒタリ」と外務省宛に電報で報告し、併せて代金の送附方を依頼した[20]。それに對し外務省では、八月三日、「御申越ノ書物代金三萬一千弗至急電送スベシ」と返電した[21]。書籍代金送附の報に接した倉石は、代金が到着した曉には[22]、そのうち三萬元を陶氏に手渡し、それに對して三萬一千元の領收書を受け取るかわりに、倉石自身が陶氏に一千元の領收書を交付し、その一千元を徐森玉に謝禮として贈るべく手配を行った。この邊り些か微妙であるが、事實そのように行われたに違いない。八月七日、倉石は松浦宛にそのように報告している。倉石はこの日の夜、關係者を招いて會食しその勞を犒った。かくして倉石の天津における調査は終了した。

三、書物の搬送と到着前後

百八十八個の木箱に分裝された書物は、八月二十日發の近海郵船南嶺丸で天津から積み出された[23]。北平公使館から本省に宛てた公用文書として、通關手續きは

[17]除外分と代償分の書目について、書簡（七）と外務省宛報告（關係文書十七）とでは若干の出入りがあるが、いまその數字は後者に據った。

[18]2-2 關係文書（十七）。

[19]詳しくはビール箱が百八十七個、それと同じ大きさの木箱一個。

[20]2-2 關係文書（四）。この電報の内容は、文化事業部から京都の狩野直喜にも報告された。關係文書（五）。

[21]2-2 關係文書（六）。ただし

[22]三萬一千弗の代金は八月十日までには到着し、取引は終了した。しかしそれ以外に、荷造り料や倉敷料、保険料などの經費が必要で、天津領事館ではその金額一千弗を再度電送するよう本省に對して要請している。關係文書（七）。

[23]倉石書簡（附四）、2-2 關係文書（八～十）

無檢查であった[24]。上に言及した七月二十六日付の外務省から天津総領事に宛てた指令には、「支那現下ノ事情ニ鑑ミ」、この購入の件は内密に取り扱うべき事、購入決定の際には表面上、天津總領事館が購入したことにして本省に送るよう指示されていた。この頃中國國内では古籍の日本流出に對して非常に神經質になっており、こういった配慮が必要であった。この二年後に滿州事變（柳條湖事件、また九一八事變）が勃發すると、北平市政府は古物保存委員會の勸告をうけて、公安局及び社會局を通じて北平の古書肆に對し調査を實施し、日本への輸出を行うものがあれば古物保存法に基づき嚴重處罰することを決定した。それに對して琉璃廠や隆福寺の古書肆のほうでも相應の對策を講じたため、この輸出禁止措置は畫餅に歸したと傳えられている[25]。ただ大量の古籍善本の國外流出に對しては、以前から中國知識人が危機感を抱いていたことは事實であり、陶氏藏書購入に際しても愼重な扱いが不可缺とされたのである。

南嶺丸は二十四日神戸に入港したが、まだ日本側の通關手續が必要であった。外務省では吉田茂外務次官名で河田烈大藏次官に對して公信を送り、神戸稅關に對して特に簡易通關にするよう通知してほしい旨の依頼がなされた[26]。また荷物の受取には船荷證券が必要であったが、二十一日付で天津から送附された證券及び海上保險證は月末になってようやく外務省に届き、八月三十日文化事業部から狩野の許に轉送された[27]。その後すぐに手續きが行われ、すべての書物は無事京都に運ばれたと想像されるが、その邊りの關連文書は缺けていて、實際に何時京都に到着したかは不明である。いずれにせよ京都では大量の書物を目の前にして、その點檢に相當な時間を費やしたことと思われる。その仕事は當然主として松浦嘉三郎が擔當したはずである[28]。

十月になって北京の古書肆來熏閣の陳杭（濟川）が來日した。來熏閣の主人陳杭は琉璃廠の古書肆の中でももっとも親日的な人物として、倉石をはじめ日本の留學生や學者たちの多くがこの書店から古書を購入している。彼は十月五日出航の南嶺丸に乘船、八日に福岡に着いた。彼は「做套工人」すなわち書帙を作製す

[24] 2-2 關係文書（八）。

[25] 外務省外交史料館所藏外務省記録「東方文化事業關連」ファイルのうち「古籍善本ヲ本邦ニ寄贈」と題する一件に收録する「古籍善本ヲ日本方面ニ禁售ニ關シ報告ノ件」と題する文書（東方文化事業總委員會委員瀨川淺之進が、昭和六年十一月二十三日付けで坪上文化事業部長に提出したもの）を參照。

[26] 2-2 關係文書（九）。

[27] 2-2 關係文書（十三）。

[28] 3-4 陶氏叢書點檢目（擬題）は、恐らくその過程で作製されたものであろう。

る職人を連れて來ており[29]、それを福岡で井上なる人物に託し京都へ送り届けた。倉石が手配したものであることは明かで、研究所が購入した書物の帙を新たに調製するためであった。圖書館の書庫に排架するには、どうしても帙に納めておく必要があり、その爲に來熏閣に職人の斡旋を依頼したものであろう。この事實は外交史料館の文書には見えず、もちろん狩野の承認を得た上でのことであったに違いないが、倉石と松浦との連攜プレーであったと推測される。

さて七月末から八月初にかけての天津調査時點で、書物が天津にはなく、北平に置いてあるとされた部分はその後どうなったであろうか。この部分は全體の金額中に含まれていたため、後はそれらを陶氏から受け取り、日本に送れば好いだけであり、その手續きはすべて倉石の責任において處理することになっていた。しかしそれがようやく片付き、發送することが出來る狀態になったのは十一月二十八日のことであった。内容は通志堂經解六十套、四百八十本をはじめとする十九種八百五十三册である[30]。それをタバコの箱二個、その三分の二の大きさの箱一つに詰めて、前回同樣に公用郵便物として送る算段であった。ところが些か思わぬことが起きた。というのは少し前に北京に來ていた濱田耕作（京大教授）が大學のために購入した書籍一箱を、濱田の學生である水野清一が預かっていたが、水野はその送附證明をどうして行えば好いかに困惑して、倉石に相談を持ちかけてきたのである。水野は先の第一次分の發送を獻身的に手傳ってくれた經緯もあり、水野にとって直接の恩師である濱田の依頼であってみれば、斷りきれない事情があることを察した倉石は、仕方なく濱田のこの一箱を陶氏書籍第二次分とともに、公使館から證明を取って一緒に送ることにした。公使館には内證である。したがって關係文書類ではすべて全四箱となっているが、陶湘藏書分は實際には三箱であった。倉石は十一月二十八日付の松浦宛書簡中で、松浦なり濱田なりから、狩野所長に認可を求めるように頼んでいる[31]。倉石自身も「權宜の處置」と言っているように、今となっては時效であるが、いささかイレギュラーな遣り方である。

ともあれすべての手續きが終了し、北京から天津に運ばれた第二次分の「四箱」は、十二月二十六日に北京を出て、三十一日天津出帆の近海郵船景山丸に積み込まれた[32]。しかし正月の休みもあったせいか、一向に到着の音沙汰がない。北京の倉石も責任上相當氣になったとみえ、昭和五年一月二十四日付の松浦宛書簡で、「陶

[29]工人の數は二人であった。吉川幸次郎「人文科學研究所東方部の漢籍と私」『人文』新館落成記念號（昭和 49 年 5 月）、後『吉川幸次郎全集』第二十三卷に收録、その 640 頁。

[30]數字は「外務省文化事業部寄贈書册目」による。

[31]倉石書簡（九）。

[32]2-2 關係文書（十八）の一月六日發信「堀内謙介臨時代理公使書信」。この機密第四號公信は一月二十四日に外務省に着いた。

書第二批未だ到着致さず候や、懸念の至り」と書き送り[33]、丁度同じ二十四日に、しびれを切らした松浦のほうでも文化事業部の岩邨書記官に宛て、發送以來一ヶ月になるにも關わらず到着しないのはどうしてかと照會している[34]。これも同じ二十四日、文化事業部長の坪上貞二は狩野直喜に宛てて、横濱正金銀行から北平神戸間の運送費の請求があったのでそれを支拂ったこと、同時に船荷證券を轉送したことを報知している。坪上はまたこの日に到着した堀内謙介臨時代理公使の機密第四號公信の寫しも添附した[35]。松浦の照會狀を文化事業部が受け取ったのは二十七日で、ちょうど行き違いになった形である。そうこうして最終的に第二次分の書籍が京都の研究所に到着したのは何と二月二十二日のことであった。狩野はこの日に書籍安着の報告旁々、神戸京都間の運賃十八圓三十一錢を立替て支拂ったことを、文化事業部長の坪上に書き送っている[36]。

かくして第一次、第二次分の書籍全部の整理が終了すると、狩野は「外務省文化事業部寄贈書册目」という目録を作成、昭和五年三月四日に文化事業部に提出した[37]。この目録が昭和四年（1929）に東方文化學院京都研究所が一括購入した陶湘舊藏書の全目ということになる。幸いに外交史料館のファイル中に保存されているので、本册子ではこれを資料3-5として影印することにした。この目録、内題には「武進陶氏藏彙刻部書目」とあり、以下のように分類して書名を列擧し、それぞれの本數を記入してある。

一 經類　三十八種　二千一百七十六本
二 史類　二十七種　三千二百四十七本
三 子類　二十七種　一千七百四十二本
四 集類　三十一種　一千四百八十六本
五 叢刊類　一百六十九種　八千八百九十九本
六 影仿類　十一種　三百四本
七 輯佚類　十種　二百九十六本
八 郡邑類　三十五種　二千二十一本
九 一姓所箸〔類〕　三十八種　七百二十七本
十 一人所箸類　一百五十六種　三千七百三十九本
附 地志類　三十種　二千三百六十一本

[33]倉石書簡（十）。
[34]2-2 關係文書（二十一）。
[35]2-2 關係文書（二十）
[36]2-2 關係文書（二十二）。
[37]2-2 關係文書（二十四）。

さらにこれに第二次送附分を書き加え「右十九種、後寄八百五十三本」として、最後に「總計五百九十一種、二万七千八百六十三本」と結んでいる。第二次分を末尾に付け加える形になっている所を見ると、この目録は當初、第一次分の到着點檢が濟んでまもなく作製されたものであることが分かる。その端厳な肉太の筆跡は、おそらく狩野自らの手になるものである。

これで一件落着、すべてが完了したと思ったところ、運賃の手續きについてちょっとした手違いがあった。本質的なことではないが、資料に加えた手前、簡單に觸れておきたい。

實際には文化事業部のほうで既に支拂濟であった北平神戸間の書籍輸送運賃は、會計處理上、形式的に研究所が支拂うかたちになっていたと見え、研究所から文化事業部に對して請求書を提出することになっていたらしい。十二月二十四日の狩野宛の公信で[38]、坪上はわざわざ請求の際に正金銀行の「メモ」を添附するように要求していた。しかし松浦が狩野から預かっていた坪上のこの書信を遺失したため、翌年三月七日付の文化事業部公信[39]の「追て書」にある正金銀行「メモ」の意味が理解できなかった。松浦はその件に關して坪上に照會[40]、ようやく事の次第がわかり、改めて京都研究所から請求書が提出された。ただしその日付は八月二十六日である[41]。

附：松浦嘉三郎について

上に見たとおり、陶湘所藏の叢書を購入するに際し、一貫してその衝に當たり、もっとも功勞のあったのは倉石武四郎であることは自明である。倉石書簡には公的文書には現れない事柄が細かに綴られているほか、當時の北京の學術界や古典籍市場の様子、日本の學者や留學生たちの動靜についての記述が垣間みられ、學術史の材料として興味深いものがある。この時期の倉石についてはすでに『倉石武四郎中國留學記』[42]があるが、ここに公刊する松浦宛書簡はそれを補うべき資料でもある。倉石はその後、京都大學教授となり、昭和十五年（1940）以後の一時期は、東京、京都兩大學の教授を兼ね、戰後は東京大學の專任となった。多くの俊秀がその門下から育ち、日本の中國學史において誰一人知らぬ者のない大きな存在である。一方、京都にあって書物の受入を擔當した松浦嘉三郎の名を知る人は、

[38] 2-2 關係文書（二十）。
[39] 2-2 關係文書（二十三）。
[40] 2-2 關係文書（二十五）。
[41] 2-2 關係文書（二十七）。
[42] 榮新江・朱玉麒輯注、中華書局 2002 年刊。

現在では極めて稀である。われわれは倉石書簡ほかの關係資料を保存してくれたことに感謝しつつ、この場を借りて松浦嘉三郎という人物について些か書きとめておきたいと思う。

松浦嘉三郎は倉石よりも一歳年長で、明治二十九年（1896）年八月、大阪東區平野町に生まれた。大正三年（1914）三月に大阪府立天王寺中學校を卒業し、同年八月上海の東亞同文書院に入學した。その第十四期生で、愛媛縣の選拔であった。大阪出身の松浦が何故愛媛選拔なのかは、同文書院の公費生が全國各府縣からの選拔の形式をとっていたことと關係すると思われるが、詳細は不明である。翌年の八月夏休みで歸鄉した折、京都大學の夏期講習會において内藤湖南の「清朝史通論」を六日間聽講した。その折、當時泉殿町にあった湖南の寓居を訪問し、はじめてその謦咳に接した。松浦が内藤に私淑するに至る最初の出會である。松浦は大正六年（1917）の六月に同文書院を卒業しているが、その年の四月すでに京都帝國大學文科大學史學科に選科生として入學している。同專攻の丹羽正義の回想によれば、松浦は「明るい、悠々たる、そして親切な人柄はたのもしいものでした」と評されている[43]。もとより湖南について中國史の研究に邁進する決意であり、大正九年（1920）三月には、史學科支那史學專攻を卒業している。この支那史學というのは湖南のために設けられた專攻だといわれ、卒業生の數はごく僅かである。京大の卒業生名簿によると、松浦以外には、丹羽正義（大正 6 年卒）、神田喜一郎（大正 10 年卒）、内藤雋輔（大正 10 年卒）、小竹文夫（昭和 3 年卒）、藤田至善（昭和 6 年卒）の名が見えるに過ぎない。ちなみに少し後輩にあたる小竹文夫は、松浦と同じく同文書院の出身で、京大を卒業してから母校の教壇に立った。小竹は昭和四年五月頃、文化事業部で康有爲の藏書購入の話が持ち上がった時には、狩野直喜の推薦で藏書の檢分に當たっており[44]、本稿の主題とも若干の關係を有する人物である。

松浦は大學卒業と同時に京都東山中學の教諭を勤めたが、大正十一年（1922）に北京に赴き漢字紙「順天時報」社の記者となった。同年九月に同じく「順天時報」の記者となった橋川時雄の回想によれば、松浦の入社は橋川より少し前であったというから[45]、おそらく松浦の入社は春から夏にかけての頃と思われる。東山中學

[43]丹羽正義「内藤先生」『内藤湖南全集』月報四（第十一卷附録）昭和 44 年 11 月刊。

[44]外務省外交史料館東方文化事業ファイル「康有爲ノ藏書ノ件」に收録される狩野の書信に「上海同文書院教授ニ小竹文夫ト申スモノアリ。京都文學部之卒業生ニ有之候。若之如きものに御依頼有之候ハバ都合よろしからむと存候」とある。上で見たとおり、康有爲の藏書は購入に至らなかったが、おそらくこの時の緣であろう、數ヶ月後、東京研究所が徐則の東海藏書樓藏書を購入する運びになったとき、同年八月にやはり依頼されて書物の調査に當たった。小竹の自筆の調査報告が東方文化事業ファイル中の「東海藏書樓書籍購入」に殘されている。

[45]今村與志雄編『橋川時雄の詩文と回想』2006 年、汲古書院刊、130 頁。

を辭したとすれば、三月の學年を終えた直後か、或いはその少し後のことだったに相違ない。松浦はこの新聞社で八年ほどを過ごした。その間、師の湖南とは連絡を絶やさなかったようで、時には湖南の依頼に應じて北京で資料の收集を手傳ったりしたこともあった[46]。

昭和四年（1929）に東方文化學院京都研究所が成立すると、松浦はその研究員となった[47]。三十三歲であった。發令は五月一日付で、松浦は順天時報社を五月四日に退社し[48]、京都に歸ってきた。おそらく湖南の推輓になるものであろう。研究員就任後、すぐに陶湘藏書の購入に當事者として立ち會うこととなったのは上に見たとおりである。この時期の松浦は、大谷大學や龍谷大學で講義を受け持つとともに、『支那學』の編輯も擔當することになり[49]、多忙な、しかし充實した日々を過ごしたように見える。昭和五年（1930）四月には、師の内藤湖南及び地理學の小川琢治教授の依頼を受け、楊守敬の『水經注疏』稿本を求めて上海から武昌に入り、楊守敬舊宅で孜孜として原稿に筆削を加えていた弟子の熊會貞に面會している[50]。同じ昭和五年の秋、一乘寺の詩仙堂で樂群社の雅會が催された時、師に從ってその末席に連なったこと[51]、昭和七年（1932）十月、師とともに天理圖書館の開館二周年記念講演會で講演を行ったことなどは、松浦の記憶に長く留まったことと思われる。しかしその幸福な時間も永遠ではなかった。昭和九年（1934）六月二十六日、師の内藤湖南が惜しまれつつ逝去したからである。松浦は同年の九月三十日、五年間の研究の區切として「漢書百官公卿表の一研究」を提出して東方文化學院京都研究所を退職した[52]。同じく創立時期に研究員となった人々が、長く

[46]董康（1867-1947）が所藏する敦煌寫本の寫眞を複製してくれるように頼まれ、それに應じたときの湖南宛書翰（昭和二年三月）が關西大學に殘されている。拙文「内藤湖南の敦煌學」『東アジア文化交涉研究』別册 3（2008）、25-26 頁。

[47]給與は年額一五六〇圓で、一ヶ月早く着任した梅原末治、同じく五月一日付着任の能田忠亮、塚本善隆等の一四四〇圓よりもやや高いのは、年齡と職歷によるものであろう。ちなみに主任の狩野直喜の給與は年額三千圓であった。東方文化事業ファイル「東方文化學院關係雜件／經費關係第一卷、昭和四年度助成金」。

[48]上掲『橋川時雄の詩文と回想』130 頁に引用される順天時報社「社員異動録」による。

[49]同誌の奥付の頁には毎號「支那學社簡章」が掲載されているが、その末尾に董事の本田成之、小島祐馬、青木正兒と竝んで、昭和四年十月刊行の第五卷第三號以降、同九年七月刊行の第七卷第二號まで、編纂として松浦嘉三郎の名が見える。ちなみに松浦以前の編纂は神田喜一郎、吉川幸次郎、倉石武四郎の三名であった。三名で擔當していた雜誌の編輯を一人でやるには相當な時間が割かれたに違いないが、松浦はこの時期『支那學』各號に後に掲げるような新刊紹介を執筆するほか、「學界雜報」にも多數の記事を書いているのは、編集者としての職務上致し方なかったものと思われる。

[50]日比野丈夫「楊守敬の『水經注』研究」『中國歷史地理研究』（京都: 同朋舍、1977 年）387 頁。

[51]拙文「李滂と白堅（補遺）」『敦煌寫本研究年報』第二號（2008 年 3 月）、186-187 頁。

[52]退職の日付は昭和十年十一月刊行の『東方文化研究所要覽』「舊役員及職員」欄による。ただし東方文化學院の理事會において辭職が承認され、それが文化事業部に報告されたのは十月二十五

研究所に留まり、その學問を大成させたのと對比すると、松浦の早期退職はかなり異例なことのように思える。

松浦は師の沒後まもなく、滿州國の大同學院教授に赴任すべく日本を後にすることになる。雜誌『支那學』第七卷第六號の「學界雜報」には「松浦嘉三郎氏滿州國赴任」という見出しを掲げ次ぎのような記事を載せている：「東方文化學院京都研究所研究員であり、又本誌編纂擔當者であった同氏は滿州國文教部囑託と爲り九年十月十二日新京に赴任されたが近く同國大同學院教授に轉任せらるる筈。」湖南の死と松浦の辭職に何らかの關係があるか否かは不明である。或いは滿州への赴任は湖南の生前に、その推薦によってすでに決定していた可能性もあるが、それもまた今となっては分からない。ただ湖南が生前に準備し、中國で印刷したいと考えていた漢文集の原稿を、自分が印刷を引き受けると言って、中國に赴任する時に攜帶していったと言われるから[53]、最後まで師恩に報いようとしたことが窺われる。いずれにせよ昭和九年十一月二十三日に湖南の追悼會が催された時、松浦はすでに大陸の土を蹈んでおり、これに出席することが出來なかった。

滿州國の首都である新京（長春）に赴任後、暫時、同國文教部囑託となった後、大同學院教授に着任した。大同學院は滿州國における官吏養成機關で、その學生は大學卒業者あるいは行政官經驗者を採用、修学期間中は給與が支給された[54]。松浦はこの學校で中國史を講じ[55]、また昭和十年（1935）夏には第一部の學生十名を連れて日本見學旅行を行い、翌十一年には第二部第四期生十班百名からなる旅行團を引率して各地の工場や施設を見學した記録が殘っている[56]。康德四年（1937）、滿州朝鮮史の大家稻葉君山（1876-1940）が建國大學の教授として新京に赴任、大同學院でも教鞭を執ったので、その逝去に至るまでの三年間は極めて親しく交わった[57]。康德四年（1937）十二月には、建國大學から派遣されて稻葉等と共に北京に

日である。東方文化事業ファイル「昭和九年十月京都松浦研究員ノ辭職外理事會承認」を參照。また東方學報（京都）第六册（昭和十一年二月）374 頁彙報欄の「研究員研究結果報告提出」の記事には「右は十年四月研究期限滿了の處、九年九月退職に付き其一部を提出」とあるから、任期滿了を待たずに退職したのである。

[53]内藤乾吉『内藤湖南全集』第十四卷「あとがき」、昭和 51 年 7 月刊。

[54]大同學院には第一部と第二部の別があった。第一部は本來「日本ノ高等專門ノ教育ヲ受ケタル者ヲ收容」するものであったが、中華民國又は舊政權時代に高等教育を受けた滿州の青年中から優秀な者が選ばれ編入された。一方、第二部は「滿人青年官吏中ヨリ優秀ナル人材ヲ簡拔シ王道建國ノ精神ニ基キ訓育ヲ施シ國策ノ大綱ヲ體セシメ國家建設ニ精進スル有德有爲他ノ模範タルベキ官吏ヲ養成スルヲ以テ目的」としていた。（『康德三年度 大同學院第二部第四期生視察旅行團日程及名簿』に掲げられた「滿州帝國大同學院第二部設置ノ目的」による。）

[55]井村哲郎「岩崎健叟氏ヒアリング記録（I）——大連稅關・大同學院・滿州國關稅科」『環日本海研究年報』第 6 號（1999）、122-124 頁。

[56]東方文化事業ファイル「滿州國大同學院學生見學ノ件」他。

[57]松浦「稻葉君山博士の追憶」『書香』第 125 號（昭和 15 年）3-4 頁。

出張した。その使命は盧溝橋事件後に日本軍が北京を占領したことを承けて、同地にある文獻古籍を滿州國に譲り受ける可能性があるかどうかを探ることであった。當時、滿州國では建國大學に附屬して國立圖書館の開設を企圖しており、その藏書を充實させるために目を付けたのが、故宮の檔案と外務省管下にある東方文化事業總委員會の圖書とであった。翌年の一月一九日付で提出された復命書が殘っているが[58]。その結論では、「故宮ノ材料ニツキテハ、今暫ク緘默シテ事態ノ推移ヲ靜觀スベシ」とされたが、「東方文化圖書館ノ方ニツキテハ、外務省ニ極力運動シテ、之レヲ滿州國へ移譲セシムル樣決意ナサシムベシ。而シテソノ可能性アリ」とされている。この結論に基づき、翌年の二月二十三日、建國大學の擔當者と陸軍省軍務課の本間誠少佐が外務省を訪れて、東方文化事業總委員會圖書の滿州國立圖書館への譲渡方を申し入れた。この唐突なプランが軍主導による極めて強引なものであったことは容易に推測されるが、外務省側は當然ながらこれを拒否した[59]。松浦がどれほどこの計畫に積極的に關與したかは分からない。しかし東方文化事業總委員會の圖書の實質的責任者は、奇しくもかつての順天時報社の同僚橋川時雄であった。この件につき、二人が北京でどのように話したかについては徵すべき資料がない。兩人共に複雜な心境だったであろう。

松浦はまた康德六年（1939）七月から奉天の國立中央圖書館舊記整理處長を兼任したが、同八年（1941）三月に解職、ふたたび大同學院專任となった。その間、母校である東亞同文書院大學の同窗會の委託を受けて、書院の現狀及び改善策に就いての調査報告を行っている[60]。かくして松浦は大同學院教授として終戰を迎えることになるが、それ以後の消息は杳として知れない。ソ連軍に殺害されたとも傳えられ、厚生勞働省の「舊ソ連邦及びモンゴル抑留中死亡者名簿」のうち資料未提供者名簿（ソ連から名簿の提供されていない）に松浦嘉三郎の名が見えているが、他の死亡者のほとんどが「推定される死亡場所」として、某州の某收容所或いは某病院とあるのに對して、「ソ連」としか記載されていないのはかなり異常である。將兵でもなく軍屬でもない松浦の身に何が起こったかは知るよしもないが、まさしく「終戰の混亂時に犧牲となった」[61]というしかない[62]。

---

[58]東方文化事業ファイル「昭和位十三年二月總委員會書庫所藏書籍譲方ニ關スル件」に含まれる「康德四年十二月北支出張調查復命書」。

[59]上記東方文化事業ファイル「昭和位十三年二月總委員會書庫所藏書籍譲方ニ關スル件」を參照。

[60]後掲著作目録中の「同文書院の現狀竝に其改善策に関する調查報告書」。

[61]『東亞同文書院大學史』(滬友会、1982 年）には「松浦嘉三郎（愛媛）昭和 10 年秋、王道樂土の新國家建設のため渡滿。大同學院出の鵬翼を伸ばす暇もなく、終戰の混亂時に犧牲となった。」と書かれている（447 頁上欄）。

[62]筆者は、滿蒙資料協會『第三版 滿州紳士録』（昭和 15 年刊、また『滿州人名辭典』として 1989 年日本圖書センターより影印刊行）89 頁の記載などをたよりに、かつて松浦の遺族を捜したこと

松浦嘉三郎著作目録[63]

「船室にて」『風餐雨宿』東亞同文書院大旅行志 14 期、大正 5 年（1916 年)

「下關媾和會議」『中央史壇』第 4 卷第 1 號、大正 11 年（1922 年）

「日支勞働爭議の嚴正批判」『外交時報』第 498 號、大正 14 年（1925 年）

「教室に於ける西村先生」『懷德』第 2 號、碩園先生追悼録（大正 14［1925］年 2 月、懷德堂堂友會)

「斯文之厄運」『文字同盟』第 4 號（1927 年 7 月）

「儀禮の成立に就て」『支那學』第 5 卷第 4 號（1929 年 12 月）

「字の起源に就いて」『桑原博士還曆記念東洋史論叢』（1931 年 1 月）

「支那古代の長子相續制度」『東方學報』第 1 册（1931 年）

「九族考」『支那學』第 6 卷第 2 號（1932 年 4 月）

「喪服源流考」『東方學報』第 3 册（1933 年 3 月）

「兩漢時代の廟制」（開所三週年記念講演會講演要旨）『東方學報』第四册（1933 年 12 月）

「漢書韋玄成傳を讀む」『支那學』第 7 卷第 2 號（1934 年 2 月）

「志を抱いて逝かせらる」『支那學』第 7 卷第 3 號附載「内藤先生追悼録」（1934 年 7 月）

「漢書百官公卿表の一研究」東方文化學院京都研究所研究報告（1934 年、未見）

「漢人種の政治的能力」『大亞細亞』昭和 11 年（1936）7 月號

「熊固之翁の追憶」『東方學報』第 7 册（1936 年 12 月）

「稻葉君山博士の追憶」『書香』第 125 號（1940）

「同文書院の現狀竝に其改善策に関する調査報告書」（1940 年、奉天：滬友同窓会奉天支部）

「蔣本東華録の異本に就て」『收書月報』第 50 號（1940）

「滿洲族の衰滅に就ての考察」『大同學院論叢』第 3 輯（1940）

「沈陽圖書館藏明實録に就いて」『滿州學報』第 6 册（1941）

「滿州國經營の體驗」『東亞聯盟』1942 年第 2 期

「思想善導問題に就いて」『東亞聯盟』1944 年第 10 期

新刊紹介

内藤湖南『讀史叢録』、『支那學』第 5 卷第 4 號（昭和 4 年 12 月）

がことがある。その結果、令孫の松浦晉也氏と接觸できた。しかし終戰時、松浦の夫人と令息のお二人が辛うじて内地に辿り着いたことを聞き知るのみで、詳しいことは分からないというお話であった。

[63] ここには氣が付いたものはすべて擧げておいたが、遺漏も多いと思われる。大方の示教を請いたい。

M. Granet, *La civilisation chinoise.* Paris, 1929、同上

中央研究院歷史語言研究所『安陽發掘報告』（第一期）、同上

矢野仁一『支那近世外交史』、『支那學』第 6 卷第 1 號（昭和 7 年 1 月）

圖書寮編纂『圖書寮漢籍善本書目』、同上

謝國禎『清開國史料考』、『支那學』第 6 卷第 2 號（昭和 7 年 4 月）

梅原末治『歐米に於ける支那古鏡』『漢三國六朝紀年鏡集録』、同上

瀧川龜太郎『史記會注考證』、『支那學』第 6 卷第 3 號（昭和 7 年 7 月）

〔隋〕蕭吉『影印三寶院本 五行大義』、同上

石田幹之助『歐人の支那研究』、同上

岡崎文夫『魏晉南北朝通史』、『支那學』第 6 卷第 4 號（昭和 7 年 12 月）

郭沫若『金文叢攷』、同上

Owen Lattimore, *Manchuria: Cradle of Conflict*、『支那學』第 7 卷第 1 號（昭和 8 年 5 月）

講演

「上海租界小史」（東洋史談話會、1932 年 2 月 14 日、樂友會館）未發表

「四庫全書について」（天理圖書館開館二周年記念講演會講演、1932 年 10 月 18 日）未發表

「兩漢時代の廟制」（開所記念講演會、1933 年 11 月 11 日、東方文化學院京都研究所講演室）『東方學報』第 4 册（1933 年 12 月）に要旨掲載

2-1　倉石武四郎致松浦嘉三郎書簡（翻刻）

一、昭和四年端午節

二、昭和四年六月七日

三、昭和四年六月十三日

四、昭和四年六月二十三日

五、昭和四年七月十一日

六、昭和四年七月二十六日

七、昭和四年八月七日

八、昭和四年十月五日

九、昭和四年十一月二十八日

十、昭和五年一月二十四日

附一、昭和四年十月九日來熏閣陳氏致松浦嘉三郎信札

附二、倉石發往松浦電報

附三、狩野直喜發往松浦嘉三郎電報

附四、倉石武四郎發往狩野直喜電報

一、昭和四年端午節

敬覆、本月初五發大札敬誦申上候。研究所にて一家の藏書を購置せらるるの案成立致し候由、御同慶の至に御座候。よって早速徐森玉先生[1]を訪うて、その幇忙を敦請致し候処、現に鄧家に一批の品あり[2]、この事李木齋[3]より秘かに聞けるものにして、外間には全く知れ居らず、その特色は叢書に富むに在る由に候乍ら、南京にも洪家の藏書あり[4]。その目録は或は御在平中に御目にかけたるやも知れず候が、謄寫版の一厚册たりし。これは徐先生も推薦出來るもの乍ら、現状の如何を詳にせざる由。よってこれらの秘密調査を依頼して、已に其の快諾を得事候。吉左右は暫時御待ち下され度奉願入候。第二案は實は小生が大學に對して勸告したると同一手段にて、原則は極めて贊成に候へども、何等の基礎なくして直に之を實行するときは、麻煩は可忍とするも、書價の上に大差を生ずるは自明の理に有之候間、愚見を以てせば、第一第二案を併用することが最も策の得たるものと存候。比如ここに一家の貨ありて、三萬元にて話纏りなしたるとき、これに一萬元を加へて四萬元として、坊肆等より補入し、研究所の基本藏書とすることに候。何卒御高見相伺度事に存候。次に當方より要求申上度は、先回楊家の覆轍に鑑て[5]、あらかじめ外務當局と周到なる打合せをなしおかれ、臨機の処置に便され度、折角徐氏が價を説好され乍ら、一月も決定し難きことありせば、徐氏の面目に對しても相濟まず候。ついては大体外務省が（東京に對する比例も有之可候）京都研究所の爲に臨時交付す可き費目の最大限を豫め御内報願上度く、然る上にて當方より電報にて結果報告、即刻決定致すことと可相成候。勿論運によりて豫定し難きことにつき、衙門に對し言質をとることは頗る困難ある可く候へども、そこは瀬川老人[6]を如何すると同様の方法にてよろしく出來る筈と存候。なほ送金の方法も決定次第即時に發送できれば申分なきも、若し會計法を楯どりて之に應ぜざると

---

[1]徐森玉（1881-1971）、名は鴻寶、字の森玉で行われることが多い。目録學、版本學に通じ、北京大學圖書館長、北平圖書館採訪部主任、故宮博物院古物館館長などを勤めた。新中國成立後は上海にあって、上海市文物保管委員會主任、上海博物館館長などを歷任した。日本との關係で云えば、東方文化事業總委員會の圖書部主任でもあった。

[2]恐らくは鄧邦述（1868-1939）の群碧樓藏書を指す。

[3]李盛鐸（1858-1937）、字は椒微、木齋はその號。江西德化の人。光緒十五年（1889）の殿試において一甲二名の榜眼で進士及第、翰林院編修を授けられた。京師大學堂總辦、出使日本欽差大臣、同ベルギー欽差大臣などを歷任し、革命後は袁世凱総統府政治顧問、參政院參政、農商總長、參議院議長などの要職を歷任した。藏書の富を以て聞こえ、李家三代によって蓄えられた木犀軒藏書は、民國期最大最善のコレクションの一であった。藏書のうち、敦煌寫本が日本に歸した以外、殆どすべてが 1939 年の末、末子少微により北京大學文學院に賣却された。

[4]南京洪家は不明。

[5]山東聊城の楊氏海源閣藏書を指す。文化事業部では昭和四年五月頃、海源閣藏書の購得を圖ったが成功しなかった。

[6]瀨川淺之進（1862-?）、明治・大正期の外交官。中國各地で勤務し、大正十二年退職時は漢口総領事であった。その後、外務省囑託、對支文化事業委員となり、大正十四年（1925）五月北京に設置された東方文化事業総委員會の総務委員を務めたが、昭和七年（1932）十月に歸國退職した。ちなみにその後の東方文化事業の實務は橋川時雄（1894-1982）が総務委員署理として引き繼ぎ、終戰に及んだ。ここに云う「瀨川老人を如何すると同様の方法」が具體的に何を指すかについては不明。

きは、外務方面には秘密にて金子を弄出して速に事を運ばざる可らざるやも知れず、其の辺の御理解は固より（手付金及全額につき）方法等につきても十分御援助相願度候。第二案による追加壹萬元は十分小生には蒐求すべき自信有之、蒐求が壹萬元に滿ちたるときに打ちきればよろしく、決して其の額に充たざる様の患は無之候。前便御願致候大學に於ける清人文集の目録は、事茲に至るときもやはり必要は十分に有之、何卒一日も早く惠寄相願度存候。餘力あらば他の部分、即ち經部史部子部及叢書とも、拙速にてよろしく候間、目録陸續調製下され候はば、活動上の便宜之に如き不申候。以上數件は當方より折入りて御依頼申上候。枉げて御允諾の程、奉願上候。先は當用のみ如此に候。

松浦先生文安　　武四郎拜
端陽節

二、昭和四年六月七日

敬覆、御歸朝第一信第二信相踵ぎ奉接仕候。研究所も愈々開辨の運に至り申候由、創業の重責を負うて御鞅掌の御事、欣慰の至に奉存候。御照會の書價に就ては、文奎來薫の二家とも或は目下存書なきものも有り〔（　）を附す〕候へども、大体

	文奎	來薫
十三經注疏 阮刊原刻本		一八〇, ○○ 晩印書品不甚佳有三部
皇清經解續編 初印本		（九〇, ○○）近來少
~~二十四史 竹簡齋本~~		~~（七五, ○○）~~
九通 局刊		三○○, ○○ 印的平常
漢魏叢書 三十八種木刻本		
影印本		（二一, 六〇）商務印
册府元龜 鮑刻		（一八〇, ○○～二○○, ○○）
二十二子全書 局刻		二二, ○○ 印的平常
玉函山房輯佚書 湖南刊	三〇, ○○ 平常	二四, ○○ 晩印難看
山東刊	三二, ○○ 平常	
漢學堂叢書		（五〇, ○○～八〇, ○○）
（黄氏逸書攷）增益五十餘種	（豫約六五元 蟫隱廬中國書店等已出版）	
續礼記集説	十六, ○○	
~~四庫總目提要 並 簡明目録 廣東小板~~	~~三五, ○○ 凡簡明目録を帶ぶるものは初印本たり難し~~	~~三三, ○○ 書品不佳~~
四部叢刊　白紙		（六○○, ○○から五五○, ○○）
黄紙		（四五○, ○○）
全上古三代秦漢六朝文		（七五, ○○）
經籍纂詁 原刊	一六, ○○ 帶補遺のもの故初印はなし	二六, ○○ 白紙 この書竹紙晩印

學津討原	木刻	五〇〇, 〇〇 鳳禹川舊藏本	四五〇, 〇〇
	影印難覓		(一〇〇, 〇〇？)
五礼通考讀礼通考		一六〇, 〇〇 濶大	一二〇, 〇〇

以上の如くに御座候。この表により直に御賢察ある可しと存候へども、かかる平常の書は晩印書品の不佳なるものはザラに有り候丈に、精印の書を覓むることは却て困難なれども、勿論これは實用の目的により特に御選擇とは存上候ども、一面より云へば實用として頻繁に檢索さるる丈、最も完好のものを備ふ可き乎とも存じ、殊に此等の書の殆ど全部は大學にも有り候間、當坐としては借閲の便宜も可有く、小生の私見としては四部叢刊の如き甲乙なきもの、黄氏逸書攷の如き新印本を除き、その他は少しく悠くりと善本精印を窮搜して、然る後に奉寄する方針に據られては如何かと存申候。その間の應急処置としては、注疏にても經籍纂詁にても、石印を眞の索引用として備へられ候も一法かと存候。二十四史に就ては塚本君[7]とも相談して、竹簡齋本よりはむしろ殿板影印本を購置されんことを御勸め可申上おき候。殿板そのものを購ふことは本來意義少なき上、一万円の圖書費にては何時購へるやらと存上候。さりとて二十四史と名ざす限り殿板の内容なくしてはこれも相濟まず、よって老石印二種（同文書局、五洲同文書局即涵芬樓本）中、大學に備へつけざる一種の購入を推薦したる所以に候（殿板の行格を變じたるものは更に必要なしと存じ、又五局合刻本を購ふ程ならば、底本たる十七史を購ふ方がましに候様存ぜられ候）。要するに愚見としては、これ又平常の書は何時にても覓むれば必ず獲るもの故、強ひて時間を急ぎ書品の不佳なるものを購はるるは、悔を百世に貽す虞あり。もし相當の豫算さへ保留され候はば、この二家をして十分吟味せしめたる上、遅くとも今學年度位にはほぼ選択を了する様に取計ては如何かと存候迄に御座候。御高見御洩らし下され度奉待入候。北京は何と申すも舊書の淵叢なり、時機次第にては再び獲難き程の逸品も舞ひ込むことあり。研究所を離れて大局より京都[8]の學界に望み度は、やはり大學と協力してなる可く重複を避けて一部一本にても多くの書を將來することに有之候。大學方面にて鈴木[9]、小島[10]兩先生の協贊を仰ぎ、例の清朝經解隨筆並に集部の精密なる蒐集

[7]塚本善隆（1898-1980）は淨土宗の僧侶にして中國佛教史の研究者。京都の佛教專門學校（現在の佛教大學の前身）、東京の宗教大學（現在の大正大學の前身）を卒業し、さらに京都帝國大學の印度哲學を大正十二年（1923）に、東洋史學を大正十五年（1926）に卒業。昭和四年（1929）五月一日付で東方文化學院京都研究所研究員となり、この當時北京留學中であった。のち京都大學教授、同人文科學研究所長、京都國立博物館長を歷任した。昭和五十二年（1977）日本學士院會員。『塚本善隆著作集』全七卷がある。

[8]日本を抹消、京都に改める。

[9]鈴木虎雄（1878-1963）、京都大學教授、中國文學。昭和十四年（1939）帝國學士院會員。昭和三十六年（1961）文化勲章受章。著作に『支那文學研究』『支那詩論史』『賦史大要』等。漢詩人としても有名で、『豹軒詩鈔』十四卷がある。その舊藏漢籍は京都大學文學部に歸し、鈴木文庫として所藏されている。

[10]小島祐馬（1881-1966）は京都大學教授、東洋思想史專攻。文學部長、人文科學研究所（舊人文）初代所長を歷任。昭和二十四年（1949）日本學士院會員。著作に『古代支那研究』『中國の革命思想』『中國の社會思想』等がある。その舊藏書は故郷の高知大學に歸し、小島文庫として保存されている。

を試之度、就ては大學方面の圖書費は有限にもあり、是非後の尻ぬぐひと申すも憚乍ら、後顧の患なき様、研究所方面の御援助乞ひ度ものに存候。なほ御繁忙の折とて御自身には勿論不可能ならんも、何人かを雇して大學に既に購置せる清人の集部に就き（叢刻中のものは必要なし）書名、著者名、巻數、刊刻年の四項（圖書館既製のカードの侭にて更に妨げ無之、原本の調査には不及申）調査せしむる様、御費心下されまじく候や。むしろこれは拙速を尚び申候間、多少の誤脱は敢て意とせざる所に候。案外肝要なる集すら具はらざることあるは豫ねて闕典としたる所、是非此の機に乗じて一氣呵成に事を臧したきものに日夜念願罷居候。諸老先生も愈々御壯康の由、慶賀の至に存居候。御寓居も一乘寺に卜せられ候由、林下御快適の趣も兼ねられ候御事と欣羨に不堪申候。當地吉川君[11]は病後靜養の爲、去る二日發にて歸國され（大阪市天王寺區北山町二七）、塚本君も本日南遷の途に就かれこれは月末再び歸燕の豫定、駒井君[12]も本日歸國。かくて留學生は鳥山老[13]を除きては延英社中の同人の之を剩すことと相成申候。北大學院も今月二十二三日頃より暑假に入り可申、この夏こそは小學方面に沒頭致度ものに存居候。幸ひ近來支那の青年學者中年學者との交涉も稍々繁く相成り、受益の機會も日に多きを覺え申候 研究所の茶のみ話の資料として、新事實御報知申上候。この程河南にて又もや漢石經の一大塊を發見したる由、即ち後序の一部に係り、曾て徐森玉先生の有にして今國學研究門に歸したるかの後序の一塊に接す可きもの。拓本は天壤間か北京か、ともかく一本あるのみ。原石はなほ河南に在り申候由、二千元位とか風の便りにきき込み申候。

松浦學兄文安　　武四郎拜

六月初七

三、昭和四年六月十三日

至急申入候。本日徐森玉先生回拜に見えられ、別紙の如き目録を示され申候。所藏者は天津の陶氏湘に係り、目録にて御覽の如く、あらゆる叢書彙刻全集等を網羅し、宛然彙刻書目を現物にて示したるものの如く、研究所向きとしては殆ど之に如ぎざる可べく存候。流石に徐先生の推薦だけ有之候。金額は後天徐先生まで通知ある可く、その上にて電報等により速報可申上候。但し陶氏は有名なる愛書家にて、書物の吟味は膏肓に入り、何れも精刻原印に係り、且つ一葉の落頁もなく整備されし上に、木箱まで吟味して造り、之に文字を刻したる入念振りに候間、書價は相當貴きを免れざる可くと存申候。然し永遠の事業としての研究所のその第

[11] 吉川幸次郎（1904-1980）は中國文學者。京都帝國大學文學部卒業後、大學院に進學。この當時北京に留學中であった。歸國後、東方文化學院京都研究所研究員となり、經學文學研究室主任を務めたが、戰後文學部教授に轉じた。昭和三十九年（1964）日本藝術院會員。『吉川幸次郎全集』全 28 巻がある。

[12] 駒井和愛（1905-1971）、考古學者、東京大學教授。原田淑人とともに中國、朝鮮各地で東亞考古學會主催の發掘調査に從事し、數多くの報告書を殘した。著作に『中國考古學論叢』『中國古鏡の研究』など多數。

[13] 鳥山喜一（1887-1959）、東洋史學者、京城帝國大學教授。戰後は第四高等學校校長に任じ、繼いで新制富山大學學長を勤めた。著作に『黄河の水』がある。

一石を打ちこまんとする際なれば、百万の疏品を備ふるよりも、この一精藏を基礎とされ候が最も望ましくと存候。就ては外務省の方面極力御運動の上、此の絶好機會を逸せざる様、呉々も奉祈上候。なほこれは彙刻部に係り、その他にも之に類する鉅多の藏書ある趣、金額次第にては更に他にも及び得ることと存候。若しこれ丈の叢刻を備へて其の分類目録を完成されんか、叢刻に惱める學界にとりて一大福音と存候。なほ偶々この中に漏れたるもの、又は新刻にして未だ補入されざるもの等にて、若干心あたりも有之候間、若し前便申上候如く、甲乙兩案併用の事が秘かに乍ら實現出來得るとせば、小生も犬馬の勞を吝まず候。清朝文集經解の單行本とも至急に收購の上、殆んど完全に近き蒐集として我が學界に貽り度と存申候。何分とも極力通過の様、御費心相願候。徐先生も大のりきにて活動されることなれば、其の面子に對しても然る可く奉願入候。若し電報にて價格申上候場合には（歐文にては手紙より早く着きすぎ候故、和文により可申候）、陶氏の要求額にて徐氏の承認されたるもの（これは再び動かし難き故、打價の見込は無之）をそのまま打電可仕（電文の都合にて單位は萬を用ふることと可致、そのつもりにて御判讀願候）小生としてはこれに一万円位を加へて乙案の資金と致度願間罷在候へども、その辺は研究所の與論に須ちて御返電を待つのみに候。外務省にはなる可く多額の豫算を請求するは最も賢明なる策に非ずやと存事候。申す迄もなくかかる問題は金額と同時に時間も左右すること故、相成る可くは研究所より東京に人を派し、膝詰め談判にかけ至急御決定あり度、支拂の方面につきても充分打合せ相願度存候。若し御決定の電報に接したるときは、小生直に下津の上、詳細に調査を加へて責任を明に致す心算に有之候。賣金は買金に遭遇致候事にて成否は天に在らずして人に在り。これ小生の特に老兄に三度意を致す所以に候（葉德輝の舊藏書中直隸書局にて購へるものは明日大學の爲に何人にも先ちて押へに參る筈に候）。艸々。

松浦先生文安　　武四郎拜

六月十三日

四、昭和四年六月二十三日

敬啓、日前和文電報並に拙書奉寄、夙に御電覽のことと存申候。書價商榷のこと、その後徐先生には會上にて拜晤は致候へども、秘事を議するに便ならず、それに北京は吉川塚本兩君てふ雙手を喪ひ、わづかに水野君[14]の象胥をつとめる事あるのみに候。小生聊か多事多端、未だ實行に及び不申候。但しそれよりも重要なるは研究所の決心に在りと存候。吉川君の通信にても研究所の指導たる可き華人は人さへあれば礼聘を辞せざる方針の由ながら、小生をして云わしむれば、研究

[14]水野清一（1905-1971）は考古學者、京都大學教授。濱田耕作に考古學を學び、京都帝國大學史學科を卒業して、この當時東亞考古學會の留學生として北京滯在中であった。のち東方文化研究所研究員となり、戰後同研究所再編後は京都大學人文科學研究所教授となり、京都大學イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査隊を組織した。長廣敏雄との共著で『龍門石窟の研究』『雲岡石窟』の大册を出版した。

所に決心さへあれば人を獲るは難からずと存申候。購書のこと亦如此のみ。次に叢刻類の補遺たる可きものとして、

塩邑志林　二十四本　二百四十元　巴陵方氏功惠舊藏

校礼堂全集　凌廷堪　六本一百二十元

以上兩種の大物の外、陳鍾祥趣園初集 五元 舒白香集 四十元 呉興沈氏子集 五元 愛梅樓叢書 十八元 等おさへおき申候。就中塩邑志林は十日間の期限にて回答致すことに約束致しおき候間、御購求の際は至急和電ぐらゐにても御返信相煩申候。その他中立四子兩京遺編等も手に入る可能性あり。倪濤の六藝之一録も三千元ならば買へさうに有之候。すべて京都へ齎らす可き書籍選択の標準は、陶氏の書を買ふと否とにより大變動有之候点、殊に至急の御決定奉請候。

松浦先生文安　　武四郎拝

六月念三

五、昭和四年七月十一日

敬啓、本月初一日付電報並に貴翰何れも拝接申候。何よりも武進陶氏藏書に關し、狩野所長[15]はじめ多大の努力を以て購求に尽力され居り候趣、敬承感佩至極に存奉り候。電報拝接と同時に徐森玉先生を訪うて其の意を傳達致し、且つ巷間傳ふる二三の臆説につき之を質し申候処、早速陶氏の令弟心如先生[16]を招き、詳に問審せられ候。幸にしてこれらは全く臆説に過ぎず 目録と内容と符合せず云々、 或は目録以外のものもある可しとの証言にて、頗る安堵致候。且つ愈々決定の際には同氏の東道にて下津し、詳かに調査を遂ぐる旨約束致しおき候間、將來他に買主兒ありとするも、小生若くは徐先生に無斷にて譲渡すること絶對に無かる可く、其の點は御放念下され度候。但し當方が一歩を踏み出せば一歩だけの責任を負ふは當然の事實に係り候につき、決定が一日も速ならんこと切實の至に奉存上候。日本も政變にて政策上の變動若くは事務の澁滯などもあらんかと疑懼のみ申居候。但本件にて狩野所長が老軀を提げて東上せられ候趣は、小生として殊に過意不去の想に堪へ不申候。次に此は小島評議員まで此程申送りたること乍ら、本件に關連し傅沅叔先生[17]蒐集の清人文集類が購收の希望あるを知り申候。これは叢書の如

[15]狩野直喜（1868-1947）、京都大學教授。肥後熊本の人、字は子温、君山と號した。帝國大學漢學科卒、中國留學中義和團の變に遭い、服部宇之吉とともに日本大使館に籠城したことはよく知られる。明治三十九年（1906）、京都に文科大學が創設されるや教授となり、中國文學・哲學を講じた。退休後、東方文化學院京都研究所の初代所長を務めた。大正十四年（1925）帝國學士院會員。昭和十九年（1944）文化勲章受章。生前の著作に『支那學文藪』『讀書叢餘』があり、没後、講義録等を編集刊行したものに『中國哲學史』『兩漢學術考』『魏晉學術考』『論語孟子研究』『春秋研究』『支那文學史』『支那小説戯曲史』『清朝の制度と文學』等がある。また『君山詩艸』『君山文』はその漢詩文集である。舊藏漢籍は京都大學文學部に歸し、狩野文庫として保存されている。

[16]陶洙（1875-?）、字は心如、號は憶園、民國期の畫家で、山水及び花卉を描くに巧みであったと言われる。陶湘の弟で、兄と同樣に藏書家でもあった。

[17]傅増湘（1871-1950）、沅叔は字、また淑和ともいう。雙鑑樓主人、藏園居士と號した。四川江安の人。光緒二十四年（1898）戊戌科において二甲第六名で進士となり、庶吉士に選任、散館後翰林院編修を授けられた。清末から民國にかけての教育界で重きを爲し、宣統三年中央教育會議副會

く大部ならざる丈價格は陶氏に不及こと明かにして、而かもたとへば 顧亭林孔廣森等につき 某箇人の叢書が陶氏の叢刻と重出したる折には之を捨て、若くは買ひうけたる後改めて售出の上、陶氏のものと重複せざる様取計ふときは、目録未成なるも一萬元程度にて手に入れ得可き乎と想像致し居り候。若し外務省にして四萬元の臨時費を承諾すれば固より問題なきも、假に三萬元よりは鐚一文も出さずとせば、寧ろ之を機を失して北海[18]等虎視眈々たるあたりにしてやられんよりは、この方を何等かの臨時弁法によりて差しおさへおき、利子をこめて第二第三年度等より漸次支弁せば如何ならんと存居候。何れこれも目録出來次第至急奉寄可申上、豫め御了承願上候。かく申せば内地にては北京の舊書は無限にして何時にても賣り込みある可しと多寡をくくらん向もあらんが、小生の觀察を以てせば、支那の箇人に於ける藏書は既に最後期に近きたるものの如く、「底が見えた」と申す言辭が今日の適切なる表現と存候。即ち圖書館の増設により善本は次第に共有の性質を帶び、再び售買の機會なく、從て一度機會を失うときは永遠にかかる東西にめぐり合わざる虞あり。況んや研究所の基礎たる可き書籍は自ら有用の書に限られ、有用の書は即ち清朝の書と云ふも妨げなく、その清朝の書が一大批として售出せらるる機會は、今後とも甚だ多からざる可くと存候。實に小生がこの際に北京にあり、かかる機密を探る丈の交涉を支那側との間に結び得ること千載一遇と可申、たとへ將來なり如何なる人物が來平せられんとも、一には機會と、二には支那學者間に潛入するだけの因緣なくしては、到底遂げ難きこと乎と存候事、廣言には似たれども、万一内地にて北京には永遠に舊書を藏し何時にても收買し得る様空想されん向もあらんことを恐れ、一言致し候次第に御座候。御推讀の程奉祈上候。この程も燕大の圖書館を參觀致候が、昨年小生が獨力[19]にては買ひ難く、大學は買書の意思を示さず、百計尽きて放棄したるものが幾部も同館に收められたるを目擊致候。而して本年度は小島先生の斡旋にて、便宜も頗る多く候爲、邵晉涵の南江文鈔や張雲璈の選學謬言[20]の如き、大坂圖書館が劍峯先生[21]の舊藏として自ら誇りしものをすべて手に入れたること亦一の快心事に有之候。塚本君六日歸平、四

長、民國六年には教育總長に就任した。傅増湘の藏儲は宋元版の富をもって知られた。また自身も校勘に勤め、一千部以上の古籍の校勘を行ったといわれる。『雙鑑樓善本書目』『雙鑑樓藏書續記』『藏園群書題記』『藏園群書經眼録』などの著作があり、目録版本學への貢獻は極めて大きい。日本との關係で云えば、李盛鐸とともに東方文化事業總委員會の圖書籌備評議員を務めた。

[18]中華教育文化基金會が運營した北平北海圖書館のこと。この當時すでに國立北平圖書館に合併されていた。

[19]原文、立を抹消の上、力に改む。

[20]謬字は膠の誤寫。『選學膠言』二十卷補遺一卷、道光十一年孫之杲刊本。

[21]藤田豐八（1869-1929）、明治・大正期の東洋史學者で、劍峯はその號。帝國大學漢學科を卒業後、上海で羅振玉が起こした農學會に協力して翻譯に從事、また同じく羅振玉の東文學社で教鞭を執った。王國維はその時期の學生である。その後京師大學堂教習などを歷任したが、歸國して大正十二年（1923）に早稻田大學教授、昭和二年（1926）東京帝國大學教授となった。昭和三年（1928）臺北帝國大學が新設されると、渡臺して文政學部教授となり、文政學部長を兼ねたが、翌年病を得て沒した。著作に『慧超往五天竺國傳』『東西交涉史の研究（南海篇）』『東西交涉史の研究（西域篇）』等がある。その舊藏漢籍は沒後東洋文庫に寄贈され、藤田文庫として保存されている。

後日養病のため一時歸國の大淵氏[22]と同船にて歸朝の筈に候。内地學界の御看想さもある可しと存申候。北京の在野黨が一朝臺閣に列し、なほ且ついよいよ健在ならんこと、在野黨のかたわれとして特に希求のみ申上候。艸々。

松浦先生文安　　武四郎拜
十一日

六、昭和四年七月二十六日

敬啓、唯今啓程下津可致につき、百忙裏一筆認め申候。本回の事につき諸老先生の絶大なる贊助を蒙り、ここに下津までに相成候こと、本懷至極に存候。生憎陶蘭泉先生南京に在りて、直に受け渡し出來ざる由にて、兩三日焦慮を極め申候処、濟南よりの電報にて、廿九日歸津の由分明致候間、本日午前四時陶氏令弟の先導にて下津、明、明後兩日は書籍の點檢に費し、廿九日には徐森玉翁も下津、ここに正式に調印の豫定に候。陶氏方面にては金子を急ざる由につき、果して然らば万一領事側の手配間に合はずとも大局には支障なかる可くと存候。徐先生の下津は陶氏側の希望に本き候へども、書方も報酬の都合より云へば、やはり車馬費として收めらるる上に好都合に存候。餘は天津より續写可申上候。

松浦仁兄大人文安　　武四郎拜
七月二十六日午后

七、昭和四年八月七日

敬啓、上月念六北平を離れてより茲に十餘日、始めて使命の大半を盡し候に由り、不取敢御報告に及び申候。點書廿七日より始まりて、畧々本月三日に渉り結束を見申候。原來前回奉遞の目録は極めて粗雜にして、中には自家になきものあり、丟去せるものあり、重見せるものあり、加ふるに書籍の庋置また序次なくして、檢書の困難一方ならず、殊に目録中重要の書、たとへば秘册彙函、八旗通志、原刻汪氏遺書の如き、誤りて書き入れたりと稱し、又はかかるものなしとさへ公言して極力抹消を計り、殆ど讀書人の態度に非ざるものあり。遂に再び徐森玉先生の來津をまち、如此決定致候。前回の目録は如何に誤開ありとするも、又基礎とせずしては交渉成立せざるにより、斷乎として先方の不當なる要求を退け、ただ粤刻念四史 目録になく 天都閣叢書 失去 許學叢刻 十三經解詁 荒政叢書 葛氏 學古齋 金石叢書 四銅鼓齋論畫叢刻 纂喜廬叢書 鳴沙石室佚書 冒氏叢書 胡氏葆樸齋 何夢華叢書 倭文瑞遺書 鄭小谷全集 儆居遺書 蔣侑石遺書 陸清獻全集 世補齋遺書 徐靈胎醫書 沈氏尊生書 玉鷄苗館 以上所在不分明 石印 (?) 汪氏遺書 原刻強要したる代償として 國初 (?) 名家詩餘 即國朝百名家詞 許鄭遺書 亦稱趙氏峭帆樓 萬密齋遺書 即万氏遺

[22]大淵忍爾（1912-2003）、道教史研究者、東京大學東洋史學科卒業、岡山大學教授。著に『敦煌道經目録篇』『敦煌道經圖録篇』『初期の道教』『道教とその經典』等がある。

書十種 甘肅 (?) 通志 特に先方の希望により を除き、其他の全部を譲受くることとし、而かもこれ丈の代償として、小生の私見ながら瓦礫を捨てて珠玉に替ふるの目的の下に、校礼堂全集 凌廷堪完本 西荘始存稿 西沚居士詩文集 王鳴盛 十經齋文集 柴辟亭詩集 沈濤 夢陔堂詩文集文説字詁義府合按 黄春谷 詩観 初二三集 鄧孝[23]儀 潘氏叢刻 中に潘功甫の東津館文集あり 洞簫樓紀 碧雲盦 樂府餘論 宋翔鳳 塩邑志林 天啓刊本 を要求したる処、幸にして其の認容を得申候。就中詩観の三集本を要求したるとき、先方も少からず狼狽の色あり、遂に筆を執りて可の一字を書したるは痛快淋漓たるもの有之候。なほこれらの書中、秘册彙函 珠叢別録 蘇齋叢書 粤刻通志堂 潘刻五種 十六家墨説はこれも目下自家になきも、北平にて購補の見込あり、誦芬室初二集 續古逸叢書 積學齋 鄦齋 懷園雜著 隨庵 正續 鳴沙石室佚書 宸翰樓 吉金石盦 玉簡齋 雪堂 雲笛 等の新刻影仿の諸書は、本人の切なる希望により替ふるに普通本の紙質佳良なるものを以てすることとし申候。装書は始め自宅にて行ふこととし、中ごろ三井洋行の倉庫に豫定を變じ、三度自宅に變更を要求し、困難を極め申候が、時日だけは一歩も假借せず、約束の二日より開始して、五日間にして昨日夕刻に至り、見存の書共貳萬六千九百八十五本を一百八十八箇の木箱に分装を完了致申候。この間三井洋行に於ける千田氏が後方勤務として木箱、包紙、油紙、鉄條、マーク及び人夫につき周到且つ迅速なる手配を遂げられたると、水野君が十日の辛苦にあたり全く獻身的熱誠を以て手足の如く活動されたることは特筆大書す可きものある已と存候。装了の木箱は陶氏の自動車々庫に藏し、本日 先方の言を信ぜば 英租界なる金城銀行、後通成貨棧に押款の形式を以て納め 陶氏の住せるは特別區なるにより支那官憲干渉の虞あり、その收條を小生まで交付する約束に候。經費に就ては領事館に達したる外務省の公文はすべて未決定の如く曖昧を極めたる文面なるにより、白井副領事も貴下の套數本數の精査を待たずしては打電し難しと稱し、漸く一日に至り大体の本數を得たるにより、之を以て打電を請ひおき候ところ、一昨晝に至り返電として書價三万一千元電送ス可シと申越し候よし、よつて到着の上は小生より三万元を陶氏へ手交し、陶氏より三万一千元の收條をとり、小生は陶氏へ一千元の收條を交付し、後一千元を徐先生に奉送することに手順を整へおき申候。なほ陶氏の僕從その他、點書に應援したる人々には、特に徐先生の注意により、三百元を与ふることとし、これは雜費として支出を請ふことに、既に領事の理解を求め申候。保險及び運費はすべて領事館に一任し、人夫の費用及び用度類はしばらく三井洋行より代償することに致居り候。よつて小生の殘務としては通成貨棧の收條を領事館に交付することと、現金三万一千元の始末を定め、並に三百元を陶氏を經て交付することのみと相成申候。本日三井洋行及び領事館に出頭して、それぞれ報告と共に通関運送の事務を擧げてこれらの人々に委託の筈に候。今夜は関係者諸氏を招いて會食を催し、聊か謝意を表し度とも打算致居候。殘務相濟み次第歸平可致候、詳細の報告は後日に期し居候。　狩野先生はじめ各位にもよろしく御致声奉願入候。

[23]誤、正作漢。

八月七日　倉石拜

松浦先生文安

次に桑原先生[24]御病氣の由、吉川君より傳聞致し心痛罷在候が、其後の御經過如何に候や、御承知の御模様御序に御知らせ下されまじく候や。日前陳援庵先生[25]に面晤の折、桑原先生の安否を尋ねられ候間、病中の旨申候処、いたく心配され、是非最近の病状を尋ね呉れと申され候。若し病少しく癒るの日、陳氏のこの語を桑原先生に傳ふ可き方法もあらば何よりのことと存申候。筆序での如くなれど、併せて奉願上候。

八、昭和四年十月五日

敬啓、屢々雲箋御惠投を辱くし乍ら、筆遲にのみ打過ぎ申訳も無之候。陶書も漸く到齊の趣、安堵の事に候。尤も御精査の結果如何の御批評ありや心許なく存候。殊に第二批は今だ整はず、徐先生も殊に憤色有之候。暫時御待ち下され度奉願入候。次に申遲れ乍ら、天津千田氏へは別に物品の謝礼は致しをらず、同氏及び洋行中の倉庫係を招きて會食したるに過ぎ不申候。金圓はすべて同氏個人として貸與せられるままに係り申候が、これは既に天津領事館より返濟したることと存申候。來薫閣陳濟川、明日南嶺丸にて東渡。八木氏の東道にて先ず福岡に到り、同道の做套工人を井上氏にあづけ、然る後京都へ直行致度由申候。可然御斡旋の程、替つて奉願上候。なほかねて來薫閣まで御送附の研究所用紙數枚は何の用をなすものか、本人も不分明の由申居候間、御面晤の節直接御告げ下され候はば幸ひに存申候。此頃林昌彝の三礼通釋、白紙四十六本、四十五元、手許に扣留致しおき候が、若し京都になくば研究所にて御購入ありては如何にやと存候。性質は五礼通考とほぼ同様に候。同人の著述零砕なるものは小生も數部集め、なほ集め度企畫致居り候へども、これは大部にて聊か手におへ不申、かくは御無心申上候次第に御座候。人物も陳壽祺の門人にて、隨筆等 射鷹樓詩話 硯耕緒録 海天琴思録 温經日記 はなかなか趣味有り候。目下學校開講の直後にて多事を極め居り候間、一筆のみ認め申候。餘は後時に讓り申候。

武四郎拜

---

[24]桑原隲藏（1871-1931）、東洋史學者。帝國大學漢學科卒業後、第三高等學校教授、高等師範學校教授を經て、二年間の中國留學後、京都帝國大學教授となった。大正十二年（1923）『蒲壽庚の事蹟』で帝國學士院賞を受賞。昭和五年（1930）停年退官したが、翌年病を得て死去した。『桑原隲藏全集』全五巻附別冊がある。

[25]陳垣（1880-1971）は廣東江門の人で、民國期の歴史家、援庵はその字。青年期には報國救民思想に燃えて政治に志し、革命後衆議院議員となったが、まもなく北京に移り教育と學術に專念した。1921 年には教育次長、1926 年にはカトリック輔仁大學の校長となり、新中國成立後、輔仁大學が北京師範大學と合併した後も、引き續き北京師範大學校長に任じた。また中國科學院歴史研究所第二所の所長も兼ねた。その書齋を勵耘書屋といい、勵耘老人と自稱した。中國史上のいわゆる夷教の研究の開拓者として著名なほか、『二十史朔閏表』『中西回史日暦』『史諱擧例』『中國佛教史籍概論』など中國史學におけるスタンダードワークを數多く送り出した。

十月五日

松浦先生文安

九、昭和四年十一月二十八日

敬啓、北京も愈々雪天と相成り、二年前の景況殊に忍ばれ申候。茲に豫ねて御猶豫を乞ひおき申候陶書第二批愈々結集を遂げ申候に就ては、別紙目録の通り 套數ありて本數なきは、精査したる記事を紛失したるにより、止むなく入箱の際の心覺えに依り申候次第 近日發送可致候間、何卒御檢收下され度、小生明日公使館に出頭、証明書請求、然る後通運に托して全く前回同様の手續を以て神戸まで運ばせ可申候。箱數は煙捲箱子二个、その約三分之二大なる箱子一个に候。ここに一つ折り入て御諒解を願ひ度は、濱田教授[26]來平の砌、大學の爲に購入されたる書籍等一箱、これも荷造り濟みの所、証明の方法に就き水野君いたく當惑され候につき、権宜の処置乍ら、今回の証明に添へ、公使館よりは四个として 公使館には内情申し出さず候 發送致度候間、貴兄なり濱田教授なりより、狩野所長に箇人的問題として御允許を乞ふ様御取計らひあり度奉願上候。なほ發送の際は、重ねて御報告致し可申候。先は當用のみ申上度、如此に御座候。

松浦先生文安

武四郎拜

十一月念八

通志堂經解　六十套　四百八十本
秘册彙函　八套
蘇齋叢書　　四十二本
珠叢別録　四套
續古逸叢書　十套
十六家墨説　　二本
潘刻五種　　六本
積學齋叢書　　卅二本
隨庵叢書　　二十四本
同續編
鳴沙石室遺書　一套
宸翰樓叢書　一套
吉金盦叢書四集　　二十四本
雲窗叢刻　一套

[26]濱田耕作（1881-1938）、號は青陵。考古學者。東京帝國大學で美術史を專攻、卒業後やがて京都帝國大學の講師、助教授となり、ヨーロッパに留學。考古學を學んで歸國後、京都帝國大學の初代考古學教授となった。昭和十二年（1937）京都帝國大學の總長となったが、在任中に死去した。昭和六年（1931）帝國學士院會員。『濱田耕作著作集』全七卷がある。

玉簡齋叢書　二套
雪堂叢刻　　二十本
懷幽雜俎　一套
誦芬室初編　　八十五本
同　　二編

中吳紀聞　二本	皇朝類苑　十二本
元典章　　十八本	元音　　四本
中州集　　四本	金臺集　　二本
鐵崖先生古樂府　二本	鐵崖先生詩集　二本
張蛻庵集　一本	江東白苧　二本
梅村家藏稿　八本	讀曲叢刊　三本
盛明雜劇　十本	傳奇四種　八本
五代史平話　二本	剪燈新話　三本
醉醒石　　二本	

以上一十九種

十、昭和五年一月二十四日

敬啓、年頭の御祝辞目出度申納め候。推行國曆の第一年とは申せ、腦筋丈舊にして陰曆までは新禧も口にのり申さず、旁々遲疑茲に至り候こと申譯無御座候。愈々今年こそは如何に藻掻くとも歸朝せねばなり不申、年頭乍ら憮然たるもの有之候。貴家に於ては御歸所第一の新春とて、嘸かし御感慨の御事と遙察のみ申候。歳末には御迷惑千萬なること奉託致し候処、早速親しく御調査を煩はし深謝申上候。よりて常山貞石志は直に退回、西莊始存稿の抄写費が浮き候と同時に、木犀軒を背負ひ込み申候。陶書第二批未だ到着致さず候や、懸念の至り、到神の上は同地より貴研究所宛葉書にて御通知申上ぐる手筈に致しおき申候。第一批中の缺書地志四種は、小生 特に書庫中より捜出したる記憶ありただ此の書総名なし。他部に紛れ易く候が、若し「同治癸酉江蘇書局刻の元太祖親征記」をめあてに再調なし下されまじきやと希求のみ申候。叢書書目等に習見する地志四種とは全然別今念のため申添へば親征記以外に何々の三種を合せしや今は記憶致さず候百三名家もこれは裝書に際して急に他より工面したる品にして、當時一百本の數を誦して授受したるもの、欠一本とはこれも聊か受取難し、或は帙なき爲裝書の便宜上箱の隅に一二本づつつめに用いたる因果にて、遂に遺失したるものか、とにかく申訳なき仕儀として深く引咎致す所に御座候。近く年度の改まると共に、研究所も人物に藏書に新機軸を出されることと期待致居候。天機若し可洩、その一端なり御示知に預かり度存候。内地の學界が沈滯に陷り易きは豫ねての大札にても御同感申上候処、若し之に起死回生の靈劑を調せんとせば、愚見を以てすれば支那の讀書人を招くより外に途なくと存候。尤も第一流の學者は容易に韜晦を肯ぜず、殊に所謂紅頂子の教授に在りては、驚く勿れ月收壹千元に達するものあり、日本人の

考ふる如き教師の收入に目がくれて東渡する如きは思もよらず候。これらの人々は若し日本にて禮を厚うして毎年一人位宛を二三月聘して指導を乞ふより外に方法なく候。ただ研究院程度の青年學者に對し、相當以上の禮を以て之を招かんか、翩然として東渡するもの、蓋しその數尠からざるものあらんと存候。若し研究所が指導者と云はんよりは、研究員を日支兩缺としてひろく人材を求めんか、譬へば清華研究院出身諸君子の如き、能く我が學界に清新の空氣を注入す可きあらむと存候。蓋し北京の學海を見るに、実に大教授の横行時代にして、たとへば東京に於けるが如く、某々科の講義は全く何れの學校を問はず某々氏の專賣と定まり、學生も亦主任を督して必ず某々氏を聘せずしては已まず。從て薪水は全くかかる大教授に吸收されて、研究院出位の人々はたとひ出頭の機ありとするも、多くは旋ち打倒さるる現状に有之、竊に快々の胸を抱きて出洋の機をまてるもの比々として、是れ出洋は即ち彼等の養資格の唯一條件たるものにして、取りて以て我學界の改新に寄與せんか、一擧兩得正に是之謂也。これ深く具眼の士に望みて已まざる所に候。御高見如何に御座候や。九州大學の楠本君[27]、支那文學科の教授を支那より聘し度畫策し、西洋學の諸教授よりは大に支持を受け乍ら、東洋史てふ方面の不贊成にて行き惱み居候。この頑冥者流之を有北に投ぜむ術はなくやと浩歎致居候。書肆の要賬門前成市候にて擱筆致候。愈々御自愛のこと遙に奉祈上候。

武四郎拜具

一月廿四日

松浦學兄文安

附一、昭和四年十月九日來熏閣陳氏致松浦嘉三郎信札

謹啓、三日呈上一函、諒蒙
台覽、弟于五日與八木先生同船來門司、于八日下午十時到著、即宿在一旅舍中、擬定今日九時赴福岡少滯、即赴京都。做書套工人同來、此行交與井上先生、請他管理此事也。塚本先生書箱十件、弟攜來由南嶺丸船員運神戶、今晨已與塚本君打電報、請他到神戶去取。弟約在十五左右可到京都、謹此先寄奉聞、餘容會面詳談、惟希諒鑒。　此上　十月九日

杭拜

松浦先生

[27] 楠本正繼（1896-1963）、號は剛堂、中國思想研究者。東京帝國大學支那哲學科卒業、九州大學の中國哲學史教授を務めた。著作に『九州儒學思想の研究』『宋明時代儒學思想の研究』等がある。その所藏漢籍は國士舘大學に歸し、楠本文庫として保存されている。

附二、倉石武四郎發往松浦嘉三郎電報

日付：昭和四年六月十九日聖護院局着信
宛名：キヨウトテイコクダイガク　ブ　チンレツクワンナイケンキウシオ」マツウラカクロウ(ママ)
（京都帝國大學　文　陳列館内研究所　松浦嘉三郎）
電文：三マンナリ　ソウトウトミトム　クラ
（三萬なり、相當と見込む。倉。）

附三、狩野直喜發往松浦嘉三郎電報

日付：昭和四年七月十二日聖護院局着信
宛名：ヨシダマチ」キヨウトテイダイ　ブンガクブ　チンレツカンナイ　トウリ(ママ)ウブンカケンキユウジヨ」マツウラカサブロウ
（吉田町　京都帝大　文學部　陳列館内　東方文化研究所　松浦嘉三郎）
電文：シヨセキ　カフコトニ　キマツタ　一四ヒアサ　カエル　カノ
（書籍、買ふことに決まった。十四日朝歸る。狩野。）

附四、倉石武四郎發往狩野直喜電報

日付：昭和四年八月二十五日聖護院局着信
宛名：キヤウトシカミキヤウク　タナカオホイマチ」カノナホキ
（京都市上京區田中堰町　狩野直喜）
電文：二〇ヒ　カンレイマル(ママ)ニツム　ウントン(ママ)サキ　クラ
（二十日、南嶺丸に積む。運賃先。倉。）

2-2　關係文書――「陶湘藏書購入に關する件」（翻刻）

（外務省外交史料館所藏外務省記録 H 門東方文化事業關連ファイルより）

一、狩野直喜書信

拜啓、益御健勝忻賀之至ニ奉存候。サテ當研究所開始以來日尚淺ク有之候得共、漸次事務モ整頓シ、研究ノ基礎モ相立候事ト存候。サテ先般葉德輝、康有爲二氏所藏ノ圖書ヲ文化事業部ニ於イテ御購入ノ上、東京及京都ノ研究所ヘ御分配ノ由拜承之處、種々ノ相違ト故障之爲メ、其實現ヲ見ルニ至ラサリシ事、愈研究所開始サレ、書籍ノ必要ヲ感スルニツレ、彌殘念至極ニ奉願候。研究所經常費中、圖書費各壹萬圓ヲ計上サレ居候得共、一年購フ所ノ書籍幾モ無之、甚心元ナキ次第ニ有之、若一時ニ或ル「コルレクション」ヲ購入シ、之レヲ藏儲スルヲ得ハ、之レニヨリテ經常費ノ足ラサル所ヲ補ヒ、誠ニ仕合ト存候。然ルニ過日北京滯在ノ文部省派遣海外研究員京都帝國大學文學部助教授倉石武四郎ヨリ、天津ノ藏書家トシテ有名ナル陶湘ト申スモノ、藏書ノ一部五百九十五種ヲ賣却致候希望有之由報知シ、且其目録ヲ送リ來候處、其書經史子集ニ涉リ、且彙刻書ノ幾ント總ヘテヲ網羅シ、又陶氏ノ藏書ハ精刻精勘本多キヲ以テ有名ナレハ、研究所ニ備付ケ候モノトシテハ尤適當カト被存候。其價格ハ三萬圓ト申候由ニ候カ、支那ニ於ケル或書籍通ノ評價ニヨレハ、決シテ高價トハ申サレザル由證言致候事ヲ承リ候。尤之レヲ送クルニハ堅牢ナル箱ヲ作ラサルヘカラス。分量ヨリ相考ヘ候得ハ、運搬費モ相當ニ見積ラサルヘカラス、又此レニ關係シタルモノニ謝儀ヲ与ヘサルヘカラサレハ、書籍ノ一割位ハ別ニ之ヲ要スヘキ事カト相考候。要スルニ此ノ如き「收藏」ヲ逸シテ他ニ取ラレ候事ハ非常ニ殘念ニ有之、何トソ當局ニ於イテ購入ノ事御詮議相願候。又右目録ハ先方ヨリ當所ヘ送來候モノニツキ、一部ヲ寫シ服部理事長手許ヘ廻附致置候間、御一覽被下度、又右書籍ヲ當局ニテ御購入相成候節ハ、之レヲ二分スルハ面白カラス、此次ノモノハ京都研究所ヘ御下附相成度、此事ハ豫メ服部東京研究所長ノ諒解ヲ受置候間、右御含被下度相願候。
猶京都研究所建築ノ件ニツキテモ鄙見申述度事有之、其内ニ上京親シク得貴意候得、書籍購入ノ事ハ之レヲ緩ニスレハ彼地ニ於イテ他ニ洩聞ヘ、故障ヲ生スル虞有之候間、不取敢書中如此。至急何分ノ御御返事御聞ノ程相願候。匆々不一。狩野直喜

坪上文化事業部長[28]殿　　七月一日
（文化事業部昭和四年七月四日（受領）の印アリ）

二、（電信案）昭和 4 年 7 月 11 日

件：陶湘氏藏書購入ノ件
宛：天津岡本總領事

[28]坪上貞二（1884-1979）は大正・昭和前期の外交官、佐賀縣出身。東京高等商業學校を卒業し、明治 42 年に外務省入省。アジア局課長を經て、子爵岡部長景（1884-1970）の後を承け文化事業部長となる。のち拓務次官を經て、昭和 10 年に新設の滿州拓殖公社総裁をつとめ、昭和 15 年滿州國參議府參議、昭和 16 年には在タイ日本國公使館が大使館に昇格した時、初代の大使となった。戰後公職追放。

發：幣原大臣
暗第七四號
貴地在住支那人陶湘ノ藏書ヲ購入セシムル爲メ、狩野文學博士ヨリ在北平倉石帝大助教授ヲ貴地ニ遣ハシ調査セシムル筈ニ付、同氏調査ノ結果御聽取ノ上電報アリタシ。

三、（公信案）昭和 4 年 7 月 26 日

文化一機密第一〇一七號　昭和四年七月拾六日
受信人名：在天津岡本總領事
發信人名：幣原大臣
件名：陶湘ノ藏書購入ニ關スル件
本件ニ關シ七月十二日附往電七四號ヲ以テ申進置キタル處、右ハ貴地在住陶湘氏ガ其ノ所藏圖書ノ一部五百九十五種ノ賣却ヲ希望シ居ルニ付、過般新設シタル東方文化學院京都研究所ニ於テ右藏書ヲ二萬弗乃至三萬弗見當ニテ購入シ度キ意嚮ヲ有シ、北京滯在中ノ文部省派遣海外研究員京都帝國大學文學部助教授倉石武四郎ニ依頼シ、右藏書ヲ檢セシメ、其ノ調査ノ結果ヲ待テ、購入方協議スルコトトシ度キ旨申出、既ニ倉石助教授ニ電報シタルヲ以テ、同助教授貴地ニ到着ノ上ハ、同氏ニ協力セラレ、右圖書ノ總册數、帙數、印刷製本ノ良否、並ニ價格ノ點等ニ關スル見込ヲ同助教授ヨリ御聽取ノ上、其ノ大要ヲ當方ニ電報シ、詳細御郵報相成度。尚右藏書ハ事實前記京都研究所ニ於テ購入セントスルモノナルモ、支那現下ノ事情ニ鑑ミ、極ク内密ニ御取扱相成、又買方ノ名前等モ先方ニ知ラシメサルコト致度。尚右書物購入方決定スルトキハ、表面貴館ニテ購入シ、本省へ送付ノ形式ヲ取ラルル様致度ニ付、御含置相成度此段申進ス。

四、岡本總領事電信　昭和 4 年 8 月 1 日着

昭和 4　一一八三〇　暗　天津　一日前發　文化
本省八月一日後着
幣原外務大臣　岡本總領事
第二〇七號
貴電第七四號ニ關シ
倉石助教授七月二十六來津、二十七日ヨリ卅一日ニ亘リ取調ヘタル結果ハ、圖書ノ總册數二萬四千六百十四册アリ、帙數三千八百三十四帙ニシテ、印刷製本ハ孰レモ可良ナリ。右ノ外現在北平ニアルモノ約三百五十册五十帙モ加ハル筈ニテ、價格三萬一千弗ニ折合ヒタリ（荷造費運賃保險料等ハ別ニ支出ヲ要ス）。荷造ハ數日内ニ完了スヘク、通關手續結了次第發送シ得ル様手續取リ運ヒ濟ナルカ、賣手ハ荷物發送迄ニ代金ヲ受取度シト申出テ居ルニ付、購入方至急御詮議ノ上、代金電

送方御取計アリタキ趣ナリ。
支へ返電セリ。

五、（公信案）昭和 4 年 8 月 3 日

文化一　私信　昭和四年八月三日
受信人名：京都　狩野博士
發信人名：坪上部長
件名：陶湘藏書購入ノ件
拜啓、陳者天津陶湘藏書購入ノ件ニ關シ、今般別紙ノ通リ在天津總領事ヨリ電報有之候ニ付、目下當省ニ於テ購入手續中ニ有之候。右不取敢申進候。敬具。

六、（電信案）昭和 4 年 8 月 3 日

件：陶湘氏藏書購入方ノ件
宛：天津岡本總領事
發：幣原大臣
暗第八〇號
貴電第二〇七號ニ關シ、御申越ノ書物代金三萬一千弗至急電送スベシ。

七、岡本總領事電信　昭和 4 年 8 月 10 日着

昭和 4　一二三三三　暗　天津　　十日後發　　文化
本省八月十日後着
幣原外務大臣　　岡本總領事
第二一四號
往電第二〇七號及貴電第八二號ニ關シ
圖書代金領收シ購入ヲ了セル處、右以外荷造諸掛リトシテ既ニ六百餘弗ヲ費シ、又今後積出シ迄ニ倉敷料及保險料（運賃ハ先拂トスル筈）トシテ約四百弗ヲ要スル見込ニ付、合計一千弗更ニ電送ヲ請フ。

八、岡本總領事電信　昭和 4 年 8 月 21 日着

昭和 4　一二七七五　暗　天津　　廿一日前發　　文化
本省八月廿一日後着
幣原外務大臣　　岡本總領事
第二一五號
貴電第七四號ニ關シ
圖書麥酒箱詰合計百八十八箱、北平公使館發、本省送リ公用文書トシテ、無檢查通

關ノ手續ヲ了シ、八月廿日出帆、近海郵船南嶺丸ニテ積出セリ。運賃先拂神戸揚トナリ居ルニ付、通關並荷受手續方、然ルヘク御配慮ヲ請フ。船荷證券郵送セリ。支へ轉電セリ

九、（公信案）昭和 4 年 8 月 23 日

文化一第四五四號　　昭和四年八月廿參日附
受信人名：河田大藏次官
發信人名：吉田外務次官
件名：書籍輸入ニ關スル件
今般當省が支那北平及天津に於て購入したる漢文書籍二萬四千九百六十四册、三千八百八十四帙を、麥酒空箱百八十八個詰とし、在支公使館より外務省宛發送したる趣、電報申上げたる處、右荷物は八月二十日天津出帆の近海郵船南嶺丸にて積出し、同月二十四日神戸到着の筈にして、貴重書物少からざるに付、特別の御詮議を以て簡易通關方至急神戸稅關へ御通知相煩度、此段御依頼申進す。

十、（公信案）昭和 4 年 8 月 24 日

文化一　半公信　　昭和四年八月廿四日
受信人名：京都市上京區田中大堰六ノ一　狩野直喜
發信人名：坪上文化事業部長
件名：陶湘藏書輸入ニ關スル件
拜啓、陳者今般天津及北平に於て購入したる陶湘の藏書は、麥酒空箱百八十八個詰とし在支公使館より外務省宛發送し、八月二十日天津出帆の近海郵船南嶺丸にて積出したる旨、在天津岡本総領事より電報有之候間、左樣御了知相成度、尚右荷物は船荷證券到着次第直に神戸上組合資會社に托して通關手續を了し、京都研究所宛輸送せしむる筈に有之候。左樣御承知置相成度、此段申進候。　敬具

十一、松浦嘉三郎致外務省文化事業部長坪上貞二書信[29]　昭和 4 年 8 月 25 日

拜啓、殘暑尚ほ難去御座候、時節柄御動履益々御清康と奉賀候。過般東上の節、御邪魔致候際には御公務御多端之折柄にも不拘長時間御引見を賜はり御歡談を辱く致こと滿足之至と居存候。此れで貴部之御決心の程も充分に諒解致し、當方でも今後益々研究に勇猛精進可致候。又過日來、在天津陶蘭泉氏藏書收買之件に就きて、極めて御熱心之御盡力を賜はり、迅速敏捷に進行致し、既に廿日南嶺丸に積込まれ、不日神戸陸揚げの運びとなり候趣、拜承致候。此れ實に敝學院に於てはその基礎たりと可申もの、深く貴官等の御熱心なる御奔走を感謝致すものに有之

[29] この書簡のみは「陶湘藏書購入に關する件」ではなく「東方文化學院雜件 / 京都研究所關係 / 研究設備關係」のうち「建築設計關係」ファイルに綴じ込まれている。

候。敝院に於ても狩野先生より既に研究員助手を召集せられ、到着次第速時整理に着手するの手順を決定致し居り候。唯だ二萬六千册百八十箱と申し候大部の書籍故、目下置き場所に苦しみ居り候。多分支那哲學研究室や圖書館や各室に分配保存し置く豫定に有之、此の上は一日も建築物を進行せしめられたく切望の至りと存居候。京洛の地は既に漸く秋色を帶び、朝夕之涼味既に可掬あり、お暇の節には一度御入洛、當方研究員等と御會談の程希申上候。先右示教御願申上度、一書奉呈上候也。匆々不一。

松浦嘉三郎頓首

坪上部長殿

八月廿六日

岩邨書記官にも宜しく願上候。

十二、岡本總領事電信　昭和 4 年 8 月 27 日着

文化事業部第一課　昭和四年八月廿七日接受
機密第五四〇號　　別紙添付
　昭和四年八月二十一日
　　在天津
　　總領事　岡本武三[30]（公印）
外務大臣男爵　幣原喜重郎殿
　陶湘ノ藏書購入ニ關スル件
七月十六日附文化一機密第一〇七號貴信ニ關シ、不取敢八月一日發往電第二〇七號ヲ以テ回答申進置タル所、書價御送金ニ接シタルニ依リ、直チニ購入手續ヲ了シ、倉石助教授ニ於テ書册ヲ一々點檢ノ上、紙包トナシビール箱一八七箇及同ジ大サノ木箱一箇合計百八十八箇ニ詰込ミ、當地海關通關ノ便宜上、公使館發本省送リ公用文書トシテ公使館ヨリ支那側ノ無檢査通關證明書ヲ取付ケ滯リナク通關ノ上、八月二十日塘沽出帆、近海郵船南嶺丸ニテ發送セリ。荷物ハ神戸揚トナリ居リ、東京海上火災保險會社ニ對シ、價格三萬五千圓トシ海上保險（陸揚後七日間ヲ含ム又盜難ヲモ含ム）ヲ附シタリ。茲ニ船荷證券及海上保險證券各正本一通送附スルニ付、御査收裏書ノ上、京都研究所ニ回附シ、荷物御受取相成様、至急御取計相成度シ。又御參考ノ爲荷物各箱重量表一通添付ス。尚船賃ハ先拂トナシ置キタルニ付、右支拂ニ關シテ近海郵船會社東京支店ト可然御接洽相成度シ。
右往電第二二七號ニ關連シ申進ス。
　添付書類
　一、船荷證券
　一、海上保險證券　　（何レモ英文）各一通

[30]岡本武三は、在長沙領事代理（大正二年）、在芝罘領事（大正五年）、駐天津総領事の後、在イラン特命全權公使（昭和八年）に歴任。昭和十三年東亞研究所が設立されると、その理事となり、印度、ビルマ班（第一班）、西アジア班（第二班）、英國班（第三班）を含む第五部の部長を兼ねた。

一、積荷各個重量表

十三、岡本總領事電信　昭和 4 年 8 月 29 日着

文化事業部第一課　昭和四年八月廿九日接受
機密第五四三號　　別紙添付
昭和四年八月二十二日
在天津
總領事　岡本武三（公印）
外務大臣男爵　幣原喜重郎殿
陶湘ノ藏書購入ニ關スル件
本件ニ關シ八月二十一日附機密第五四〇號拙信ヲ以テ、船荷證券及海上保險證券各一通及送付置タル所、右各證券副本茲ニ送付ス。御査收ノ上可然御取計相成度シ。
添付書類
船荷證券　　二通
海上保險證券（各副本）一通

十四、（公信案）昭和 4 年 8 月 30 日

文化一　半公信　　昭和四年八月卅日
受信人名：京都市上京區田中大堰六ノ一　狩野直喜
發信人名：坪上部長
件名：陶湘藏書購入ノ件
拝啓、陳者本月二十四日附拙信ヲ以テ申進置候陶湘藏書麥酒空箱詰百八十八箇ハ既ニ神戸到着ノ筈ニ候。本月二十一日附ヲ以テ天津總領事ヨリ右船荷證券竝ニ海上保險證券ヲ京都研究所へ回附相成度趣ヲ以テ當方へ送附越候間、右茲ニ轉送ニ及ビ候ニ付、御査收ノ上貴方ニ於テ該荷物引取方御手配相成度。尚通關手續及運送等ハ神戸市濱邊通四丁目上組合資會社ニ取扱ハシムルヲ最モ便利ト愚考セラレ候間、必要ニ依リテハ人ヲ同會社ニ派シ、諸事御打合相成度。尚ホ南嶺丸船賃ハ當部ニ於テ近海郵船會社本店ニ直接支拂フコトニ同社ト打合置候へ共、神戸貴所間ノ輸送ニ要スル諸費用ハ一時貴方ニ於テ立換御支拂ノ上當方へ御請求相成度、此段申進候。敬具。
追テ右荷物神戸税關簡易通關方大藏省ヲ經テ同税關へ照會致置候。又上組合資會社へハ當部岩村書記官[31]ヨリ同社員木下ナル者へ通知致置候間、右御含相成度。

[31]岩村成允。大正・昭和期の外務官僚。南京、鐵嶺の領事などを歴任後、書記官として外務省對支文化事業部に勤務、東方文化事業の實務に攜わった。昭和七年（1932）六月から約半年間、歐米各國に於ける東方文化研究の状況等を調査するため渡航し、「歐米諸國に於ける東洋學術研究の現状」の報告を行った。繼いで停年により退官したが、引き續き囑託として文化事業部に留まった。著作に『安南通史』等がある。

此段申添候。

（船荷證券（正本）ヘ外務省ノ印ヲ捺シ海上保險證券（同）及積荷各個重量表ト共ニ各一通添付）

十五、（公信案）昭和 4 年 8 月 30 日

文化一　半公信　　昭和四年八月卅日
受信人名：近海郵船會社
發信人名：外務省文化事業部
件名：（外務省公用文書運賃支拂ニ關スル件）陶湘藏書購入ノ件
拝啓、陳者本年八月二十日塘沽出帆ノ貴社汽船南嶺丸ニ積込ミ發送シタル在支公使館發外務省宛書籍百八十八箱ノ塘沽神戸間運賃二百四十四弗四十仙ハ、當方ニ於テ貴社ヘ支拂フベキニ付、貴社神戸支店ニ對シ船荷證券引換ニ該荷物引渡方御通知相成度。此段申進候。敬具。

十六、岡本總領事電信　昭和 4 年 9 月 2 日着

文化事業部第一課　昭和四年九月二日接受
機密第五五〇號　　別紙添付
　昭和四年八月二十二日
　　在天津
　　總領事　岡本武三（公印）
外務大臣男爵　幣原喜重郎殿
　陶湘ノ藏書購入ニ關スル件
本件ニ關シ、七月十六日附文化一機密第一〇七號貴信御來訓ノ趣敬承、倉石助教授ニ於テ取調ヘタル本件圖書ノ総册數及帙數ハ八月一日發往電第二〇七號ヲ以テ及回答置タル通ナル所、其後同教授精査ノ結果ハ前顯往電報告ヨリ増加シ、総册數合計貳萬六千九百九十八册トナリタリ。圖書目録其他詳細ハ倉石助教授ヨリ當館ニ提出セル別紙報告寫ニ就キ御査閲相成度、尚現在北京ニ在ル分（別紙寫書目総單中括弧ヲ附シタルモノ）ハ八月二十一日附機密第三四〇號拙信通知ノ八月二十日出帆南嶺丸積出合計百八十八箱中ニ含マズ。倉石助教授ニ於テ責任ヲ以テ別途送付方取運ブコトト相成居リ、其詳細ハ同助教授ト京都研究所ト直接打合スル筈ナルニ付、右御了承相成度シ。
尚書價ハ貴電第八〇號御送金ノ通、銀參萬壹千弗支拂濟ニテ、又諸掛ハ貴電第八二號御送金銀壹千弗中ヨリ銀九百九拾五弗貳拾八仙ヲ要シタリ。諸掛中主ナル使途ハ箱代、荷造費、運搬人夫賃、倉庫倉敷料、海上火災保險料等ニシテ、荷造ハ最モ綿密トナシタル爲、包裝用紙代及雇人費ニ多額ヲ要シタル次第ナリ。詳細ハ第二期分前渡金出納計算書附屬證憑書類ニ就キ御了悉相成度。

十七、〔倉石武四郎報告〕

昭和四年七月廿六日、東方文化學院京都研究所長狩野直喜博士ノ依囑ヲ蒙リ天津特別一區十號路陶氏蘭泉所藏彙刻類書籍調查ノ爲來津、助手トシテ京都帝國大學院學生水野清一ヲ同伴セリ。コノ項ノ書籍ハ曩ニ陶氏ヨリ其ノ書目ヲ提出シタルニヨリ專ラ其ノ書目ヲ基準トシテ調查ヲ開始シタルガ、元來其ノ書目ナルモノハ極メテ杜撰ニ係リ、誤謬重出ノ條一二ニシテ止マラズ、且ツ藏書中ニナキモノヲ載セタルアリ、藏セルモノニシテ庋置紛亂シテ遂ニ所在ノ發見シ難キモノアリ。調查數日ニシテ遂ニ前目中ノ

粵刻廿四史　天都閣藏書　許學叢刻　十三經解詁
荒政叢書　葛氏金石叢書　四銅鼓齋論畫叢刻
纂喜廬叢書　冒氏叢書　胡氏葆樸齋　何夢華叢書
倭文端公遺書　鄭小谷全書　儆居遺書
蔣侑石遺書　卅補齋醫書　徐靈胎醫書　沈氏尊生書
甘肅通志

ヲ削除シ、之ヲ替フルニ

校礼堂全集　西莊始存稿　西沚詩文集　周礼軍賦説
十筌齋文集　柴辟亭詩集　夢陔堂詩文集　文説義府字詁合按
詩觀三集　潘氏家集叢刻　洞簫樓誌紀　碧盦詞樂府餘論
鹽邑志林

ヲ以テスルコトトシタリ。抑々コノ彙刻書タルヤ陶氏四十年ノ苦心ヲ以テ聚集シタルモノニシテ、就中指海二十集、式訓堂三集、三影閣叢書、柚堂全集、洪氏傳經堂叢書、宋氏叢書十三種ノ如キ、外間殆ンド傳本ヲ見ザルモノアリ。殊ニ乾嘉諸儒ノ述作ハ髪賊ノ亂ヲ經テ燒毀殆ンド盡キ、其ノ少見ナルト學術上ノ價値ニ富メルトニ於テ昂價ナルコト宋元板ニ亞ガントスルモノアルニ當リ、コレラノ稀覯書ヲ具スルハ本叢刻ノ誇トスルニ足ル所ナリ。而カモ前揭粵刻廿四史以下ノ書ハ概ネ新刻ニシテ容易ニ購補ス可キノミナラズ其ノ多數ハ學術上ノ價値極メテ乏シキモノアリ。之ニ反シ校礼堂全集等ハコレモ其ノ稀覯ナルト價値ニ富メルニ於テ指海等ニ比肩ス可キモノアリ。彼ヲ以テ此ニ易フル、ソノ得失自ラ知ル可キノミ。ナホ

粵刻通志堂經解　珠叢秘録　秘册彙函　蘇齋叢書
續古逸叢書　潘刻五種　十六家墨説　積學齋　鄦齋
懷幽雜著　誦芬寶初二集　宸翰廬　玉簡齋　雲窗
雪堂　吉金盦　隨巷叢書　又續　鳴沙石室佚書

ハ現ニ北京ニ在リテ一時調查ヲ加ヘ難キモ原來コレラノ書ハミナ一定ノ性質ヲ具シ、深ク研究ヲ要セザル種類ノモノナレバ、今此ヲ以テ第二次ニ北京ヨリ發送スベキモノトシテ册數ヲ暫ク加算セズ、專ラ天津ニ現存セルモノヲ詳校スルニ、凡ソ

經部　十三經注疏以下三十八種　二千一百七十六本
史部　二十四史以下二十八種　三千二百四十九本

子部　十子全書以下二十七種　一千七百四十二本
集部　漢魏六朝百三名家集以下三十一種　一千四百八十六本
叢刊　儒學警悟以下一百七十種　八千八百八十九本
影仿　澤存堂五種以下十一種　三百十二本
輯佚　玉函山房叢書以下十種　二百九十六本
郡邑　涇川叢書以下卅五種　二千二十一本
一姓　二程遺書以下卅八種　七百二十七本
一人　黄石齋經學九種以下一百五十六種　三千七百三十九本
地志　大清中外一統輿圖以下三十種　二千三百六十一本
共　五百七十四種　二萬六千九百九十八本

ヲ得タリ。裝訂ハ極メテ佳良ニシテ殆ンド書價ニ過グルモノスラアリ。但シ時ニ應ジテ帙ヲ用フルモノアリ、夾板ニヨルモノアリ、又全クコレヲ具ヘザルモノアリ。コレヲ套數トシテ算出スルコトハ不可能ナルモ、包裹ノ數ヨリシテ準ジ得ルモノトセバ、實ニ三千六百〇七箇ノ多數ニ上レリ。書價ハ當初狩野所長ヨリ申請サレタルママニシテ異同ナキモ書目ヲ更定セル結果トシテハ、幾分安價トナレリト云フモ可ナリ。點書ノ終ルヲマチテ直ニ裝書ニ着手シ、コレ亦前後五日間ヲ費シテ麥酒箱一百八十七箇、麥酒箱ニ畧々等シキ書箱一箇、合セテ一百八十八箇ニ分裝ヲ了セリ。コレガ搬出ニツイテモ細心ノ注意ヲ拂ヒ、表面上ハ英租界金城銀行ニ抵當ノ形式ヲトリテ同銀行ニ連接セル通成貨棧ニ運搬シ改メテ同處ヨリ三井洋行ノ手ニヨリテ積出ス可キ準備ヲ具ヘタリ。北京ニ在ル十九種ハ北京ニ歸レル後再ビ之ヲ調査シ更ニ便宜ノ方法ヲ講ジテ逐次發送セントス。ナホ詳細ナル書目竝ニ箱數、包裹數ノ對照表ハ直ニ京都研究所ニ宛テ發送、開箱竝ニ整理ノ基準タラシメムトス。

書目總單　　詳目另册

經部　十三經注疏以下共卅九種　内除（通志堂）一種後寄外　計二千一百七十六本
史部　二十四史以下共廿八種　計三千二百四十九本
子部　十子全書以下共二十八種　内除（十六家墨説）一種後寄外　一千七百四十二本
集部　漢魏百三名家集以下卅一種　計一千四百八十六本
叢刻部　儒學警悟以下共一百八十二種　内除（秘册彙函）（珠叢別録）（潘刻五種）（積學齋叢書）（鄦齋叢書）（懷幽雜箸）（誦芬室初二集）（宸翰樓叢書）（玉簡齋）（雲窗叢刻）（吉金盦）（雪堂叢書）共十二種後寄外　計八千八百八十九本
影仿部　澤存堂五種以下共十五種　内除（隨菴叢書）（隨巷續編）（續古逸叢書）（鳴沙石室佚書）四種後寄外　計三百十二本
輯佚部　玉函山房叢書以下共十種　計二百九十六本
郡邑部　涇川叢書以下共卅五種　計二千〇二十一本
一姓所著　二程遺書以下共卅八種　計七百二十七本
一人所著　黄石齋經學九種以下共一百五十七種　内除（蘇齋叢書）一種後寄外　計三千七百三十九本
地志部　大清中外一統輿圖以下共卅種　計二千三百六十一本
統共五百九十三種　除後寄十九種外實五百七十四種　計書 貳万陸千玖百玖十捌本

十八、（公信案）昭和 4 年 9 月 4 日

文化一　半公信　　昭和四年九月四日附
受信人名：京都帝國大學文學部内東方文化學院京都研究所　所長　狩野直喜
發信人名：坪上部長
件名：陶湘藏書購入ニ關スル件
拜啓、陳者陶湘藏書購入ノ件ニ關シ、在天津岡本總領事ヨリ本件ニ關スル倉石助教授ノ報告添付別紙ノ通來信有之候ニ付、茲ニ右寫及送付候間御査閲相成度、此段申進候。敬具。
（別紙トシテ岡本總領事發機密第五五〇號副本及倉石助教授報告寫其儘添付發送ノコト）

十九、堀内謙介臨時代理公使書信　昭和 5 年 1 月 24 日着

機密第四號
　　昭和五年一月六日
　　在支那
　　臨時代理公使　堀内謙介[32]（公印）
外務大臣男爵　幣原喜重郎殿

陶湘ノ藏書購入ニ關スル件
客年八月二十二日附、在天津岡本總領事發閣下宛往信機密第五五〇號ニ關シ、東方文化學院京都研究所ガ當地方面ニ於テ購入セル陶湘ノ藏書中百八十八箱（書目ハ前記機密信添附別紙參照）ハ曩ニ天津ヨリ送附濟ナル處（八月二十一日附同總領事發閣下宛往信機密第三四〇號參照）、右殘部全部四箱（書目ハ前記天津發閣下宛機密信第五五〇號別紙參照）ハ今般在當地文部省海外研究員倉石助教授ニ於テ取纏メ、當地通達公司扱客年十二月三十一日天津出帆ノ近海郵船景山丸ニ積込ミ當館發外務省宛書類トシテ發送シ、陸上地ハ神戸トスル樣同助教授ト京都研究所トノ間ニ打合セ濟ナル趣ナリ。尚今回ノ四箱分購入代金ハ曩ニ一括支拂完了濟ナル處、今回ノ運送費ハ追テ横濱正金銀行ヲ通ジ外務省文化事業部ニ請求方取計ヒタル趣ニ付、右御了承相成度。
　　本信寫送附先　　天　津

二十、通運公司書信　昭和 5 年 1 月 25 日接受

東京
外務省文化事業部長坪上貞二殿　　通運公司北京支店

[32]堀内謙介（1886-1979）大正、昭和期の外交官。青島總領事、駐英國一等書記官、パリ不戰條約全權隨員を經て、昭和四年四月中國大使館參事官として北京に赴任。同年、芳澤謙吉公使が駐フランス大使に轉出したため、その後を承けて在中國臨時代理公使を勤めていた。のち外務次官、在米特命全權大使を歷任。『堀内謙介回顧録』（1979）がある。

神戸揚御荷物發送之件

拜啓　毎々御引立を蒙り奉謝上候。陳者去る拾二月二十六日附を以て當地日本公使館喜多書記官殿より御下命被下候京都帝大文學部内東方文化學院京都研究所送りの御荷物、去る三十一日午前十時天津港出帆之景山丸へ積込を了し候處、丁度新年のため休日續き、本日當地正金銀行支店經由にて右引替證正副二通共爲替金銀貳拾貳弗五十四仙也（別紙之通り）と共に發送仕り申上候條、不日貴地正金銀行より御通報あるべきに付、其節金額御拂込の上、BL[33]御入掌の上、早速神戸港卸船會社より御荷物の受取致し度候。右御案内まで、如斯御座候。早々不一。

二十一、（公信案）昭和 5 年 1 月 24 日

文化一　第五六號　　昭和五年一月廿四日

受信人名：京都帝國大學文學部内東方文化學院京都研究所長　狩野直喜

發信人名：文化事業部長　坪上貞二

件名：陶湘藏書輸入ニ關スル件

曩ニ天津ニ於テ購入シタル陶湘藏書殘部四箱ヲ在北平公使館ヨリ當省宛發送シタル□□[34]ニ要スル北平神戸間運送費銀二十二弗五十四仙邦價換算額金十七圓七錢也ヲ、横濱正金銀行ヨリ當方へ請求アリタルニ依リ、其支拂ヲ了シ、茲ニ別紙船荷證券一通及送附了付御査收ノ上、右荷物ヲ日本郵船會社神戸支店ヨリ御受取相成、神戸貴所間ノ輸送ニ要スル費用ハ一時御立替御支拂ノ上、右ヲ北平神戸間ノ輸送費ニ含メテ當方へ御請求相成度。尚陶湘藏書殘部輸送ニ關スル在支那代理公使發外務大臣宛書信寫同封ヲ以テ送附スルニ付、右ニ依リ委細御承知相成度、此段申進ス。

追テ正金銀行「メモ」ハ御請求ノ際證憑書トシテ添附御送付相成度。

一、船荷證券及正金銀行「メモ」各一通、其儘添附發送ノコト

一、在支代理公使發機密第四號寫作成ノ上添附

二十二、松浦嘉三郎致岩邨書記官書信　昭和 5 年 1 月 24 日

昭和五年一月廿四日

東方文化學院京都研究所

松浦嘉三郎

岩邨書記官殿

拜啓　前畧舊臘末在北平日本公使館より貴部宛を以て書籍入木箱四個送達致したる筈に有之と存候。そは昨夏貴部が敝處のために特に購入せられたる陶氏藏書の殘部に係るものにして、前次天津にて購入交涉に當りたる倉石武四郎君が前例に按じて公使館に依願して貴部に向け發送したるものに有之候。然る處、爾來迄于

[33]bill of lading（船荷證券）の略。

[34]原文、インクの滲みで讀めず。

今既に約一ヶ月經過致したるも未だ貴部より何等の御通知に接せず、或ひは未だ到着せざるに由るや又何か運搬上故障を發生したるに由るか、その事情若し貴部に於て判明致し候こと御尋ね申上候間、何分の御消息を御返信賜はり度、此段願可申上候。匆々不一。

二十三、狩野直喜致外務省文化事業部長坪上貞二書信　昭和 5 年 2 月 22 日

第三四號
　　昭和五年二月二十二日
　　東方文化學院京都研究所
　　主任　狩野直喜（公印）
外務省文化事業部長坪上貞二殿
拜啓貴部ヨリ本所へ御寄贈被下候天津陶氏藏本中未着ノ分書籍四箱ハ本日無事到着致候。就テハ神戸ヨリ本所迄ノ運賃拾八圓參拾壹錢也御申越ノ通立替支拂ヲ了シ置候間、宜敷御取計被下度、別紙領收證相添此段御依頼申上候也。

二十四、（公信案）昭和 5 年 3 月 7 日

文化二　第三六五號　昭和五年三月七日附
受信人名：京都帝國大學文學部内東方文化學院京都研究所長　狩野直喜
發信人名：文化事業部長　坪上貞二
件名：陶湘藏書輸送運賃ニ關スル件
本月二十二日附第三四號ヲ以テ陶氏藏書未着分四箱ニ對スル神戸ヨリ貴所迄ノ運賃御立替ノ上領收證添付御請求ノ□□□、茲ニ金拾八圓參拾壹錢也、當方ヨリ支出ノ上、別途當省會計課ヨリ支拂通知書ヲ以テ送付セルニ付、御査收相成度、此段申進ス。
　追テ客月二十四日附文化一普通第五六號ヲ以テ申進シ置キタル當部ニ於テ一時支拂置キタル北平神戸間ノ運賃銀弐十弐弗五拾四仙、此換算邦貨金拾七圓七錢ハ曩ニ御送付ニ及ニ置キタル正金銀行「メモ」添附、更ニ御請求相成度。

二十五、狩野直喜致外務省文化事業部長坪上貞二書信　昭和 5 年 3 月 4 日

第三六號
　　昭和五年二月二十二日
　　東方文化學院京都研究所
　　主任　狩野直喜（公印）
外務省文化事業部長坪上貞二殿
拜啓昨年御寄贈相成候天津陶氏書籍目録作製提出致候間御査收被下度候也。

二十六、松浦嘉三郎致外務省文化事業部長坪上貞二書信　昭和 5 年 3 月 11 日

昭和五年三月十一日
東方文化學院京都研究所
松浦嘉三郎拜

拜啓時下御清祥ノ段奉賀候。　陳者三月七日貴下發狩野博士宛の陶湘藏書輸送運賃に關する貴信文意に關して敝所に於いは種々推考せしも尚ほ諒解致し兼ね、大いに困難致し居り候。そは最後の「追て書」の中にある「客月廿四日附文化一普通第五六號」の手紙を小生が狩野博士の御依頼により保管致し居りしも紛失致したる爲め七日付貴信の「追て書」の意味諒解致し兼ねるために有之候。就いては小生より今一度貴下を煩はし「客月廿四日附文化一普通第五六號」の手紙の内容を聞くやう依頼され申し候間、甚だ御迷惑ながら該信の寫しを御送付願度、乍恐入候御依願申上候。此段御願申上候。匆々不一

坪上貞三（ママ）様 侍史

二十七、（公信案）昭和 5 年 3 月 24 日

昭和五年參月廿四日附
受信人名：京都帝國大學文學部陳列館内東方文化學院京都研究所　松浦嘉三郎
發信人名：坪上外務省文化事業部長
件名：公信寫し送附ノ件

拜復、益々御清穆奉賀候。陳者過日御照會ニ係ル客月廿四日附文化普通第五十六號寫一通別紙ノ通及御送付候條、御査收相成度、此段申進候。敬具。

（別紙寫一通至急添附發送ノコト）

二十八、狩野直喜致外務省文化事業部長坪上貞二書信　昭和 5 年 8 月 26 日

第三四號
昭和五年八月二十六日
東方文化學院京都研究所
主任　狩野直喜（公印）
外務省文化事業部長坪上貞二殿

拜啓貴部ヨリ曩ニ天津ニ於テご購入相成タル陶湘藏書殘部四箱ヲ在北平公使館ヨリ貴部宛發送サレタルニ關シ、右ニ要スル北平神戸間運送費ヲ横濱正金銀行ヨリ貴部へ請求有之候處、直チニ御支拂有之候ニツイテハ、來示ニ從ヒ先般御送被下候「メモ」ヲ添附シ、別紙請求書提出候也。

第三四號ノ二
昭和五年二月　　日
東方文化學院京都研究所

主任　狩野直喜

外務省文化事業部長坪上貞二殿

拝啓、此度貴部ニ於テ購入サレタル天津陶湘藏書殘部四箱ノ運送費ニツキ、神戸京都間ノ分ハ、別ニ昭和五年二月二十二日第三四號ヲ以テ請求致候處、北平神戸間ノ分銀二十二弗五十四仙邦貨換算額十七圓七錢也、右横濱正金銀行へ御支拂被下度、此段及請求候也。

3-1　倉石武四郎致松浦嘉三郎書簡（圖版）

（京都大學人文科學研究所所藏）

一、昭和四年端午節

二、昭和四年六月七日

三、昭和四年六月十三日

四、昭和四年六月二十三日

五、昭和四年七月十一日

六、昭和四年七月二十六日

七、昭和四年八月七日

八、昭和四年十月五日

九、昭和四年十一月二十八日

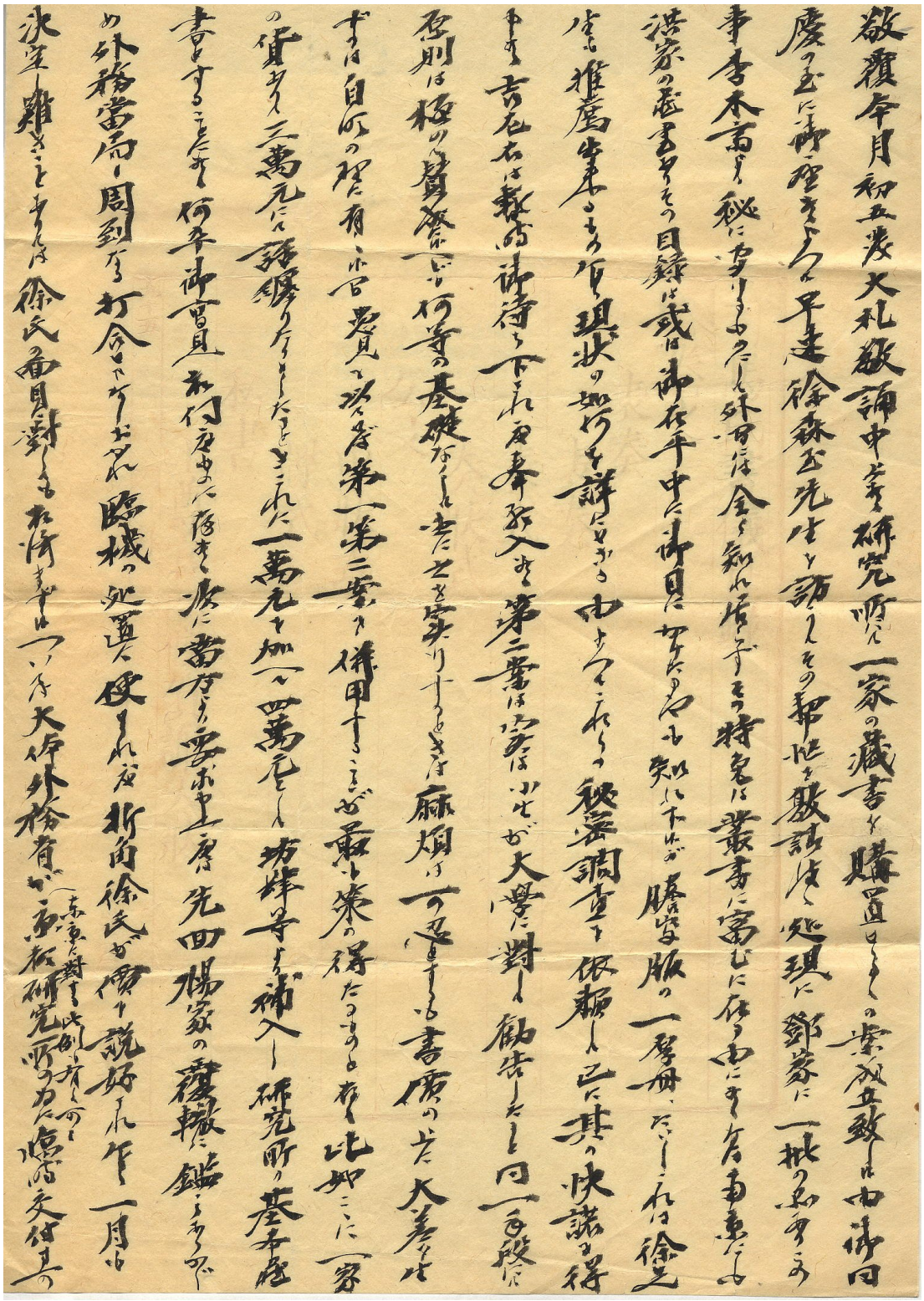
十、昭和五年一月二十四日

附一、昭和四年十月九日來熏閣陳氏致松浦嘉三郎信札

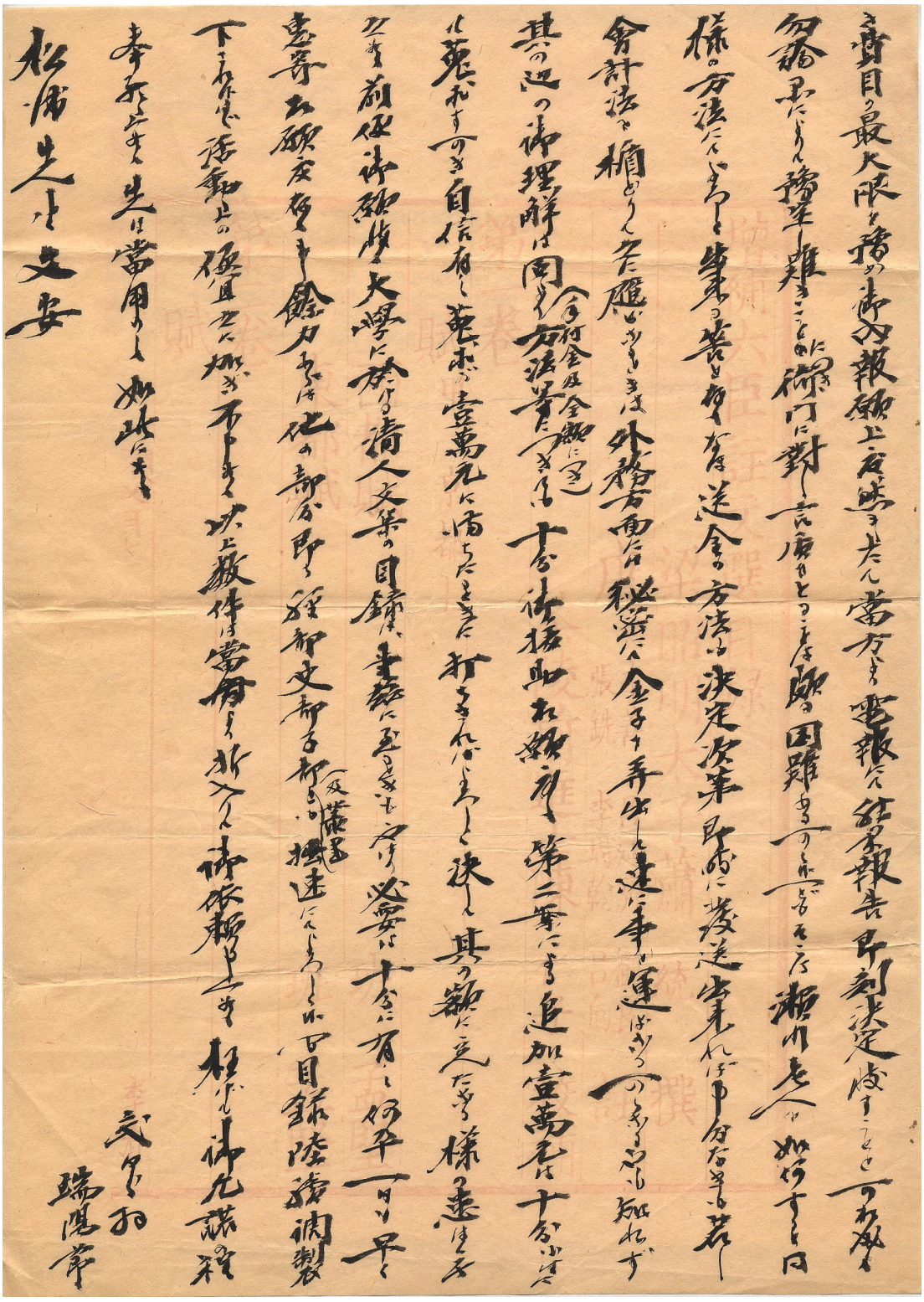
附二、倉石發往松浦電報

附三、狩野直喜發往松浦嘉三郎電報

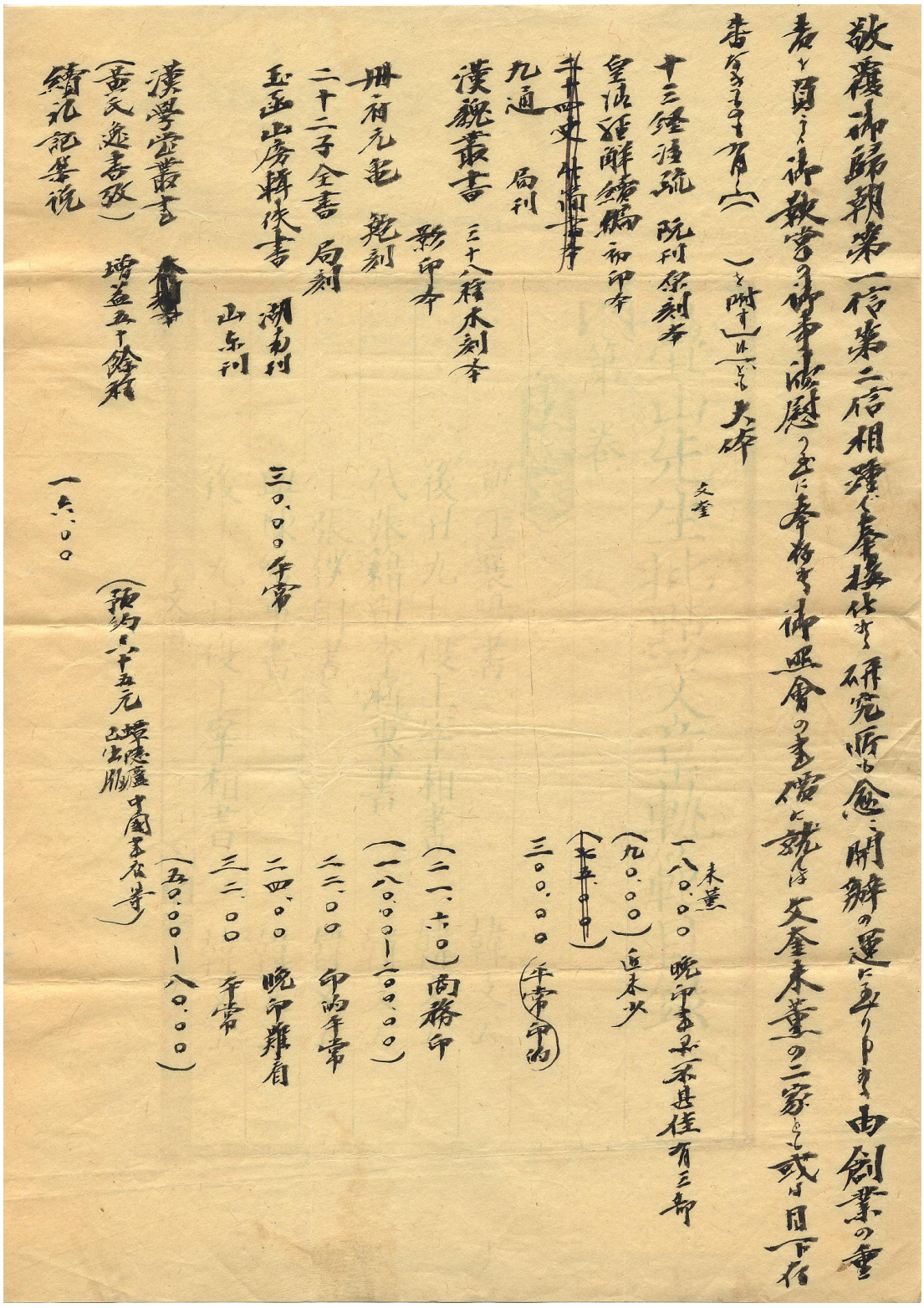
附四、倉石武四郎發往狩野直喜電報



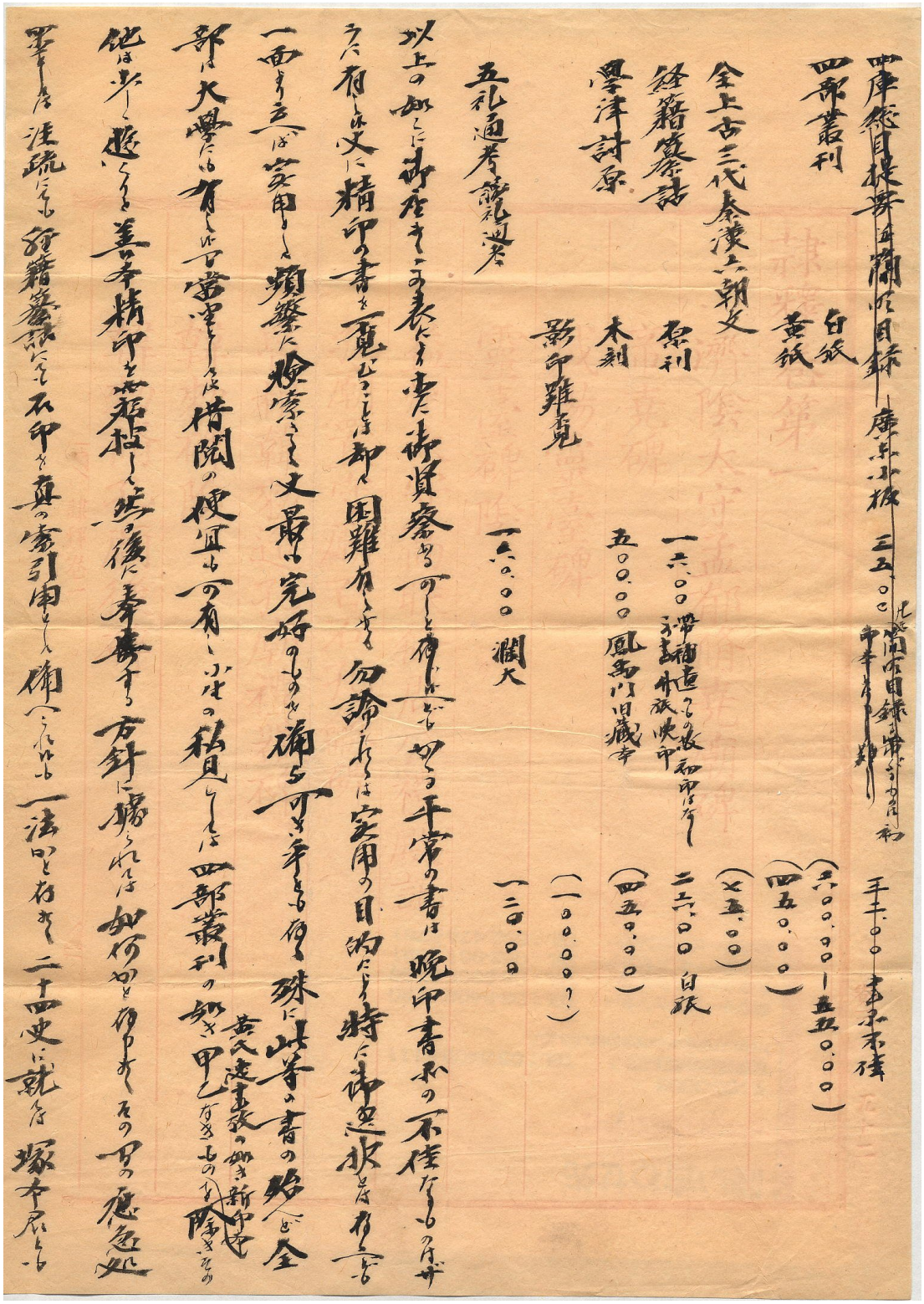
一、昭和四年端午節（1）



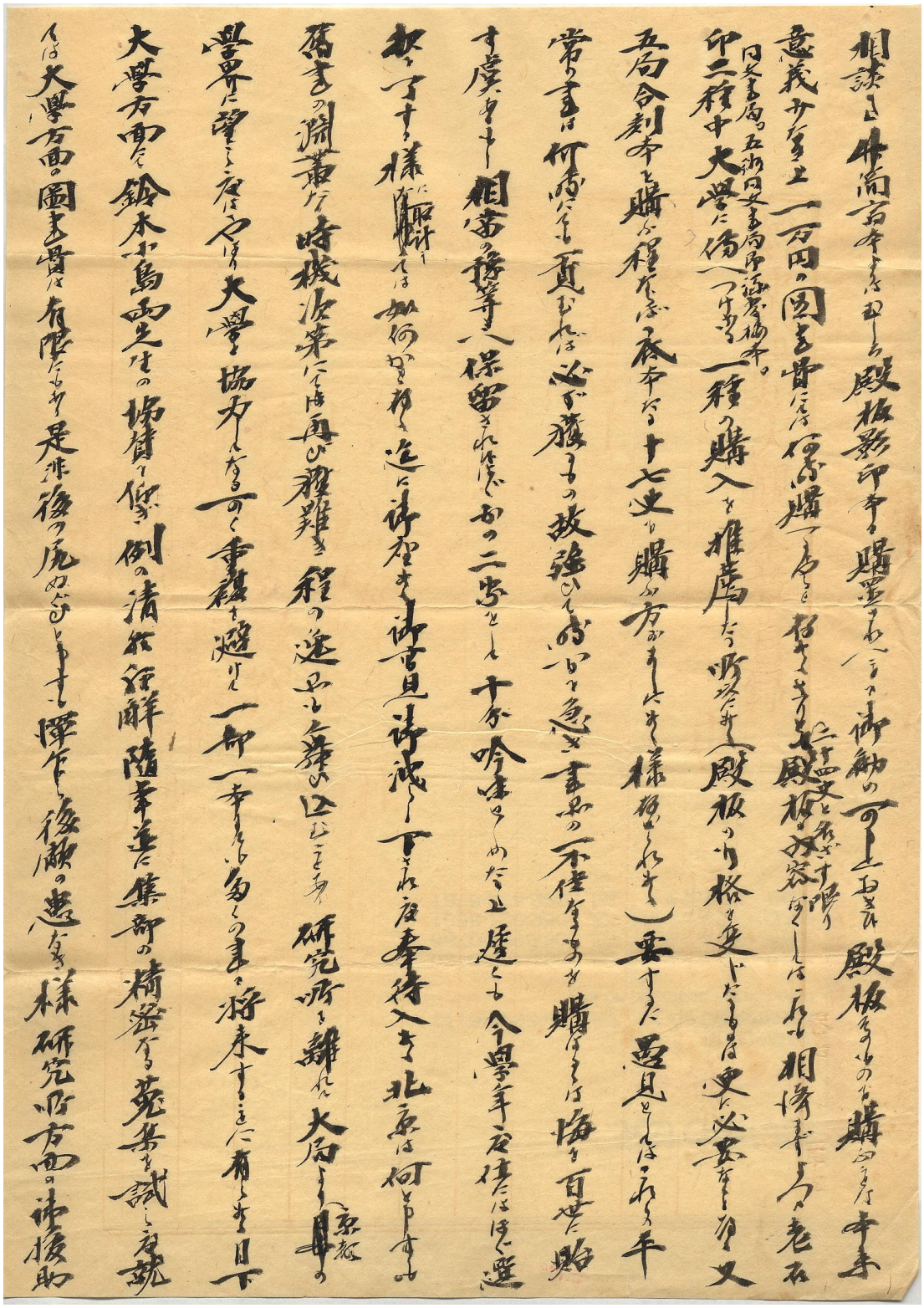
一、昭和四年端午節（2）



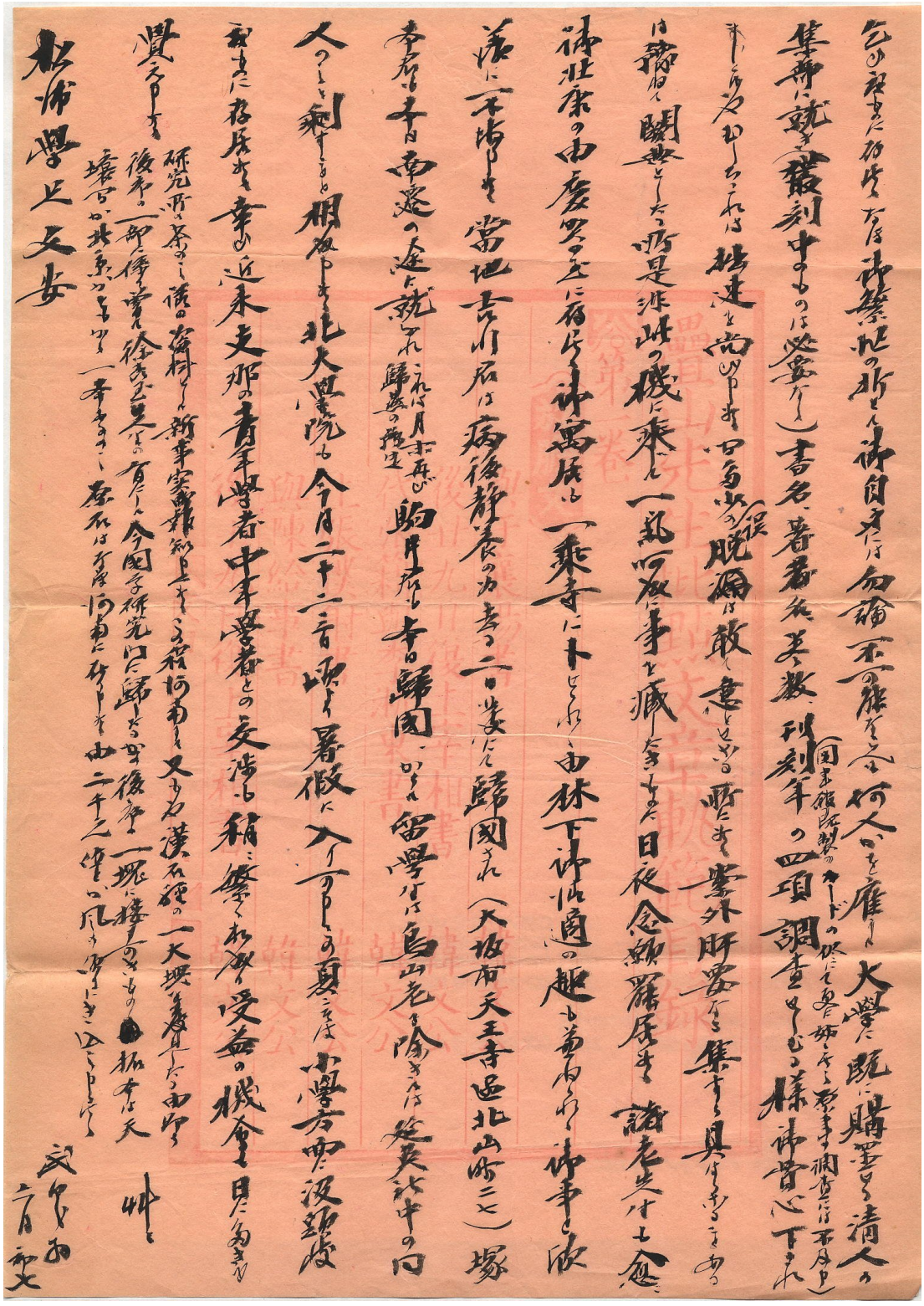
二、昭和四年六月七日（1）



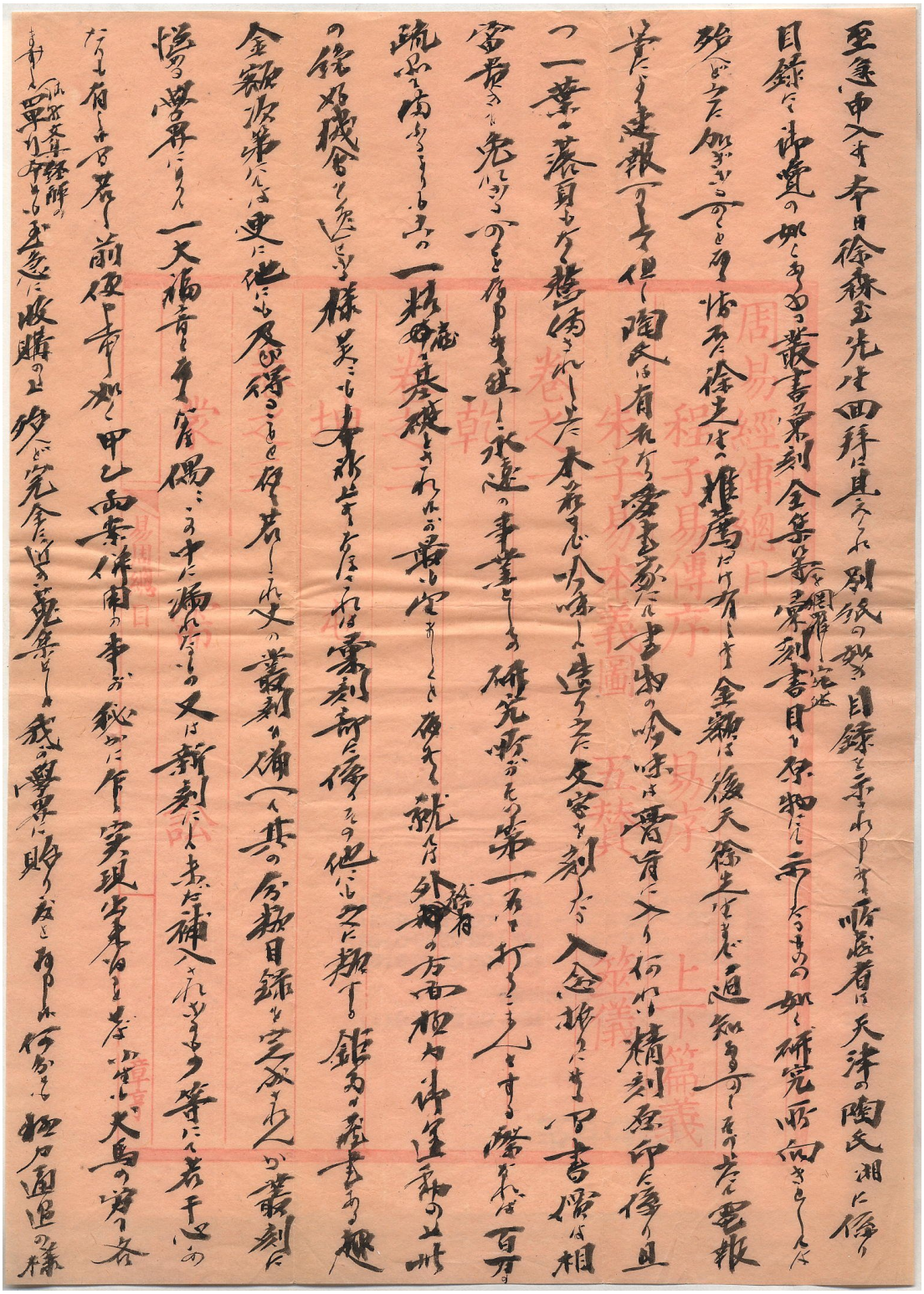
二、昭和四年六月七日（2）



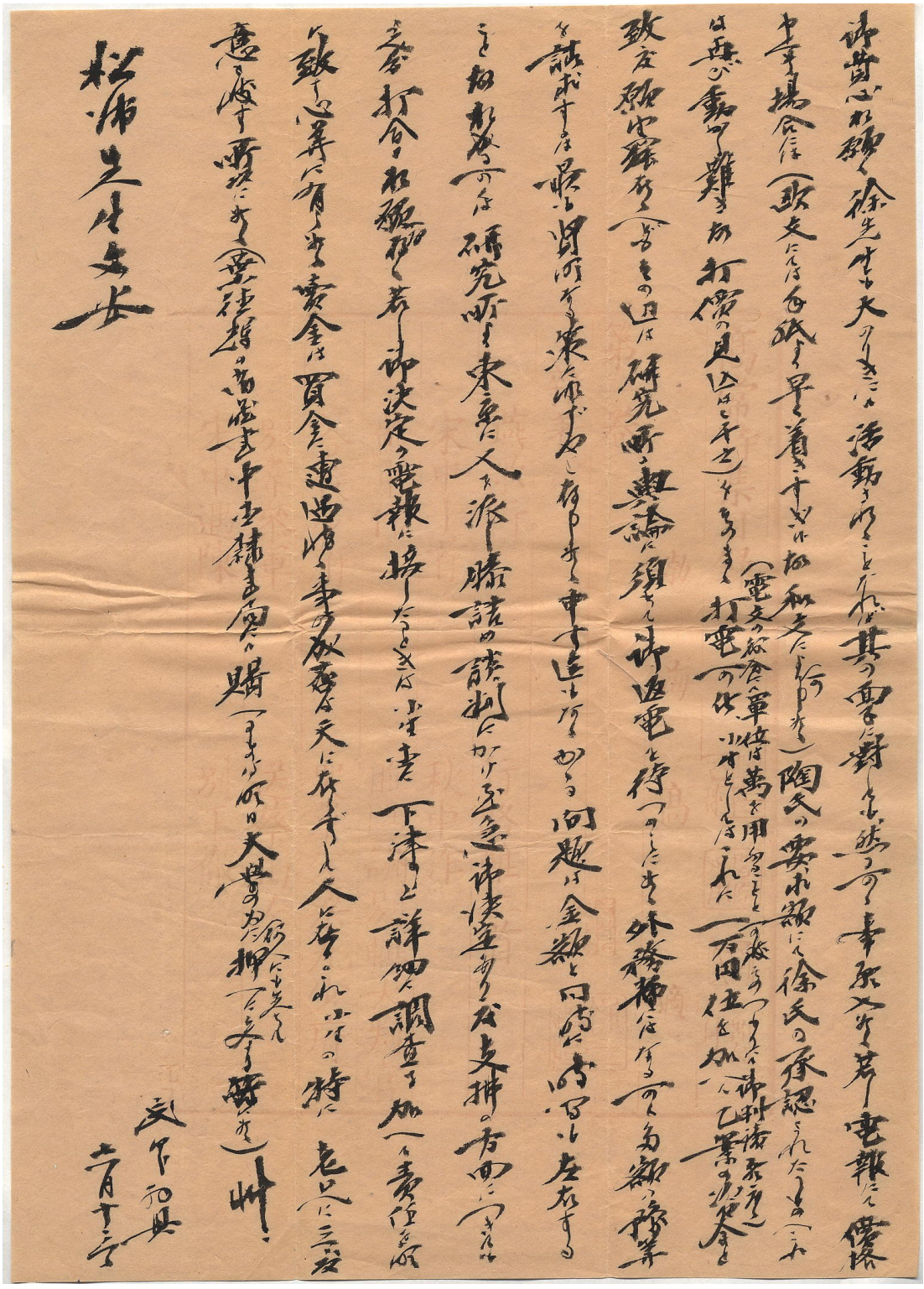
二、昭和四年六月七日（3）



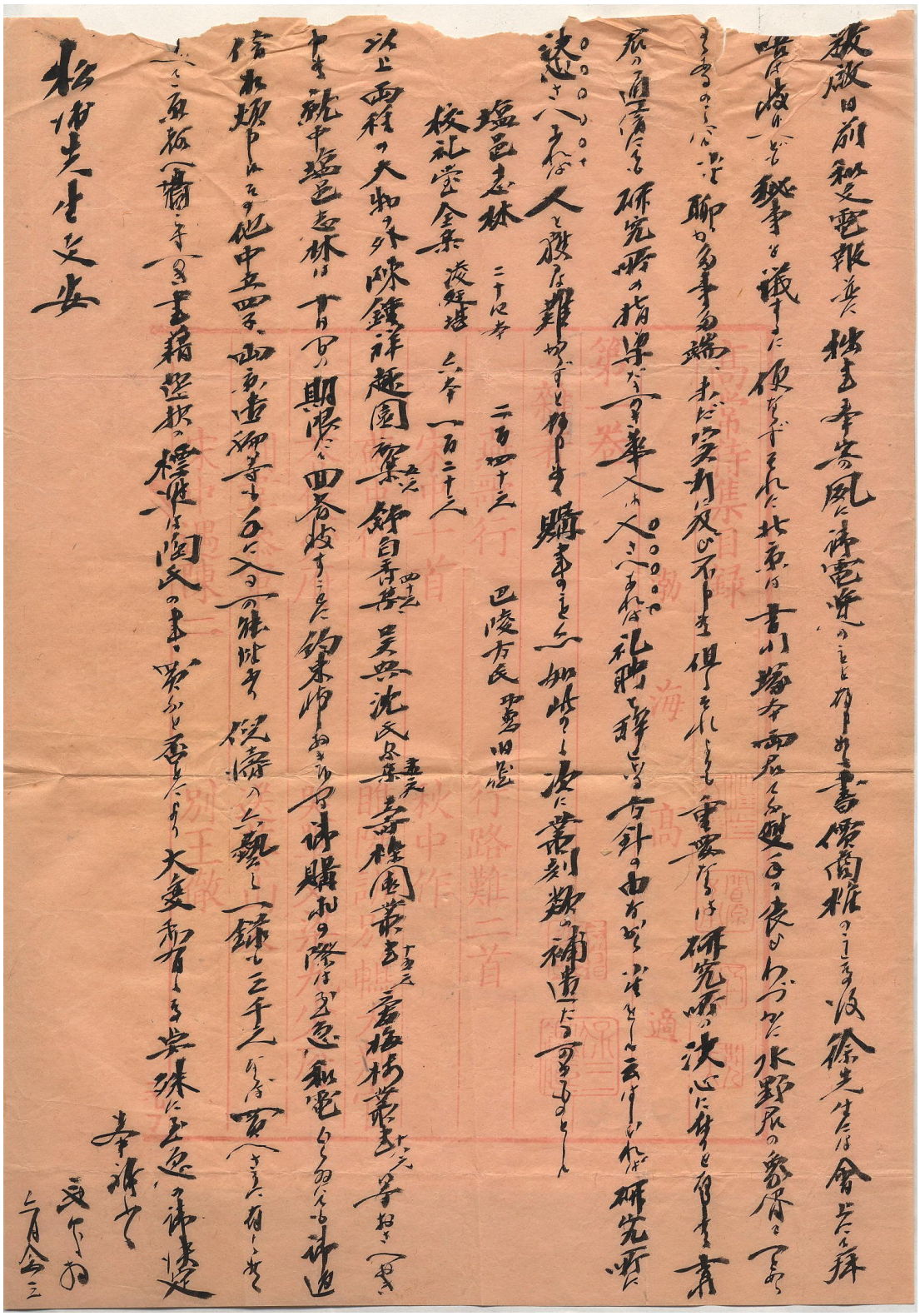
二、昭和四年六月七日（4）



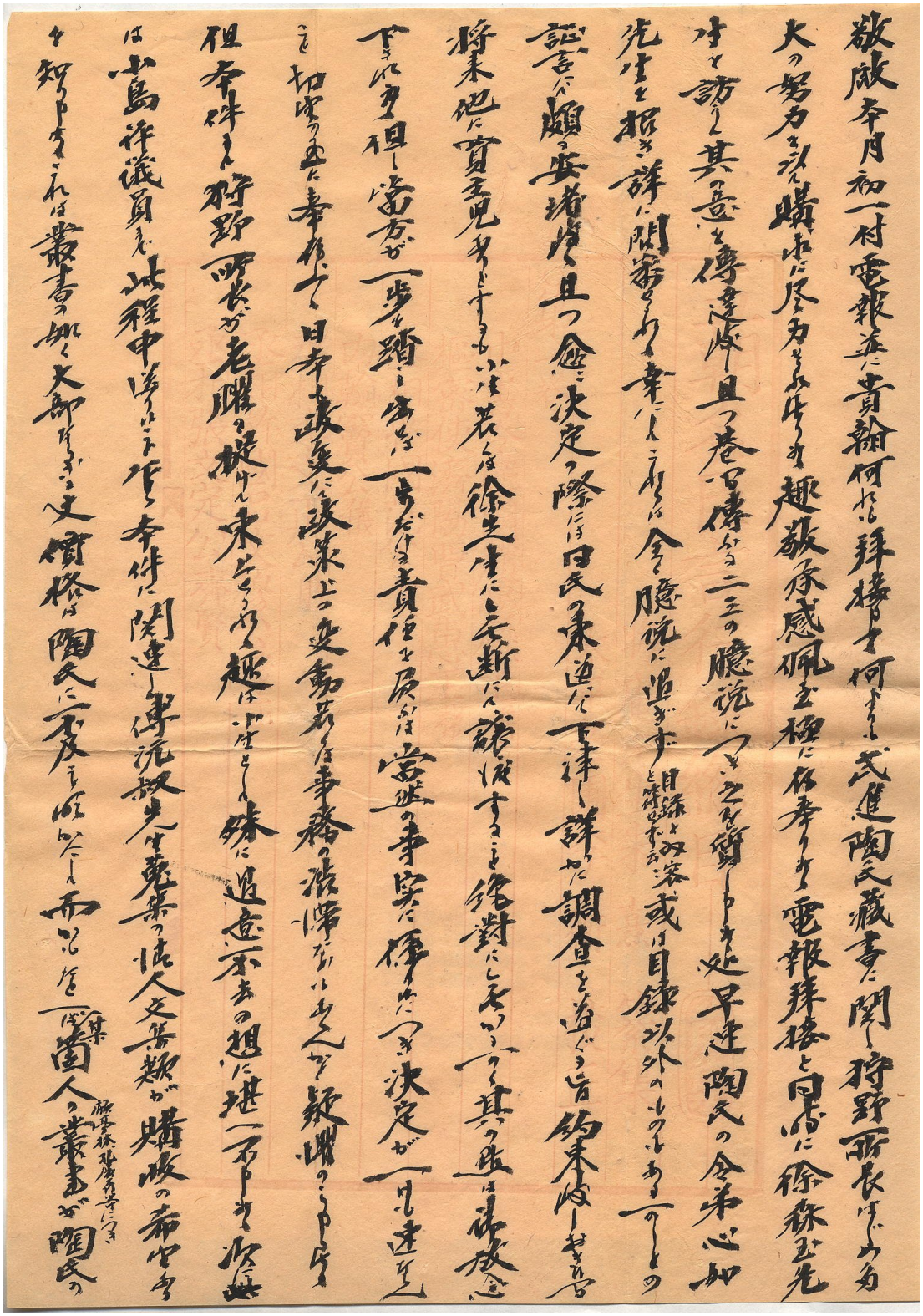
三、昭和四年六月十三日（1）



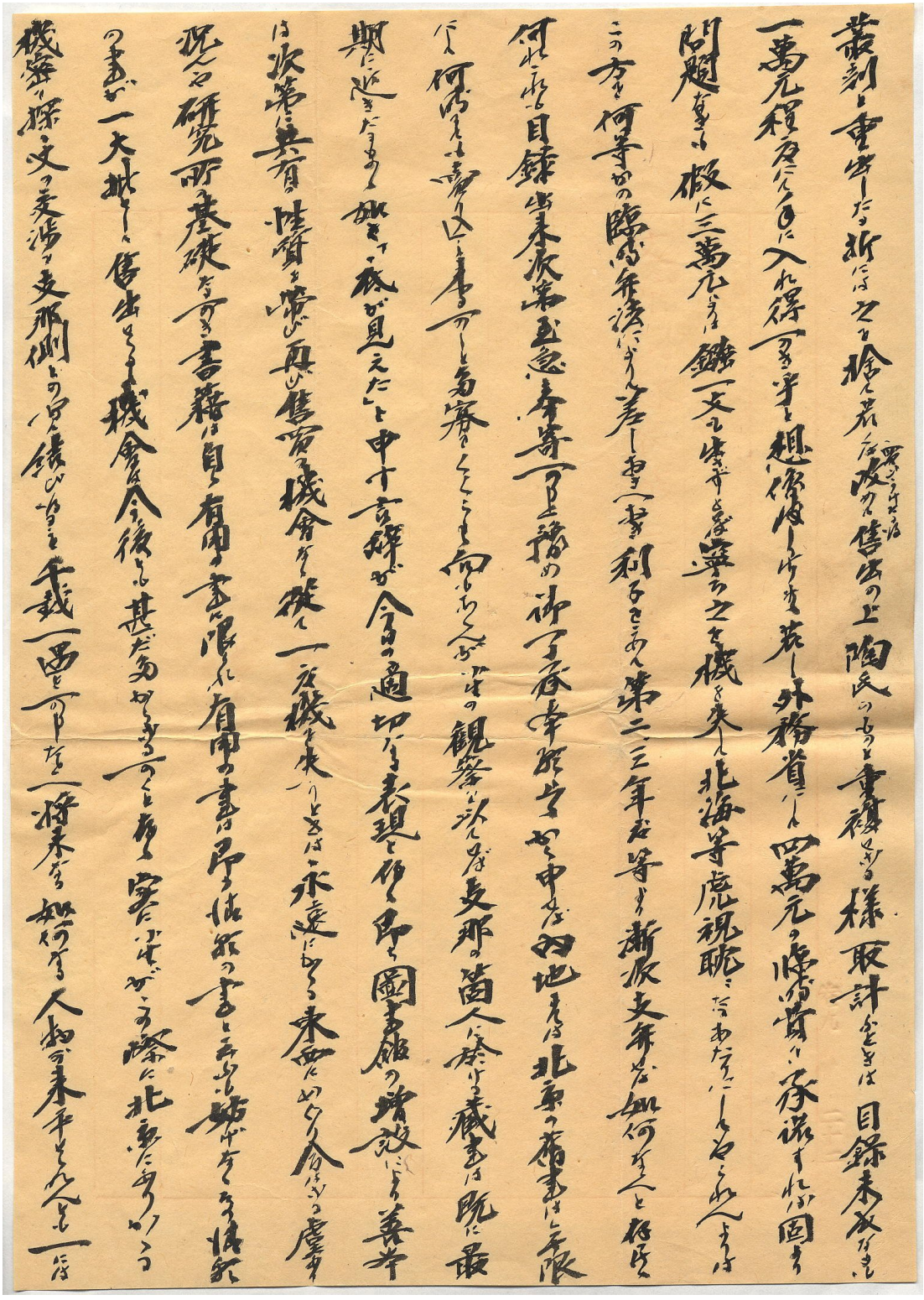
三、昭和四年六月十三日（2）



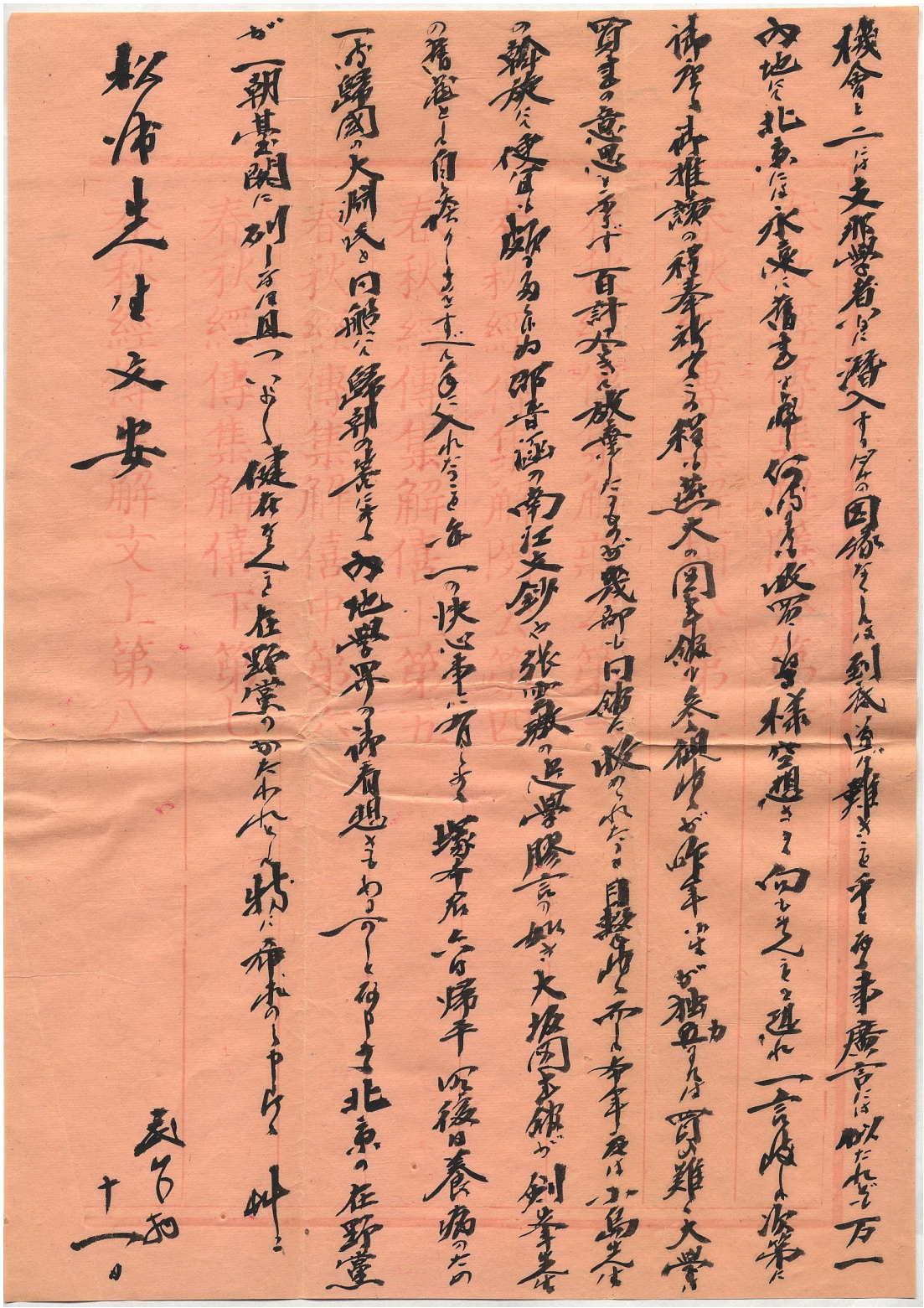
四、昭和四年六月二十三日



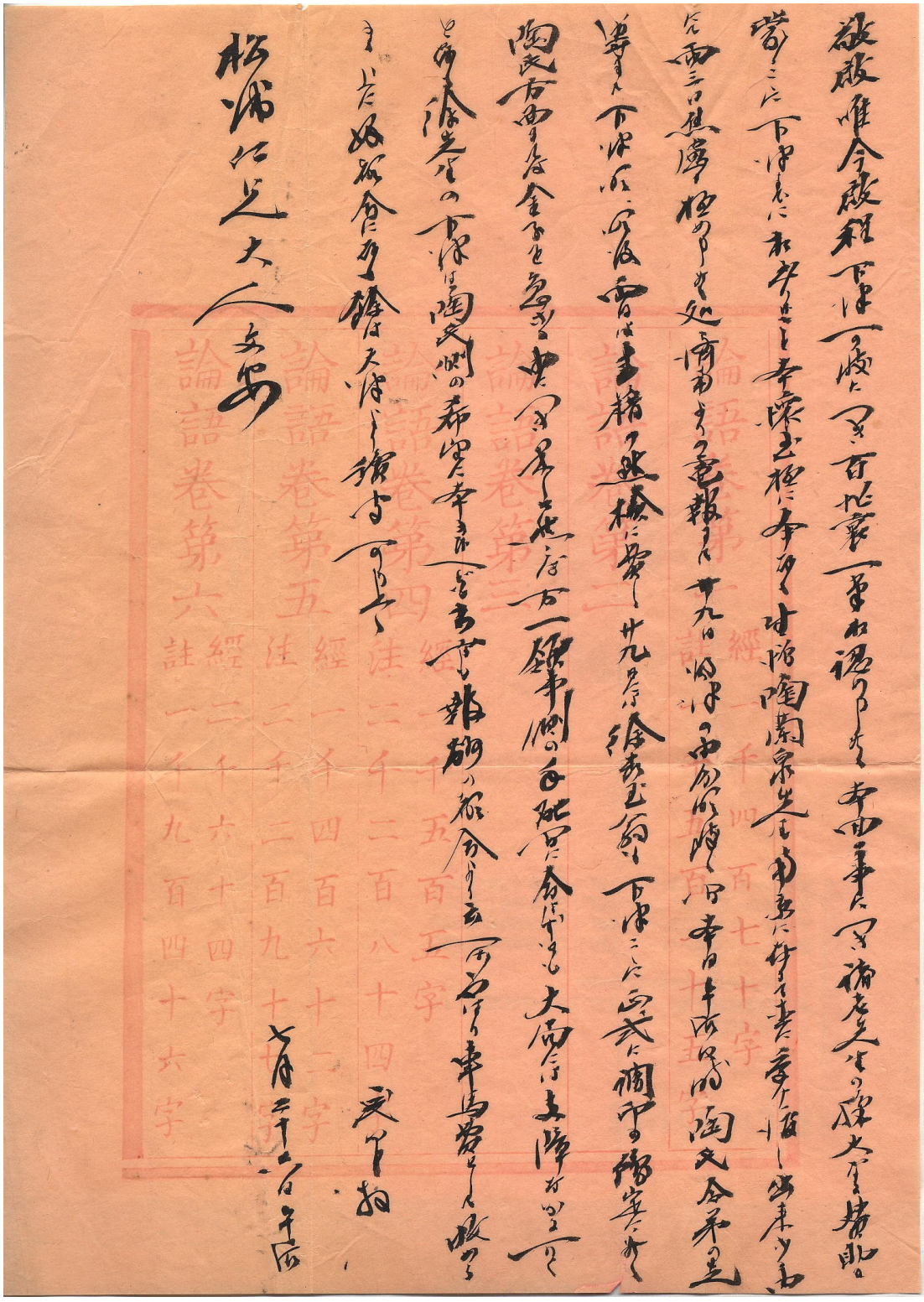
五、昭和四年七月十一日（1）



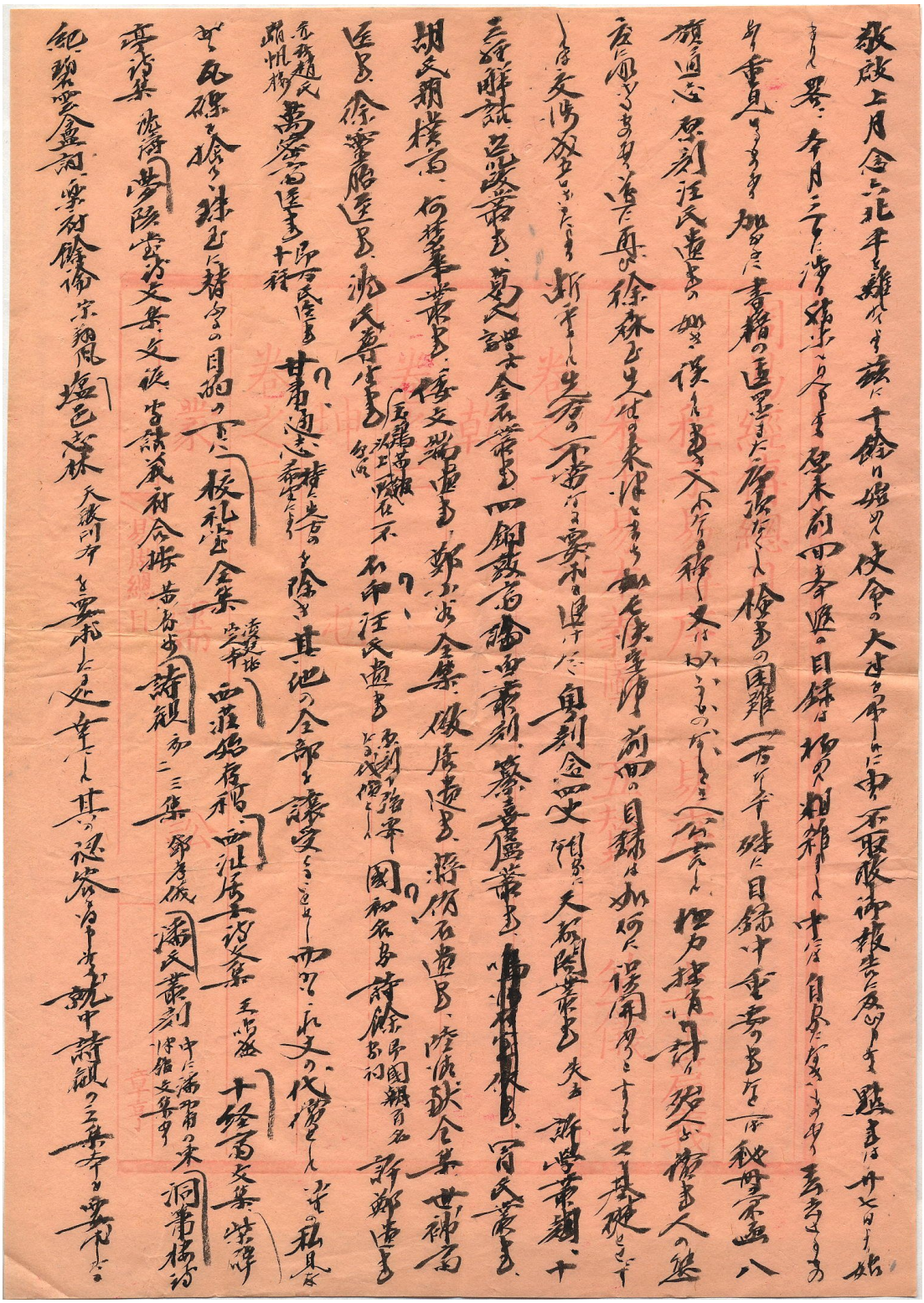
五、昭和四年七月十一日（2）



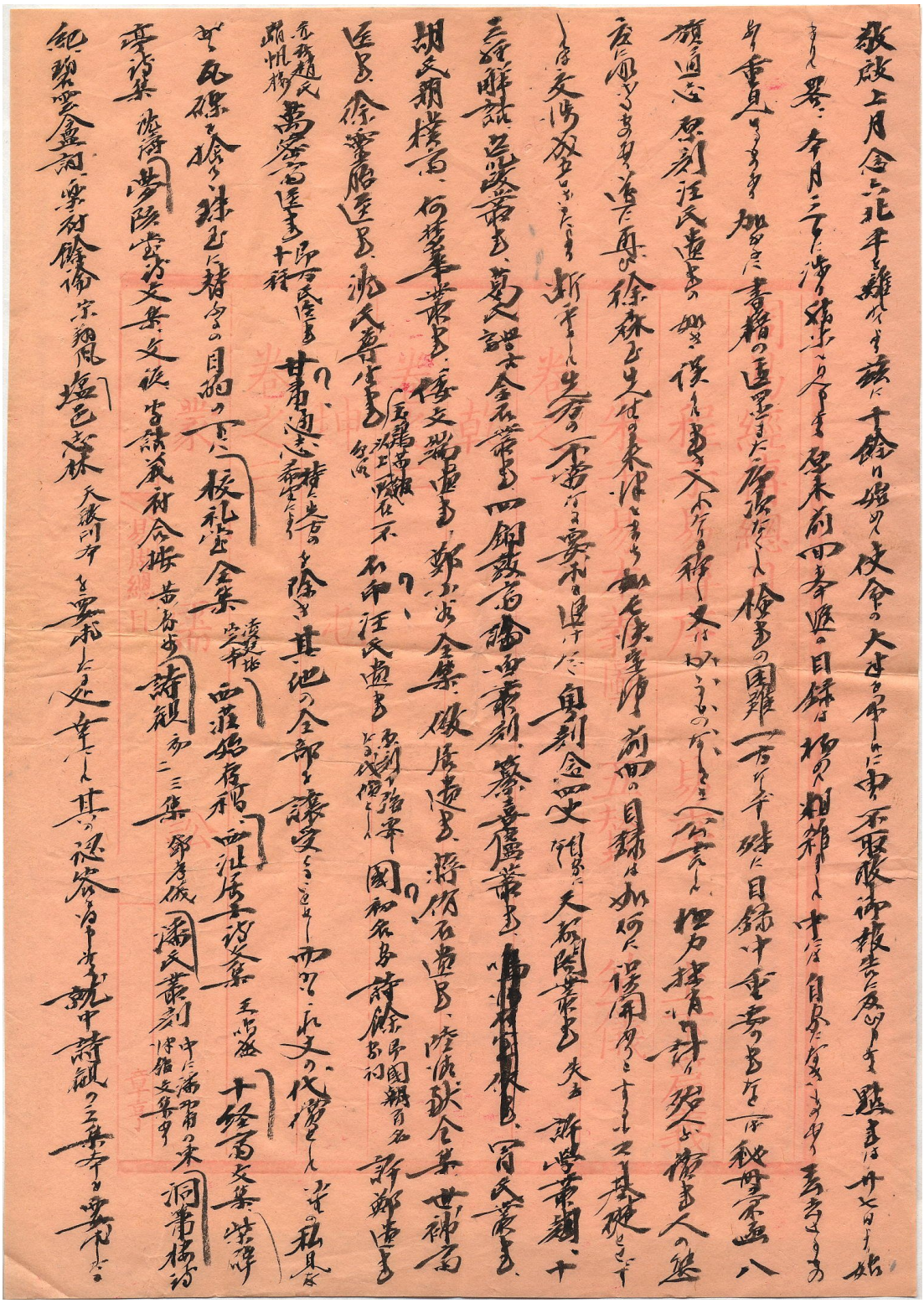
五、昭和四年七月十一日（3）



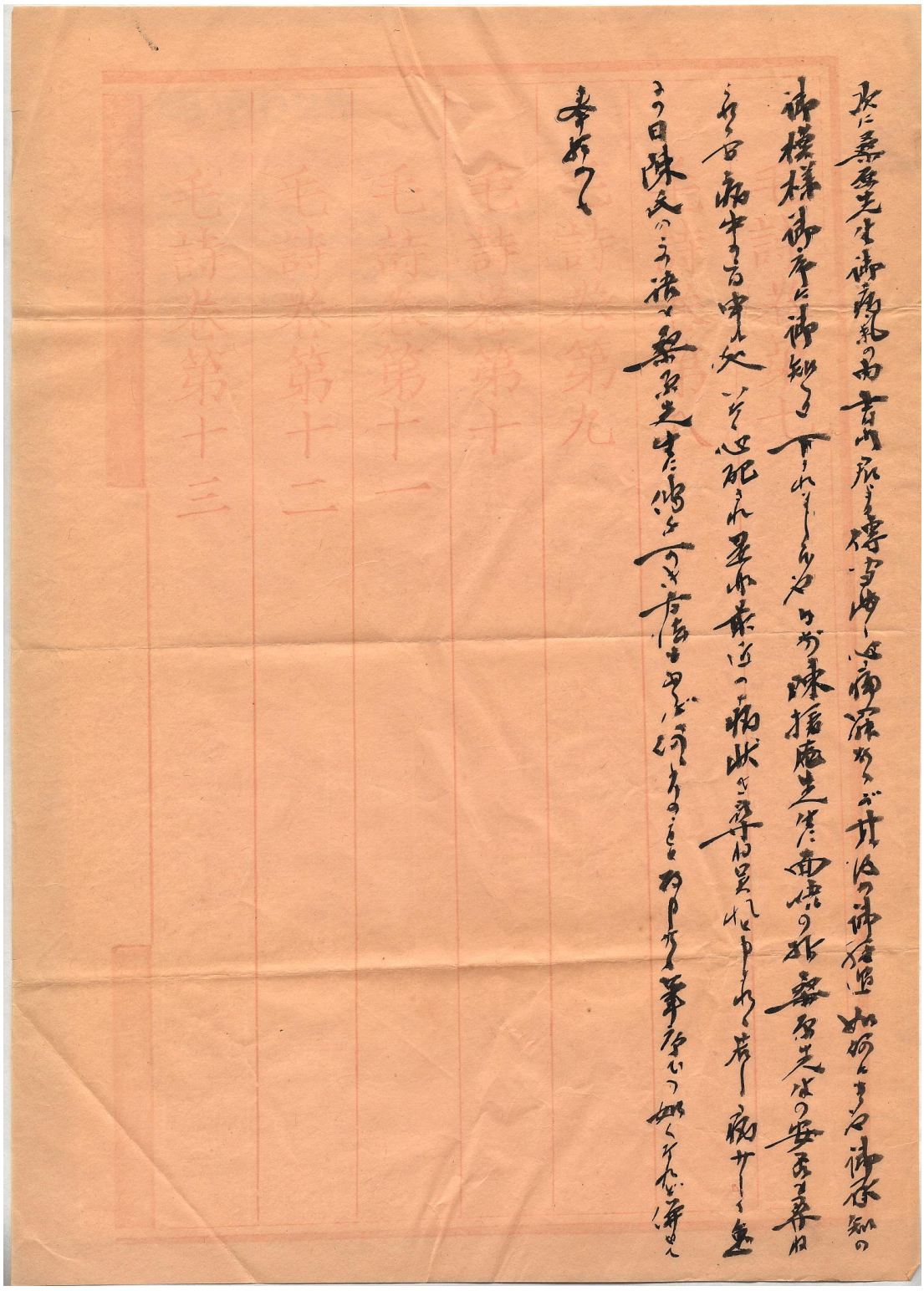
六、昭和四年七月二十六日



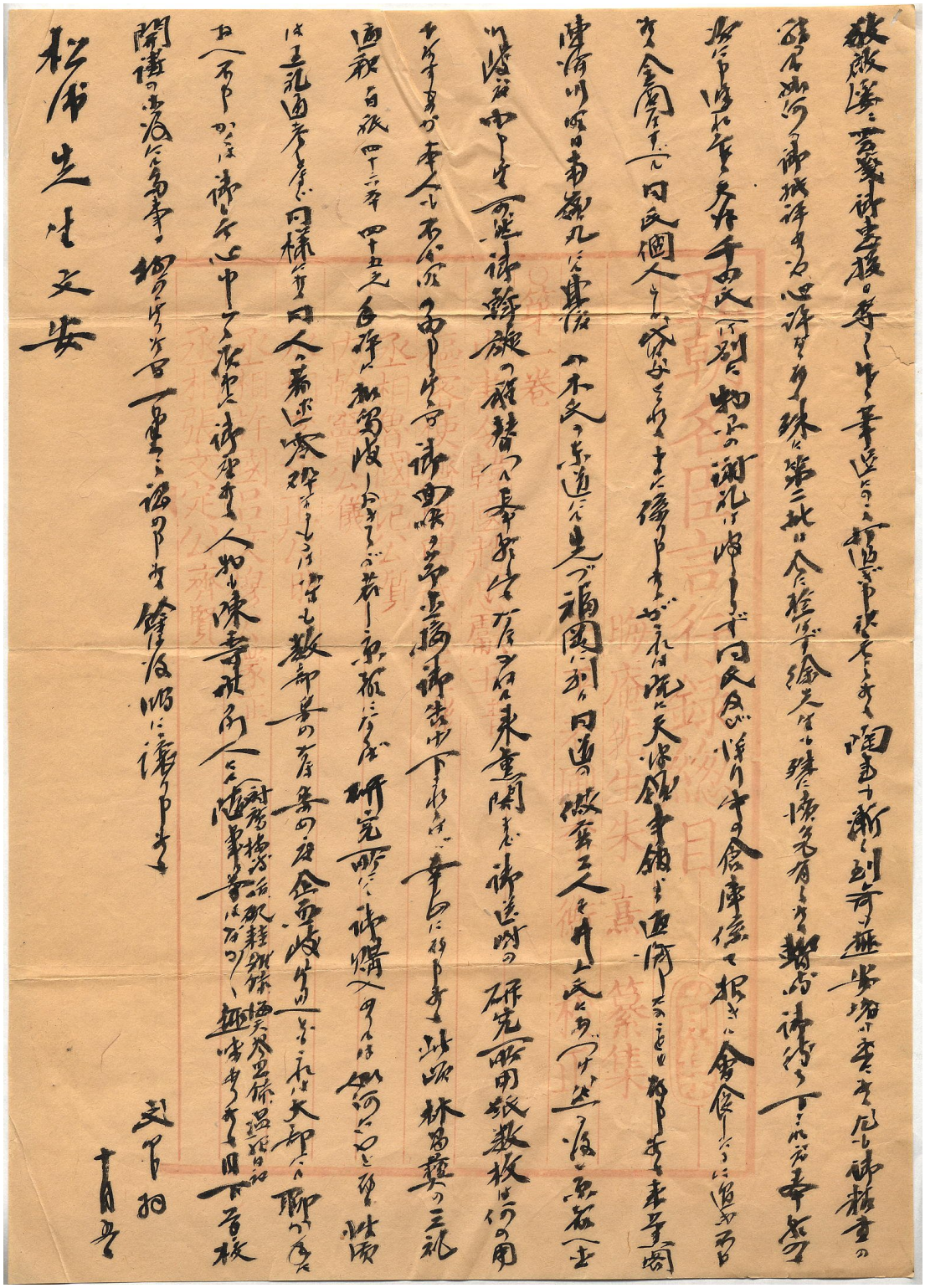
七、昭和四年八月七日（1）



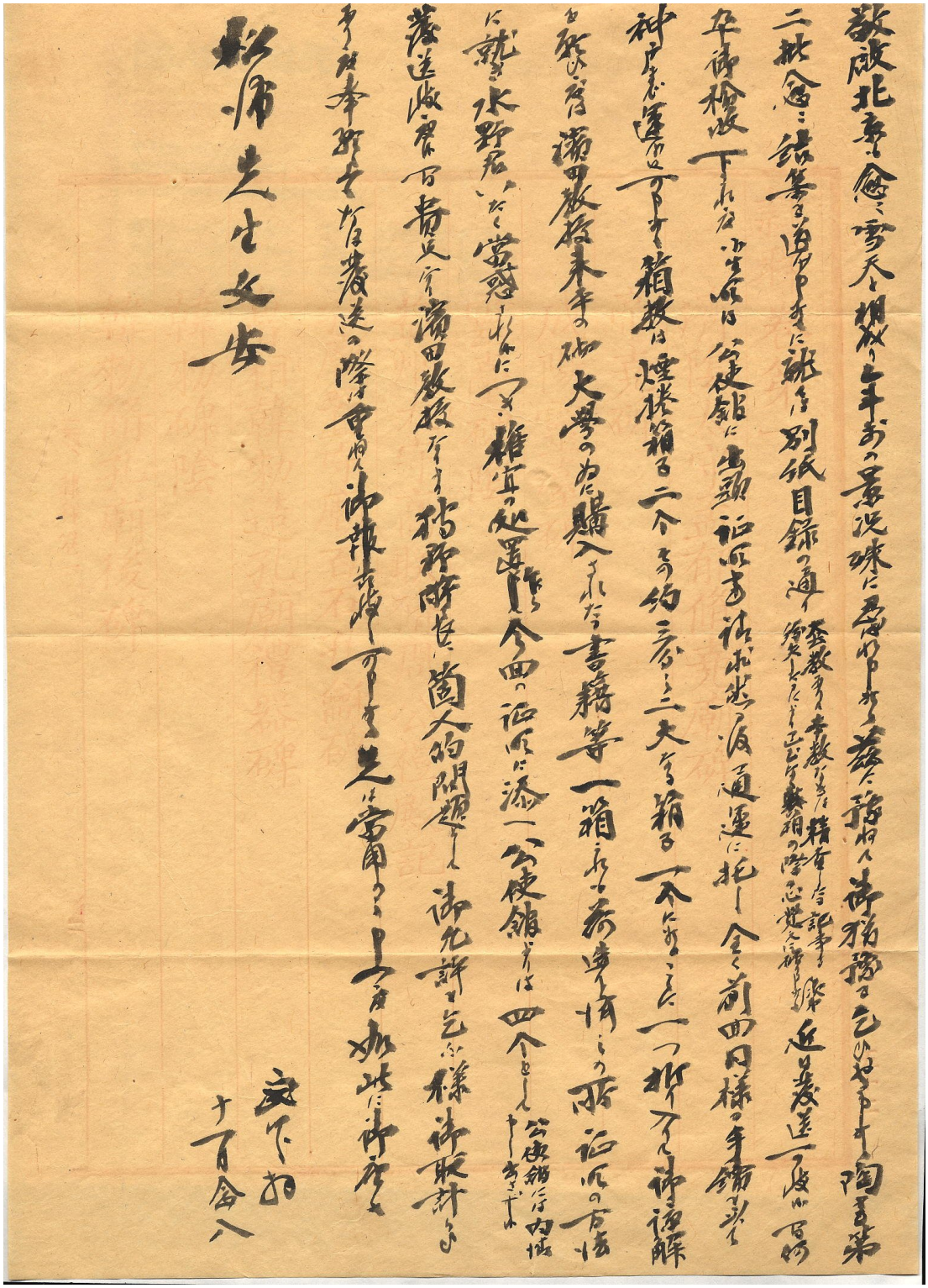
七、昭和四年八月七日（2）



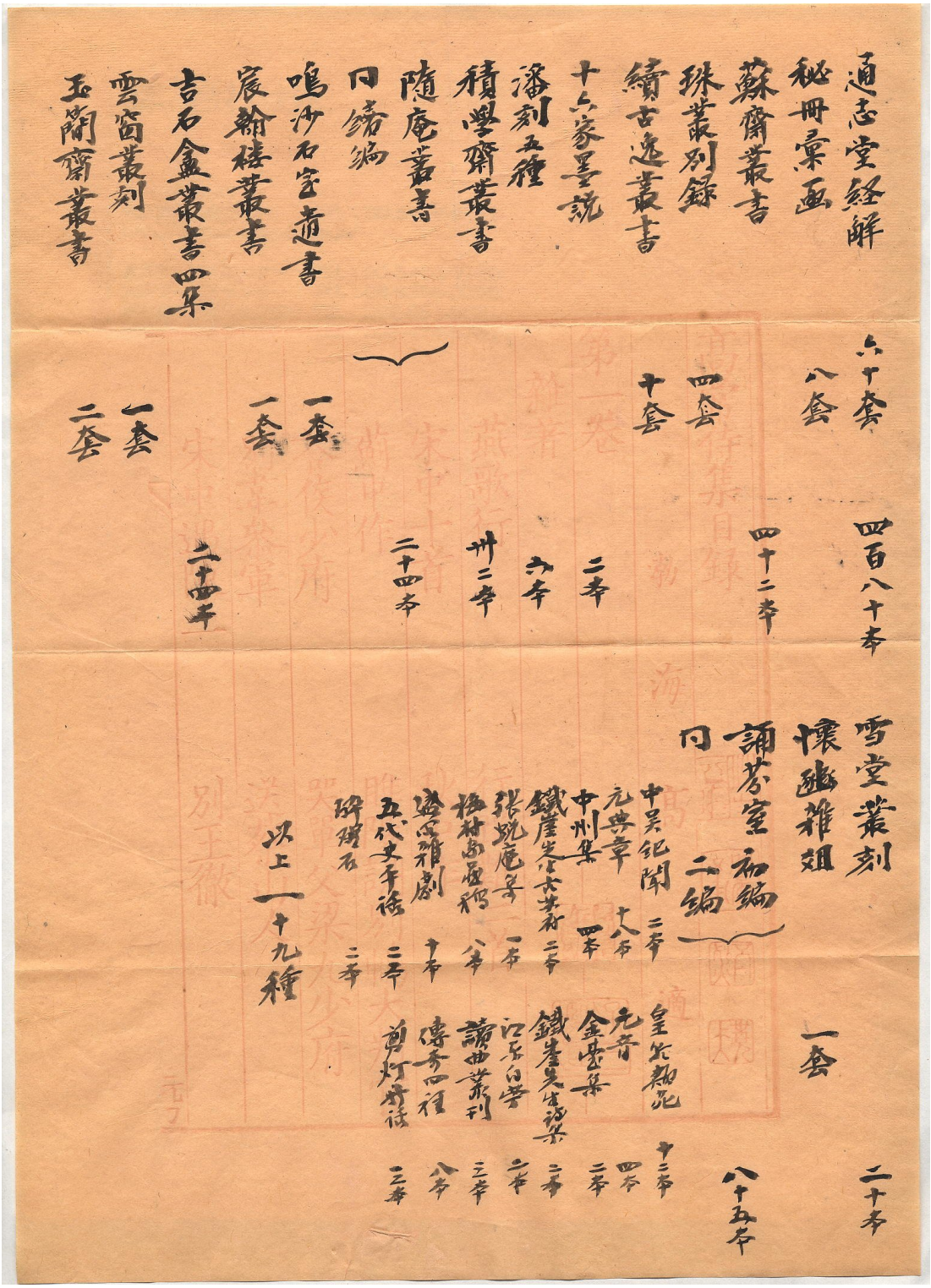
八、昭和四年十月五日（1）



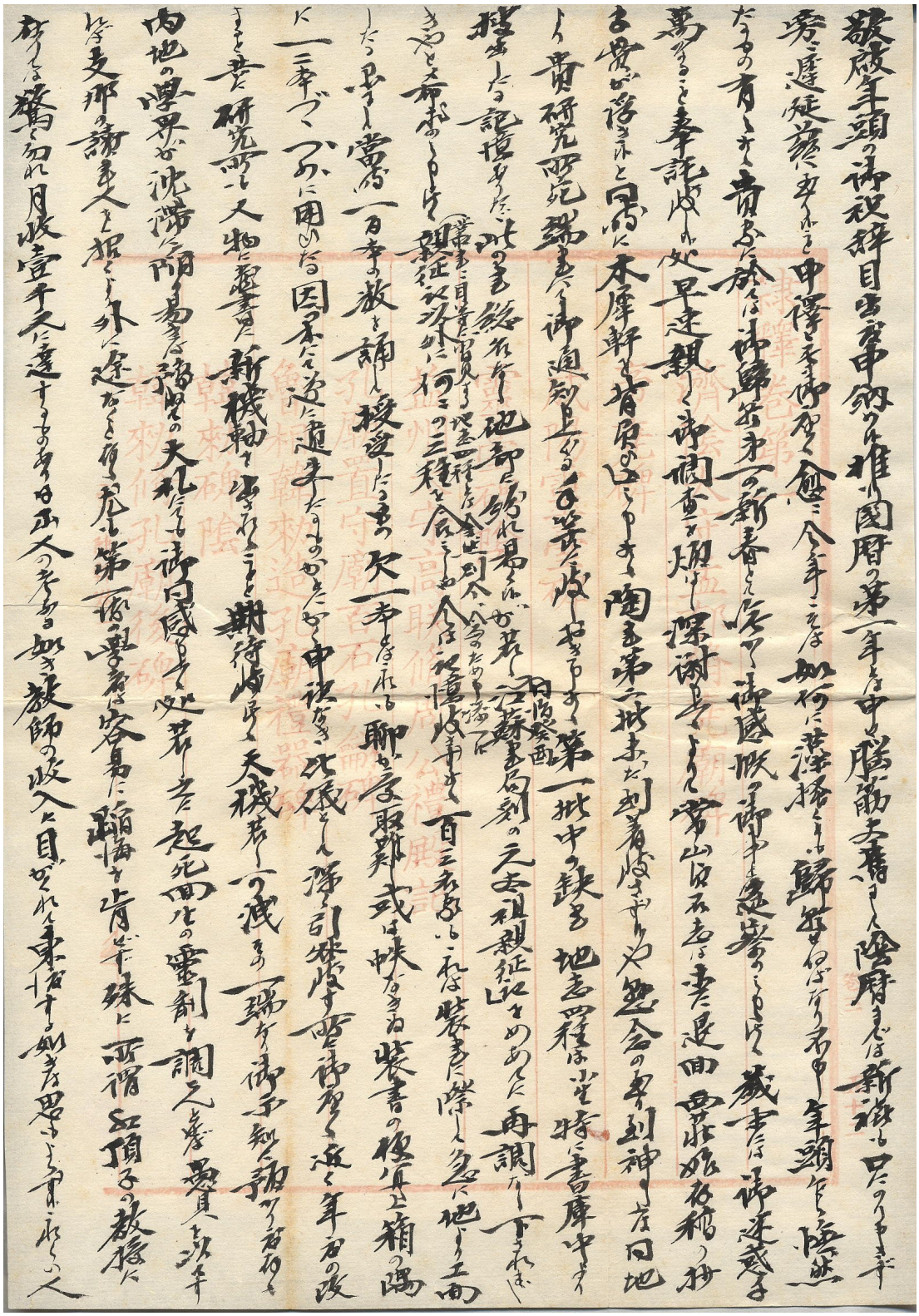
八、昭和四年十月五日（2）



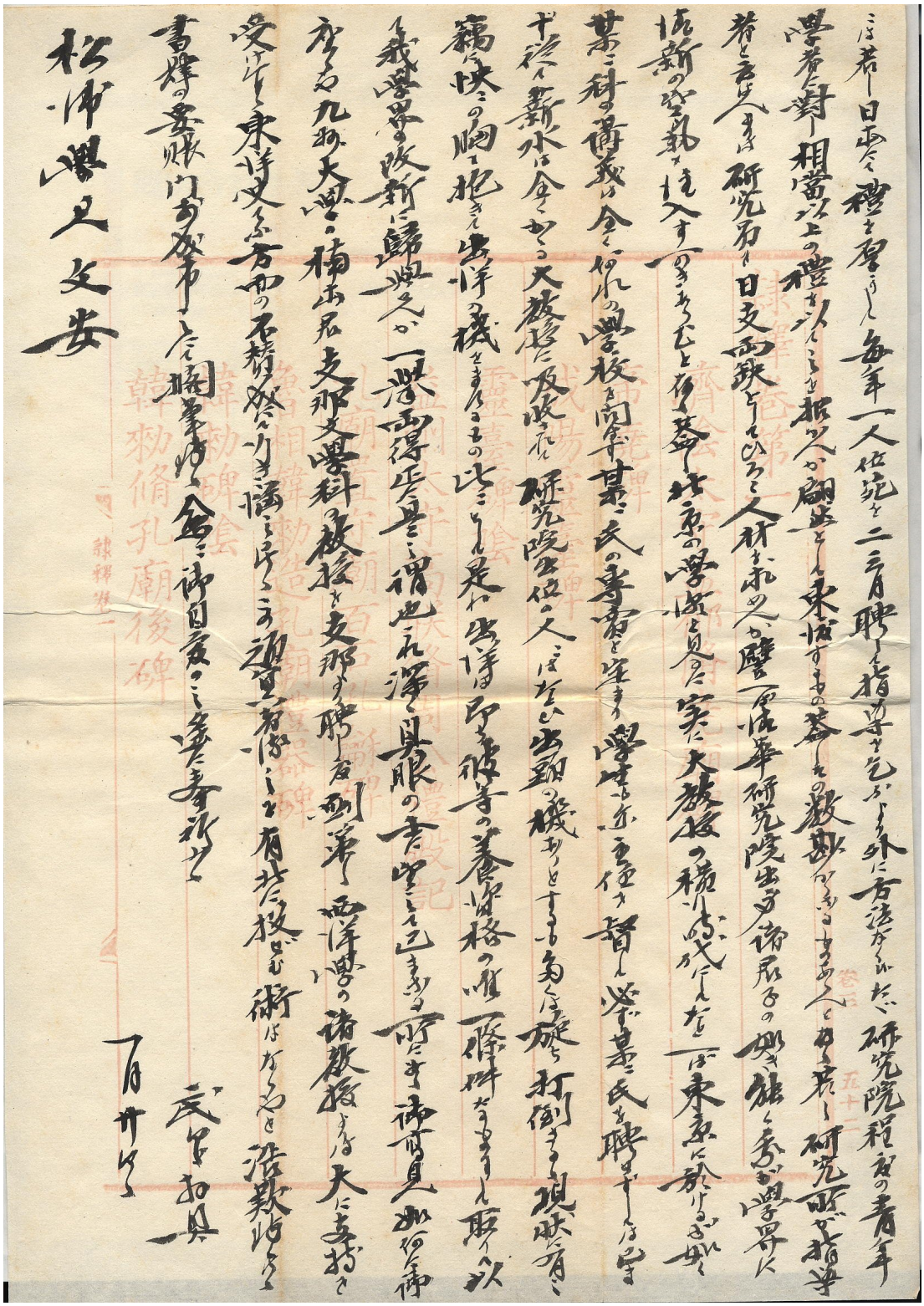
九、昭和四年十一月二十八日（1）



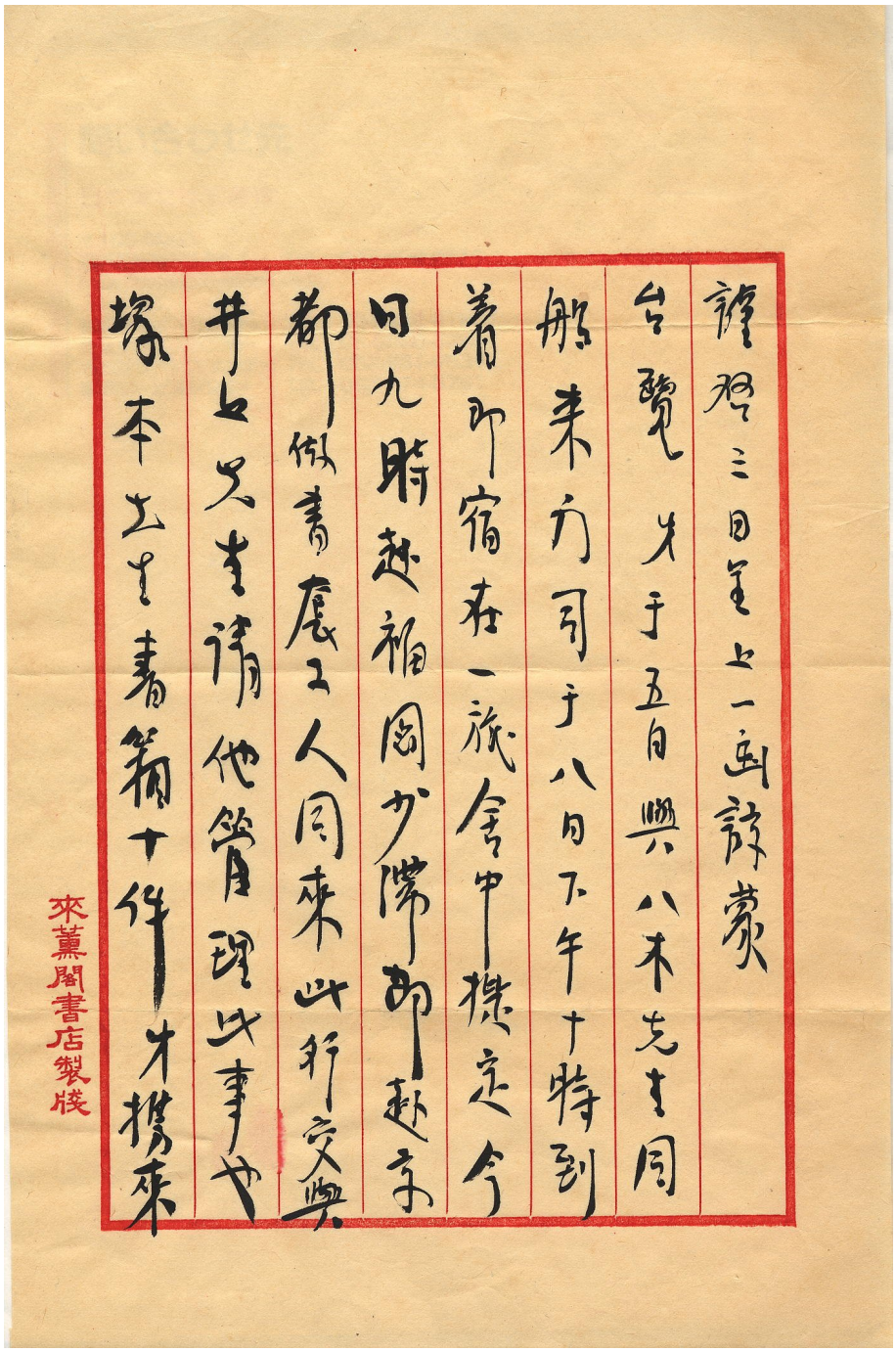
九、昭和四年十一月二十八日（2）



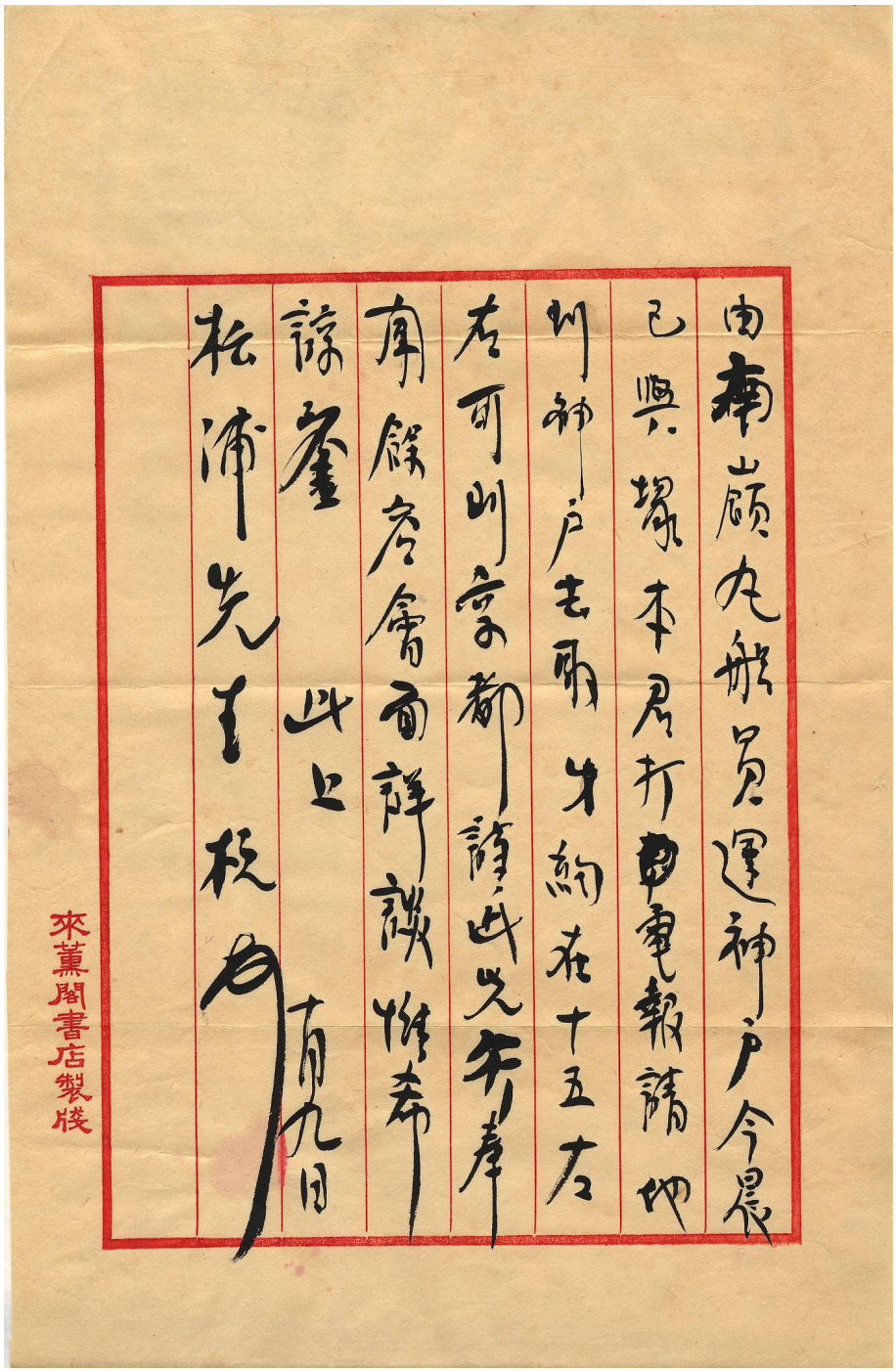
十、昭和五年一月二十四日（1）



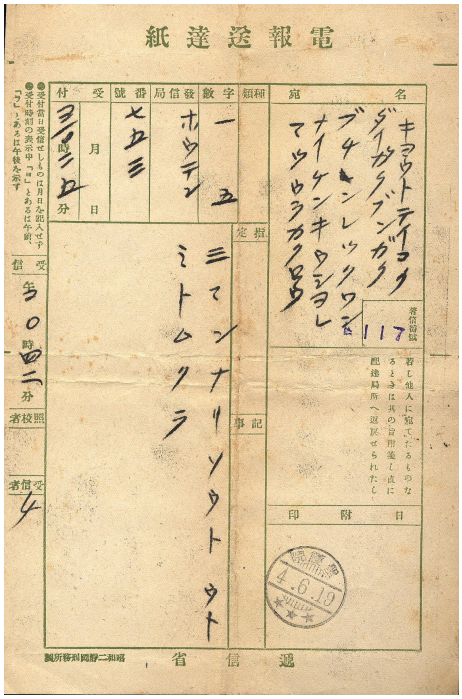
十、昭和五年一月二十四日（2）



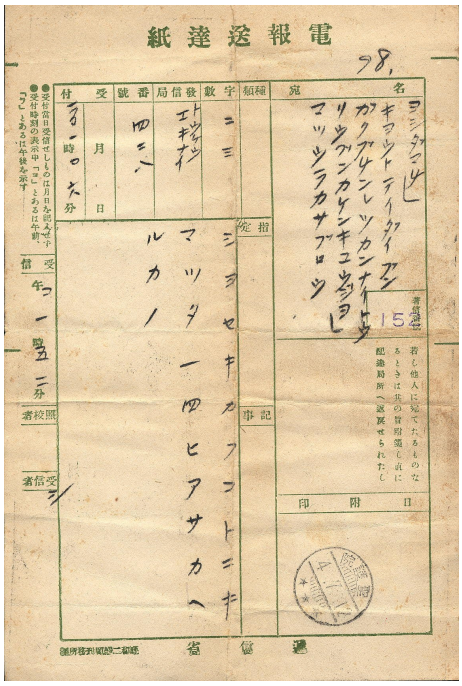
附一、昭和四年十月九日來熏閣陳氏致松浦嘉三郎信札（1）



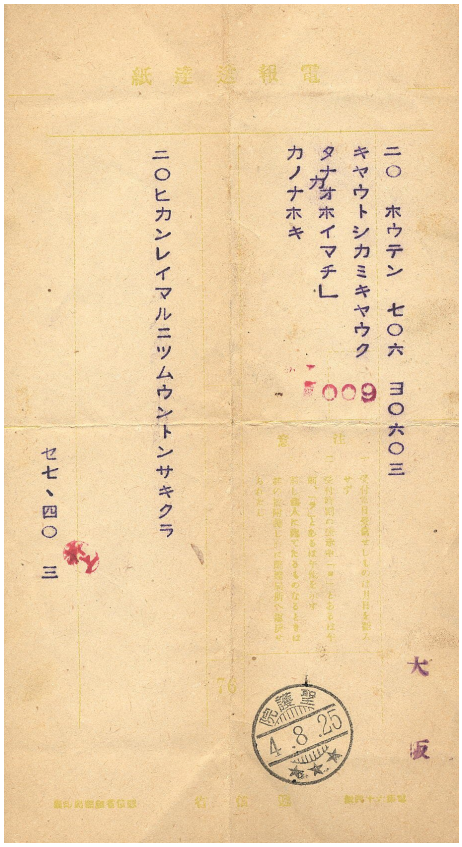
附一、昭和四年十月九日來熏閣陳氏致松浦嘉三郎信札（2）


電報送達紙

附二、倉石武四郎發往松浦嘉三郎電報


電報送達紙

附三、狩野直喜發往松浦嘉三郎電報


電報送達紙

二〇 ホウテン 七〇六 ヨ〇六〇三
キヤウトシカミキヤウク
タナカオホイマチ」
カノナホキ

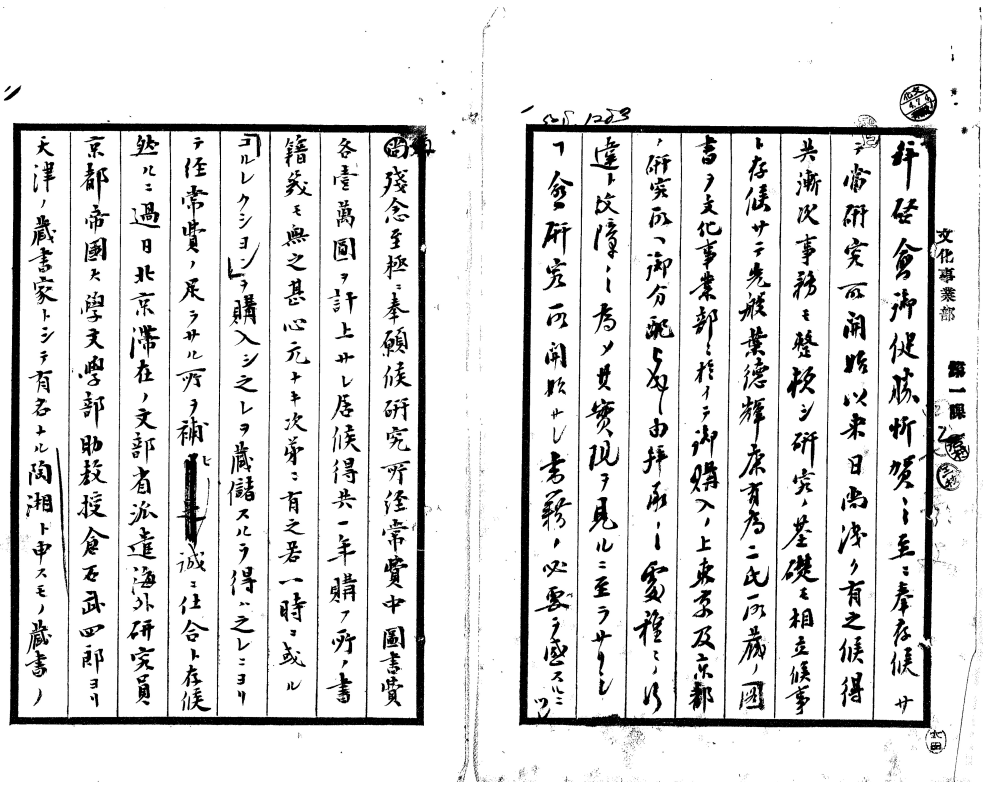
二〇ヒカンレイマルニツムウントンサキクラ

セ七ヽ四〇 三

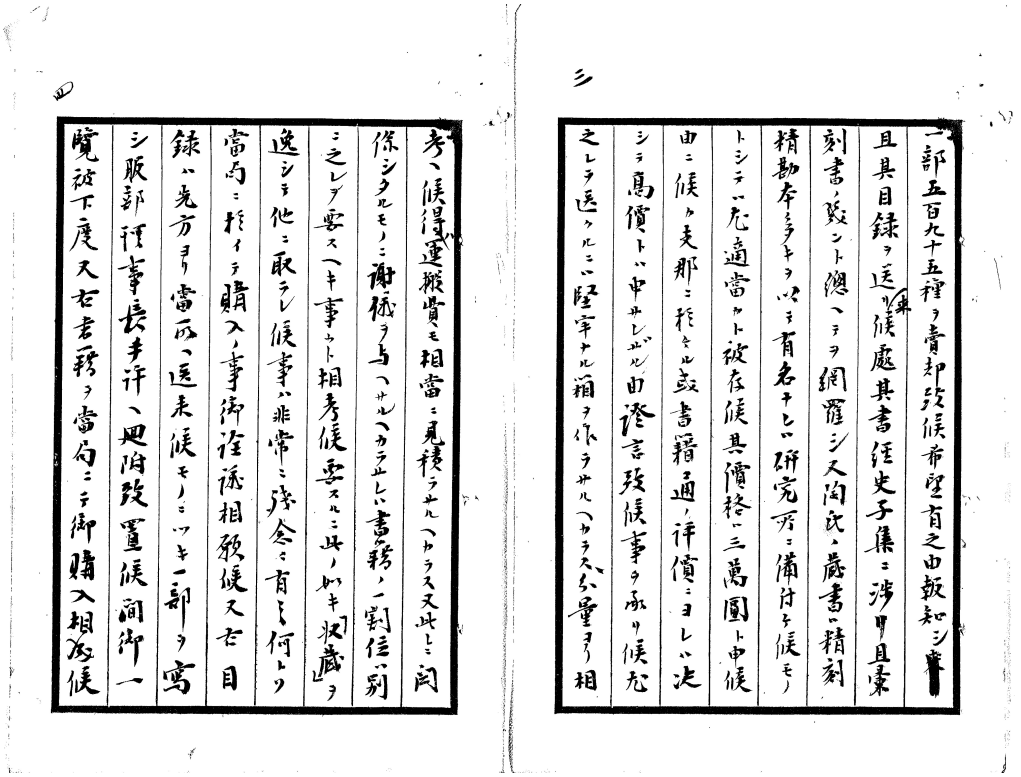
大阪

附四、倉石武四郎發往狩野直喜電報

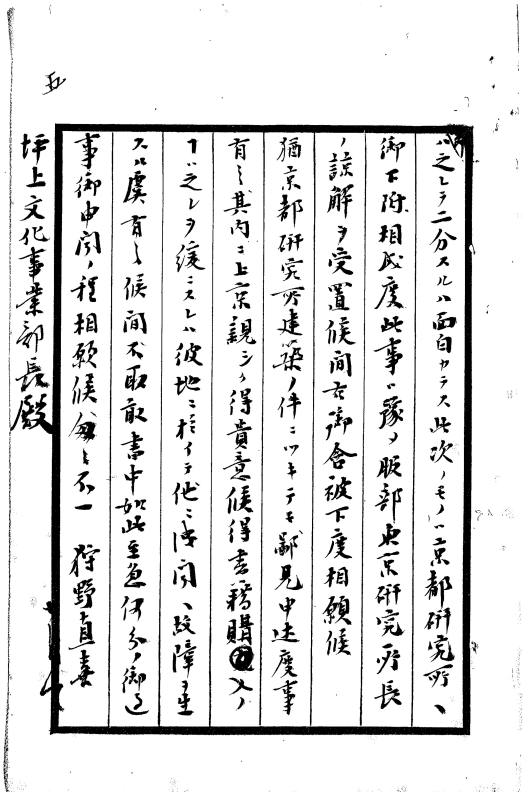
3-2　關係文書——「陶湘藏書購入に關する件」（圖版）



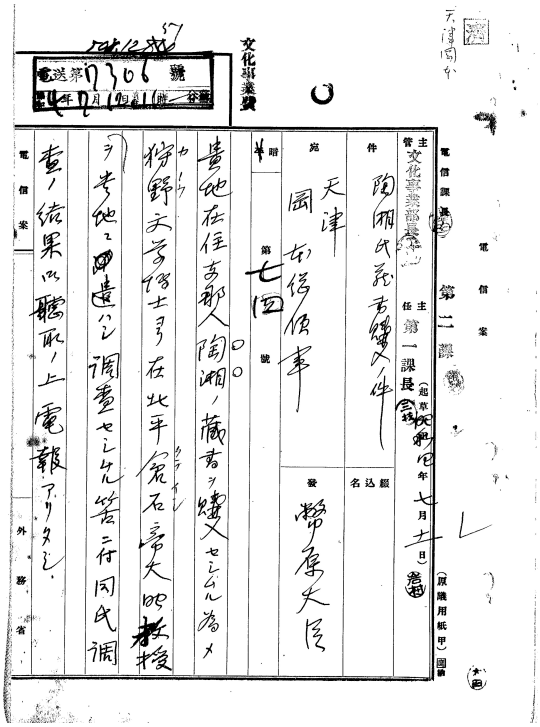
一、狩野直喜書信（1）



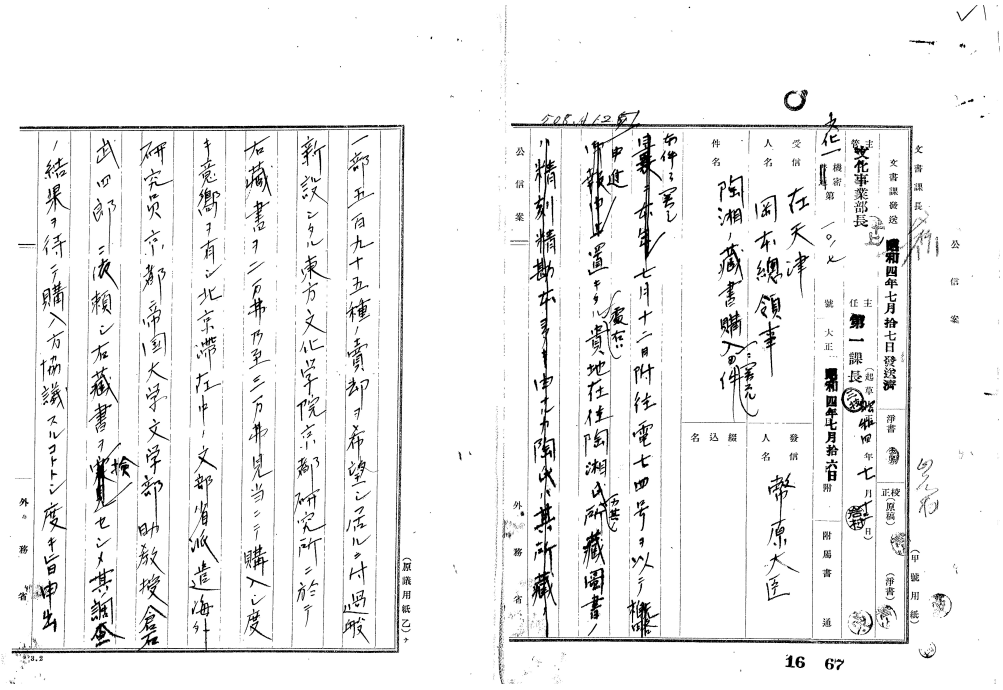
一、狩野直喜書信（2）



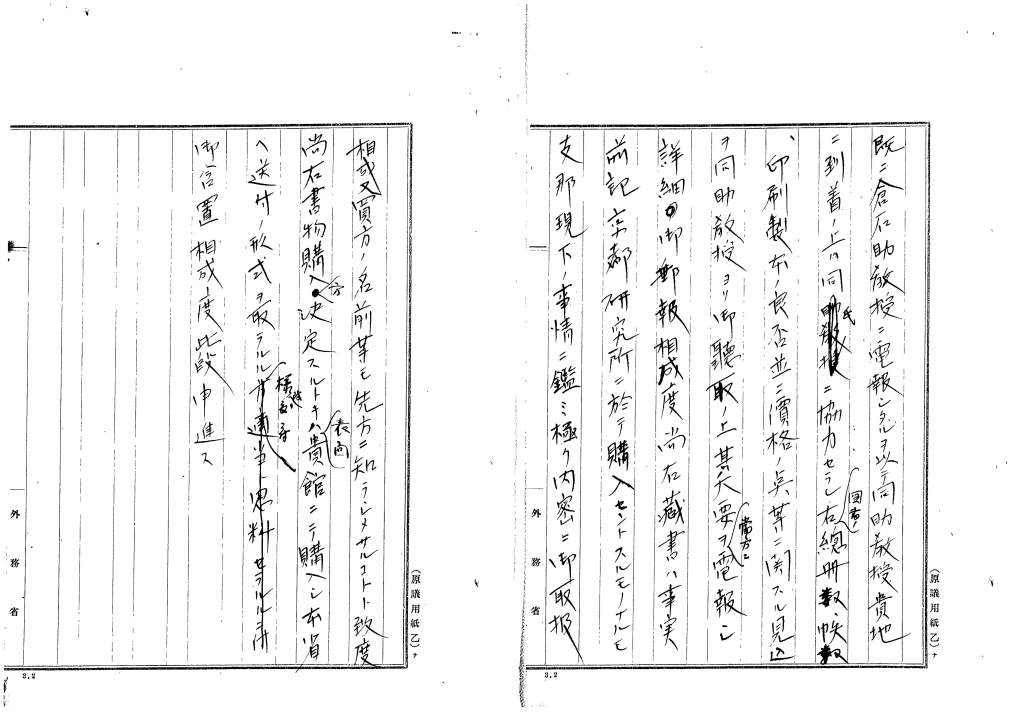
一、狩野直喜書信（3）



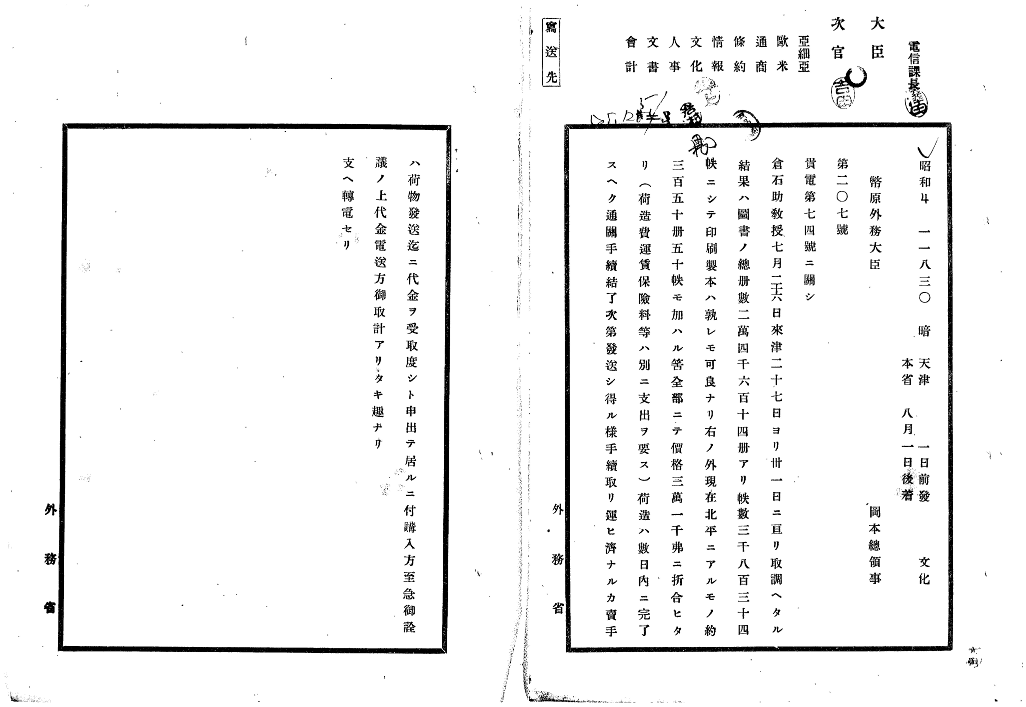
二、（電信案）昭和４年７月11日



三、（公信案）昭和 4 年 7 月 26 日（1）



三、（公信案）昭和 4 年 7 月 26 日（2）


電信課長
大臣
次官
亞細亞 歐米 通商 條約 情報 文化 人事 文書 會計
寫送先

昭和4　一一八三〇　暗　天津 本省　八月一日前發 八月一日後着　文化

岡本總領事

幣原外務大臣

第二〇七號

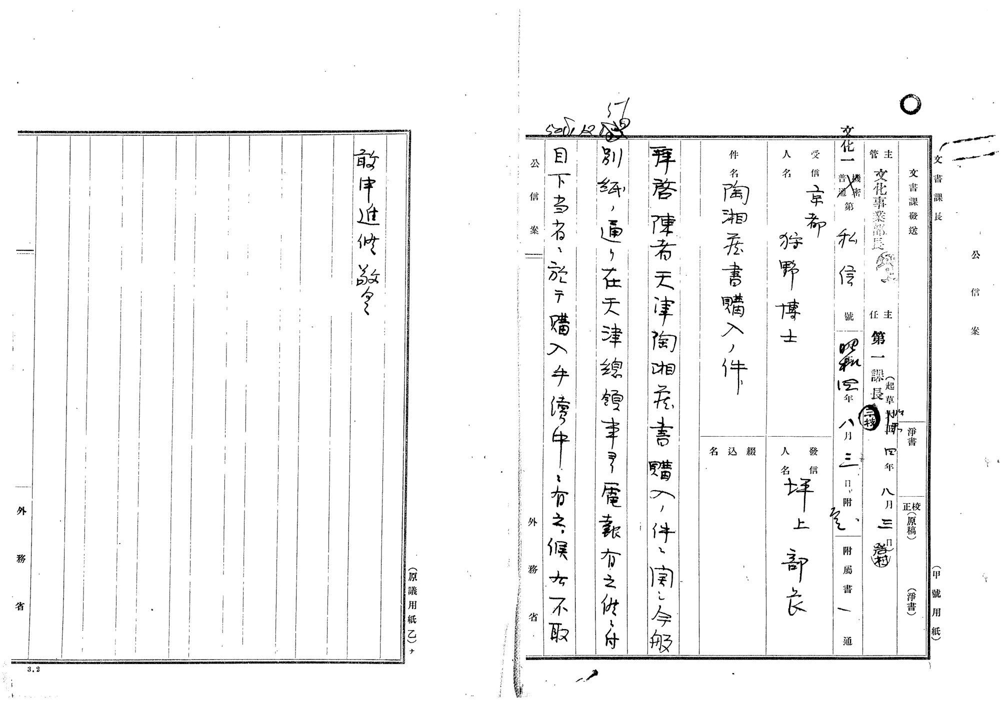
貴電第七四號ニ關シ

倉石助教授七月二十六日來津二十七日ヨリ卅一日ニ亘リ取調ヘタル結果ハ圖書ノ總册數二萬四千六百十四册アリ帙數三千八百三十四帙ニシテ印刷製本ハ孰レモ可良ナリ右ノ外現在北平ニアルモノ約三百五十册五十帙モ加ハル筈全部ニテ價格三萬一千弗ニ折合ヒタリ（荷造費運賃保險料等ハ別ニ支出ヲ要ス）荷造ハ數日內ニ完了スヘク通關手續結了次第發送シ得ル樣手續取リ運ヒ濟ナルカ賣手ハ荷物發送迄ニ代金ヲ受取度シト申出テ居ルニ付購入方至急御詮議ノ上代金電送方御取計アリタキ趣ナリ

支ヘ轉電セリ

外務省

四、岡本總領事電信　昭和４年８月１日着


公信案

文書課長　發送

主管　文化事業部長

主任　第一課長

起草　昭和四年八月三日

淨書

校正（原稿）

文化一　機密／普通　第　私信　號　昭和四年八月三日附

受信人名　京都　狩野博士

發信人名　坪上部長

件名　陶湘氏書購入ノ件

名込級

附屬書　一通

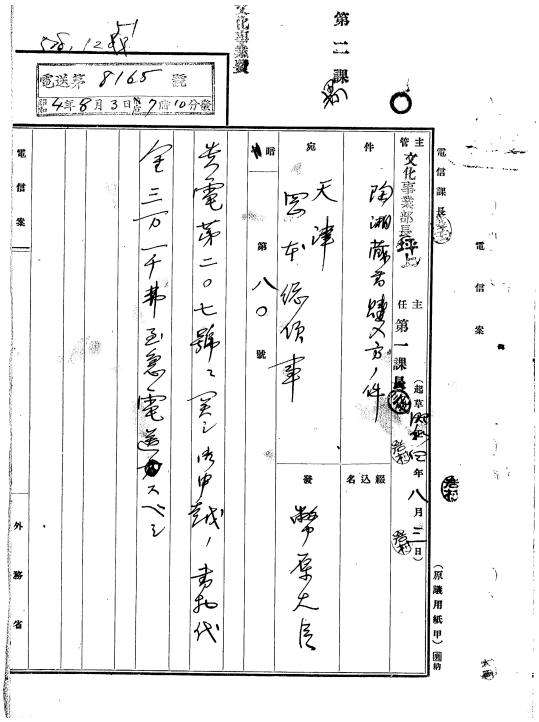
拜啓　陳者天津陶湘氏書購入ノ件ニ關シ今般別紙ノ通リ在天津總領事ヨリ電報有之候ニ付目下當省ニ於テ購入手續中ニ有之候右不取敢申進候　敬具

外務省

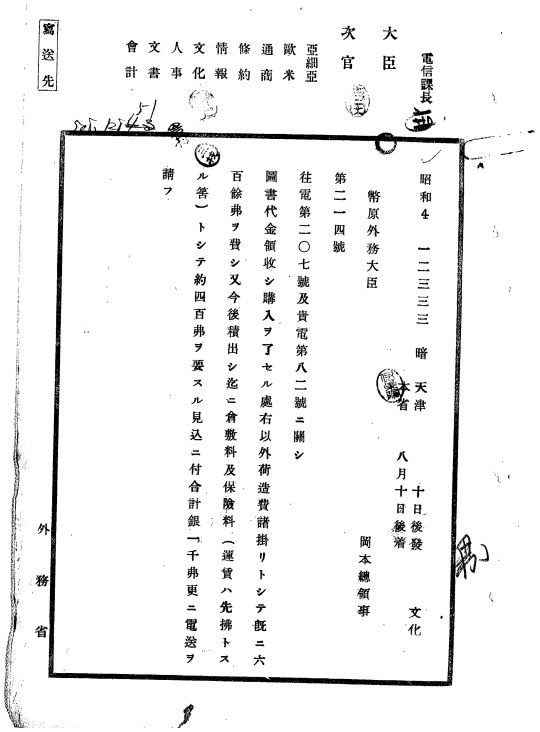
（甲號用紙）

（原議用紙乙）

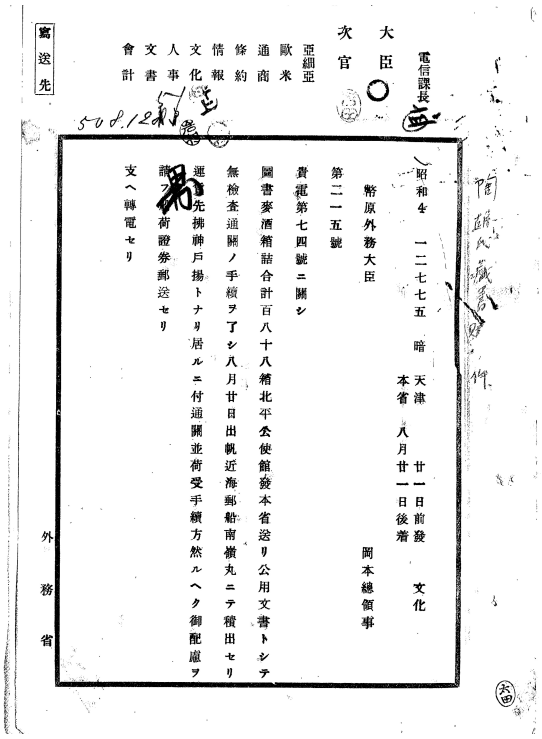
五、（公信案）昭和４年８月３日



六、（電信案）昭和４年８月３日

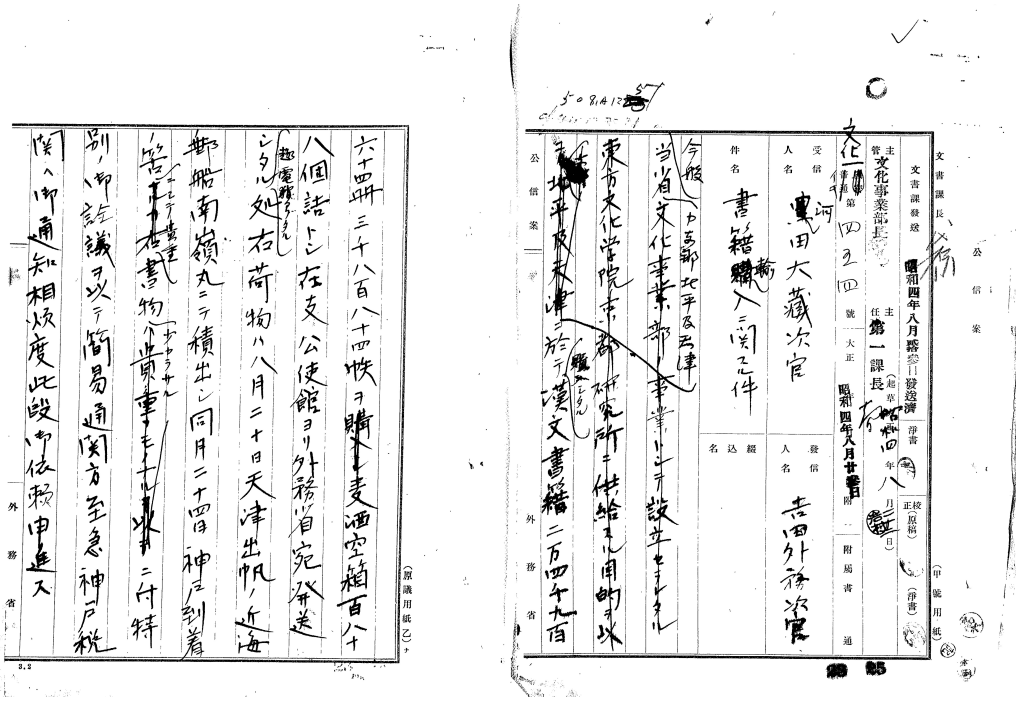


七、岡本總領事電信　昭和４年８月10日着



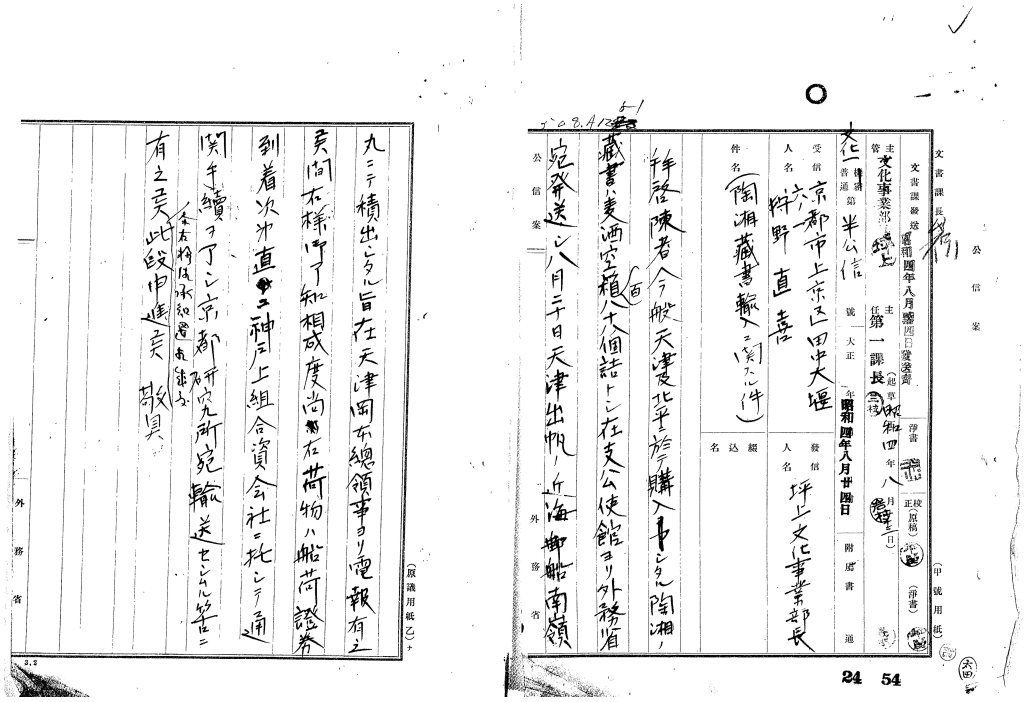
寫送先
亞細亞
歐米
通商
條約
情報
文化
人事
文書
會計
大臣
次官
電信課長
外務省
昭和4 一二七七五 暗 天津 廿一日前發 文化
本省 八月廿一日後着
幣原外務大臣
岡本總領事
第二一五號
貴電第七四號ニ關シ
圖書寮酒精詰合計百八十八箱北平公使館發本省送リ公用文書トシテ
無檢査通關ノ手續ヲ了シ八月廿日出帆近海郵船南嶺丸ニテ積出セリ
運送先拂神戸揚トナリ居ルニ付通關並荷受手續方然ルヘク御配慮ヲ
請荷證券郵送セリ
支へ轉電セリ

八、岡本總領事電信　昭和 4 年 8 月 21 日着



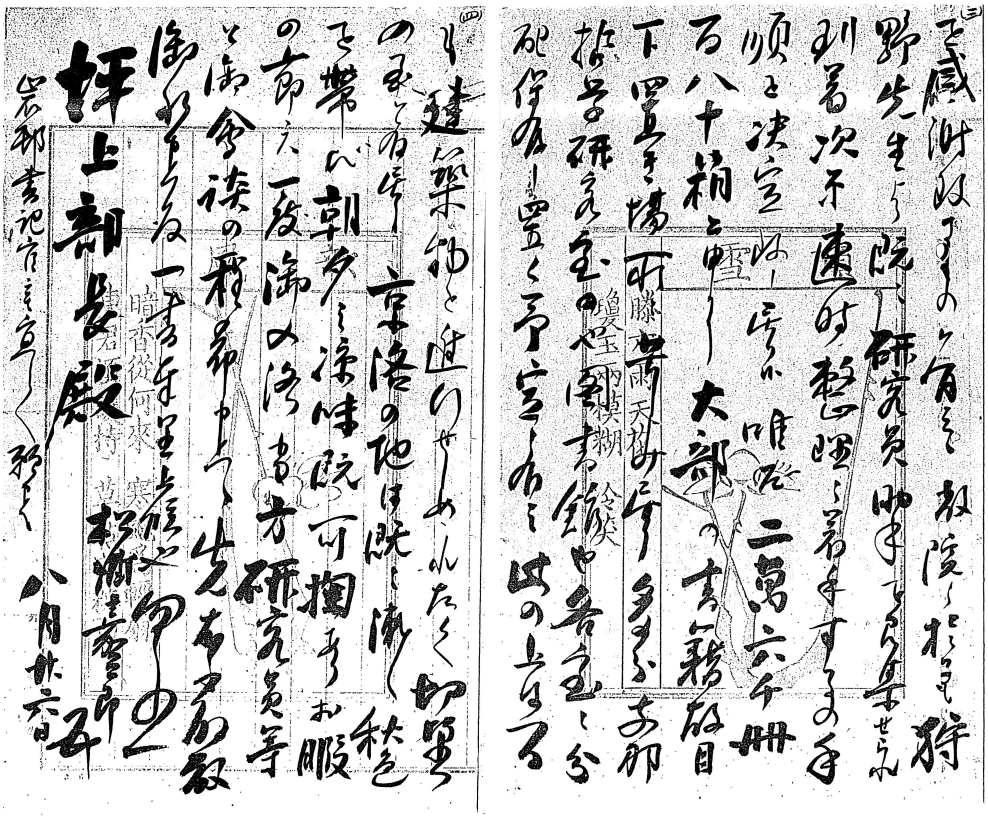
文書課長
公信案
文書課發送 昭和四年八月廿四日發送濟 淨書
主管 文化事業部長 任第一課長 昭和四年八月廿四日
受信 第四二四號 大正 昭和四年八月廿四日 附屬書 通
受信人名 臺田大藏次官
件名 書籍購入ニ關スル件
綴込名
今般 當省文化事業部事業ノ一ニテ設立セラルル 北平及天津ニ於ケル 東方文化學院京都研究所ニ供給セラルル 漢文書籍二万四千九百
六十四冊 三十八百八十四哦ヲ購入シ支那空箱百八十
八個詰トシテ在支公使館ヨリ外務省宛發送
セラルル趣處右荷物ハ八月二十日天津出帆ノ近海
郵船南嶺丸ニテ積出シ同月二十四日神戸到着
筈ニテ發送書物ノ内東書ニ付特
別ノ御詮議ヲ以テ簡易通關方至急御
關ヘ御通知相煩度此段御依頼申進ム
外務省
（原議用紙乙）ナ
（甲號用紙）
公信案
外務省

九、（公信案）昭和 4 年 8 月 23 日

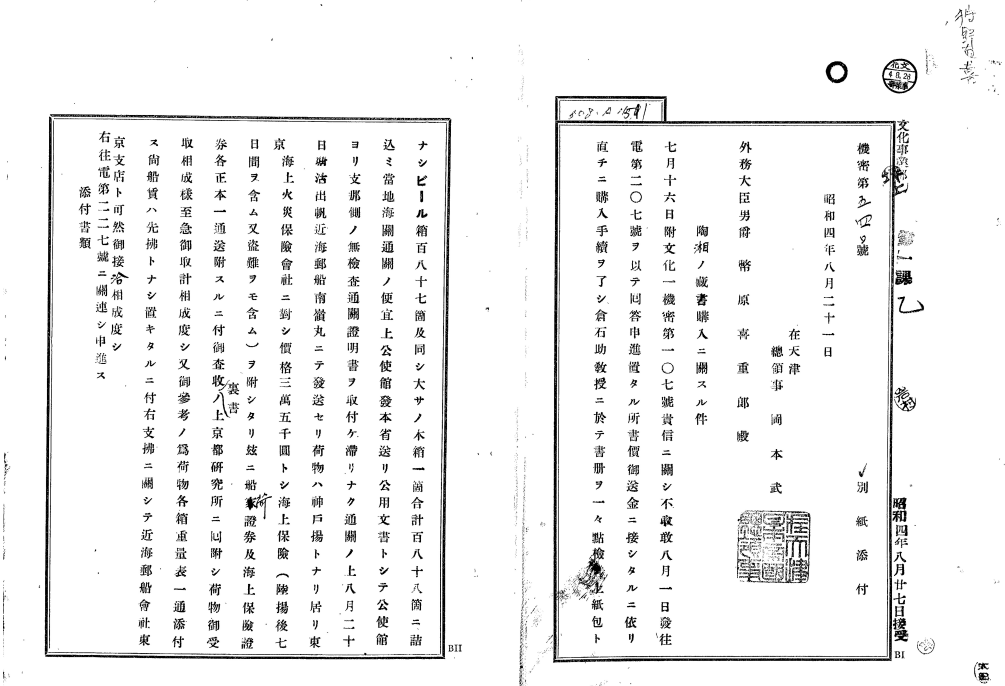


十、（公信案）昭和 4 年 8 月 24 日

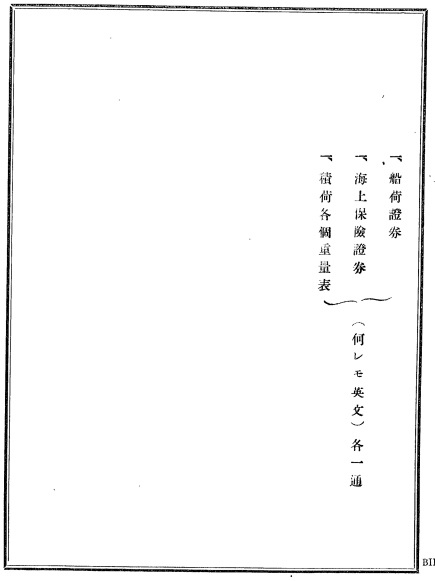
十一、松浦嘉三郎致坪上貞二書信　昭和 4 年 8 月 25 日（1）



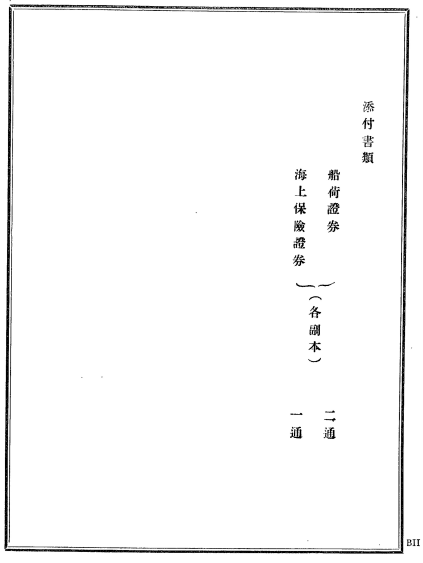
十一、松浦嘉三郎致坪上貞二書信　昭和 4 年 8 月 25 日（2）

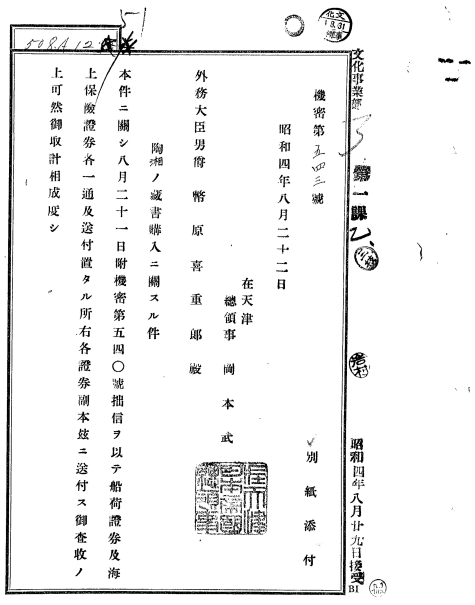


十二、岡本總領事電信　昭和 4 年 8 月 27 日着（1）

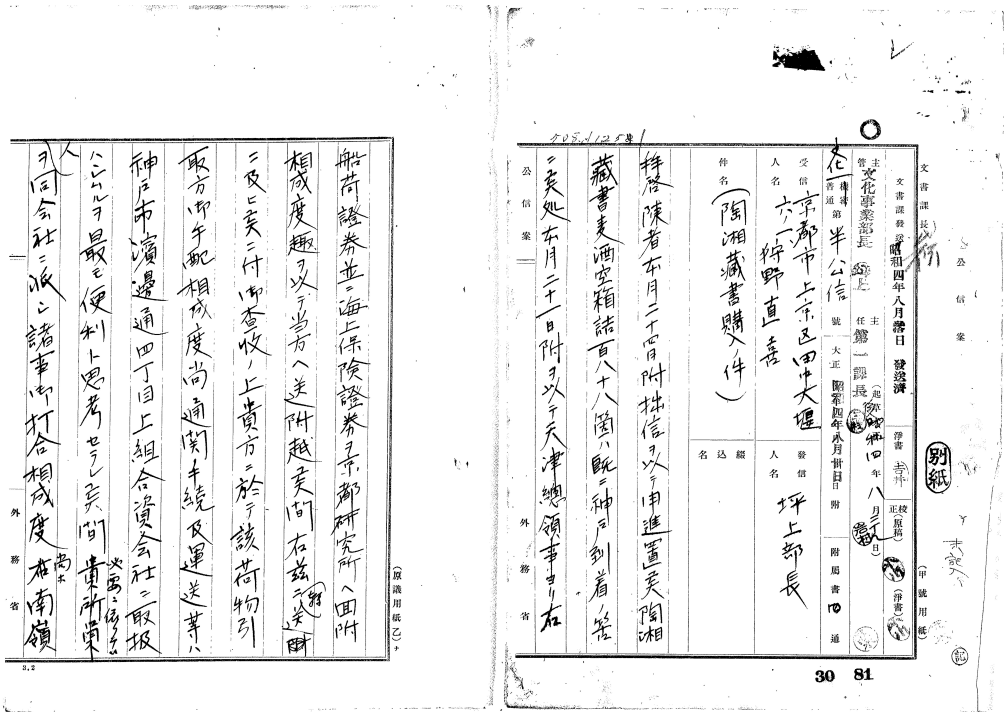

「、船荷證券
「、海上保險證券　（何レモ英文）各一通
「、積荷各個重量表

十二、岡本總領事電信　昭和 4 年 8 月 27 日着（2）

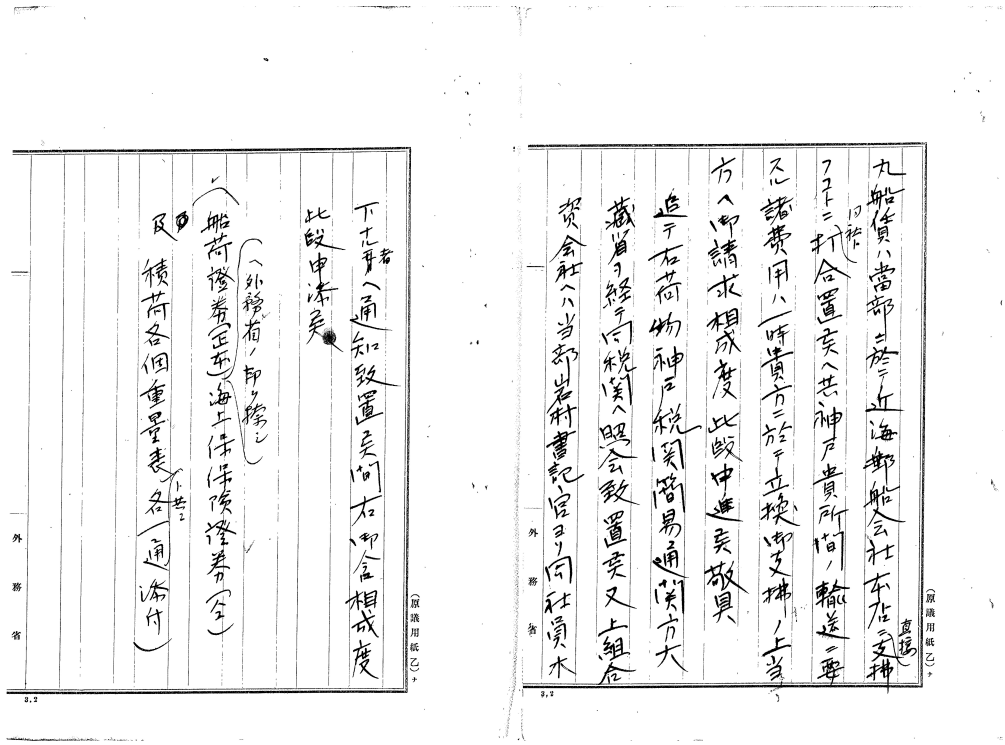

添付書類
船荷證券
海上保險證券　（各副本）
二通
一通


機密第五四三號
昭和四年八月二十二日
在天津
總領事　岡本武
外務大臣男爵　幣原喜重郎殿
別紙添付
陶湘ノ藏書購入ニ關スル件
本件ニ關シ八月二十一日附機密第五四〇號揭信ヲ以テ船荷證券及海上保險證券各一通及送付置タル所右各證券副本竝ニ送付ス御査收ノ上可然御取計相成度シ
昭和四年八月廿九日接受

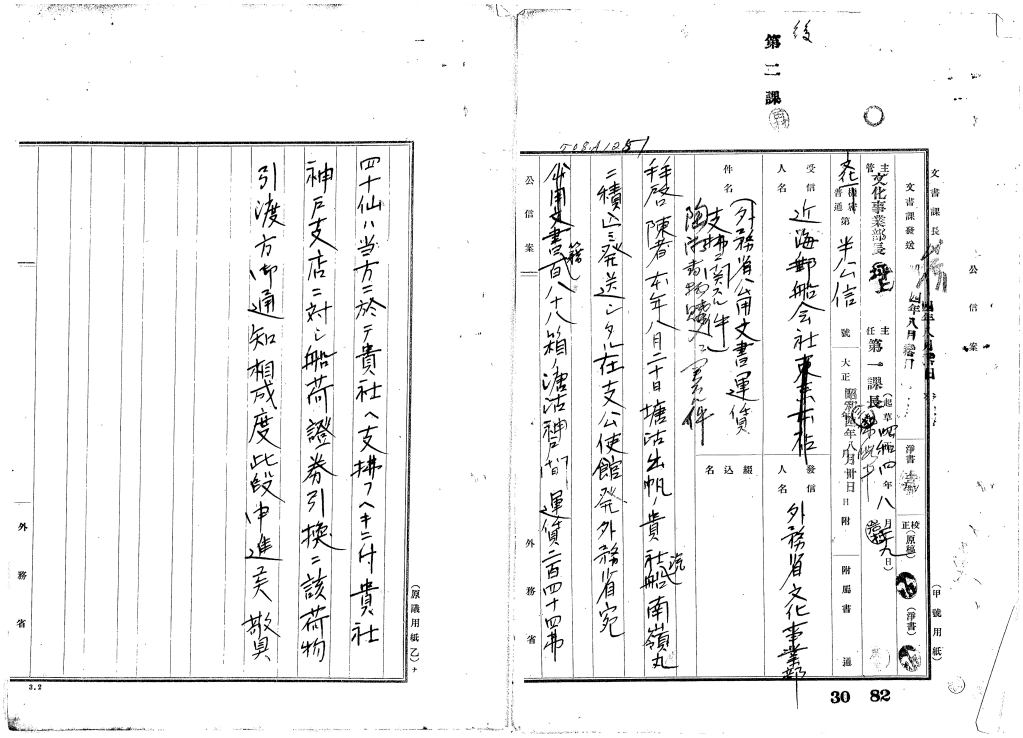
十三、岡本總領事電信　昭和 4 年 8 月 29 日着



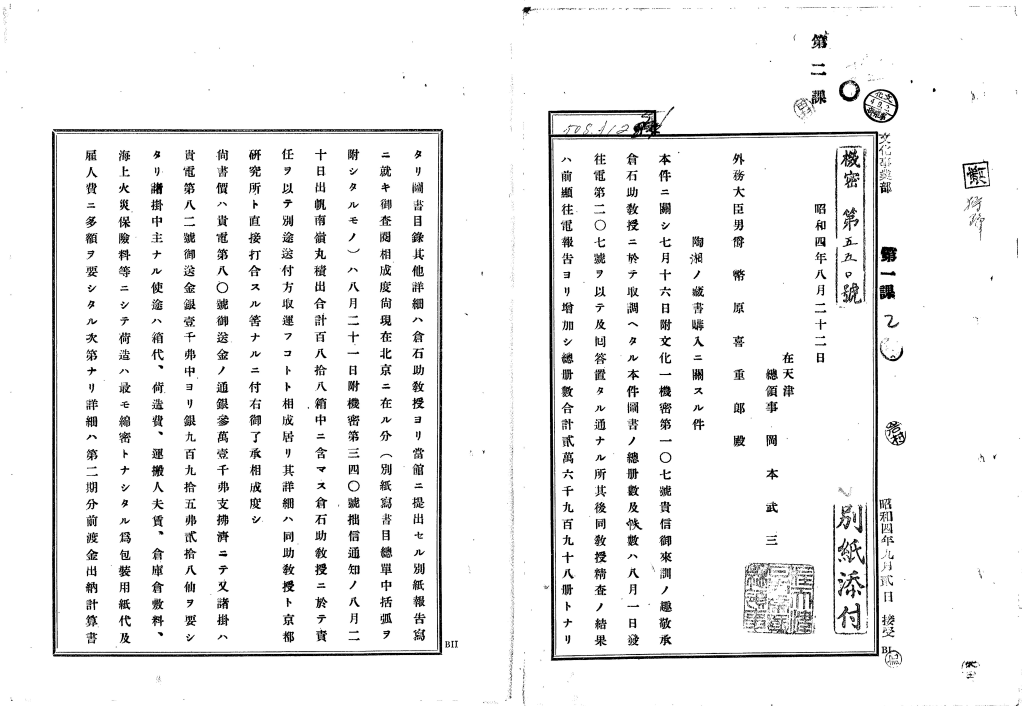
十四、（公信案）昭和 4 年 8 月 30 日（1）



十四、（公信案）昭和 4 年 8 月 30 日（2）



十五、（公信案）昭和４年８月30日



十六、岡本總領事電信　昭和４年９月２日着（1）

附屬證憑書類ニ就キ御了悉相成度

BII

十六、岡本總領事電信　昭和4年9月2日着（2）

寫

昭和四年七月廿六日東方文化学院京都研究所長狩野博士ノ依嘱
ヲ蒙リ天津特別一区十号路陶氏蘭泉所藏彙刻類書籍調査ノ
爲来津助手トシテ京都帝國大學院学生水野清一ヲ同伴セリ
コノ項ノ書籍ハ曩ニ陶氏ヨリ其ノ書目ヲ提出シタルニヨリ專ラ其ノ
書目ヲ基準トシテ調査ヲ開始シタルカ元来其ノ書目ナルモノハ極メテ
杜撰ニ係リ誤謬重出ノ條一ニシテ止マラズ且ツ藏書中ニナキモ
ノヲ載セタルアリ藏セルモノニシテ庋置紛乱シテ遂ニ所在ヲ弁
見シ難キモノアリ調査数日ニシテ遂ニ前目中ノ
粤刻廿四史　天都閣藏書　許学叢刻　十三經解詁
荒政叢書　葛氏金石叢書　四銅鼓齋論画叢刻
纂喜廬叢書　賀氏叢書　胡氏葉樸齋　何夢華叢書
倭文端公遺書　鄭小谷全書　儆居遺書

在天津日本總領事館

蔣侑石遺書　廿補齋医書　徐靈胎医書　沈氏尊生書
甘肅通志
ヲ削除シ之ヲ替フルニ
校礼堂全集　西莊始存稿西沚詩文集周礼軍賦説
十笏齋文集柴辟亭詩集　夢陔堂詩文集文説義府字詁合按
詩観三集　潘氏家集叢刻　洞簫樓詩紀碧金詞樂府餘論
塩邑志林
ヲ以テスルコト、シタリ抑々コノ彙刻書タルヤ陶氏四十年ノ苦心ヲ以テ聚
集シタルモノニシテ就中指海二十集、式訓堂二集、三影閣叢書、柚
堂全集、洪氏傳經堂叢書、宋氏叢書十三種ノ如キ外間殆ンド傳
本ヲ見サルモノアリ殊ニ乾嘉諸儒ノ述作ハ髪賊ノ乱ヲ経テ燒毀殆
ント盡キ其ノ少見ナルト學術上ノ價値ニ富メルトニ於テ昂價ナルコト
宋元板ニ亜カントスルモノアルニ當リコレラノ稀覯書ヲ具スルハ本叢刻

在天津日本總領事館

十七、〔倉石武四郎報告〕（1）

ノ誇トスルニ足ル所ナリ而カモ前揭粤刻廿四史以下ノ書ハ概ネ新刻ニシテ
容易ニ購補ス可キノミナラズ其ノ多數ハ學術上ノ價値極メテ乏シキモノ
アリ之ニ反シ校礼堂全集等ハコレモ其ノ稀覯ナルト價値ニ富メルニ於テ
指海等ニ比肩ス可キモノアリ彼ヲ以テ此ニ易フルノ得失自ラ知ル可キノミ
ナホ
粤刻通志堂經解　珠叢秘錄　秘冊彙函　蘇齋叢書
續古逸叢書　潘刻五種　十六家墨說　積學齋　郘齋
懷幽雜箸　誦芬寶初二集　宸翰廬　玉簡齋　雲窗
雪堂　吉石盦　隨菴叢書　又續　鳴沙石室佚書
ハ現ニ北京ニ在リテ一時調査ヲ加ヘ難キモ原來コレラノ書ハミナ一定ノ性質
ヲ具ヘシ深ク研究ヲ要セザル種類ノモノナレバ今此ヲ以テ第二次ニ北京
ヨリ發送スベキモノトシテ冊數ヲ暫ク加算セズ專ラ天津ニ現存セルモ
ノヲ詳校スルニ凡ソ

在天津日本總領事館

經部　十三經注疏以下三十八種　二千一百七十六本
史部　二十四史以下二十八種　三千二百四十九本
子部　十子全書以下三十七種　一千七百四十二本
集部　漢魏六朝百三名家集以下三十一種　一千四百八十六本
叢刊　儒學警悟以下一百七十種　八千八百八十九本
影仿　澤存堂五種以下十一種　三百十二本
輯佚　玉函山房叢書以下十種　二百九十六本
郡邑　涇川叢書以下卅五種　二千二十一本
一姓　二程遺書以下卅八種　七百二十七本
一人　黃石齋經學九種以下一百五十六種　三千七百三十九本
地志　大清中外一統輿圖以下三十種　二千三百六十一本
共　五百七十四種　二万六千九百九十八本
ヲ得タリ裝訂ハ極メテ佳良ニシテ殆ンド書價ニ過グルモノスラアリ但シ時

在天津日本總領事館

十七、〔倉石武四郎報告〕（2）

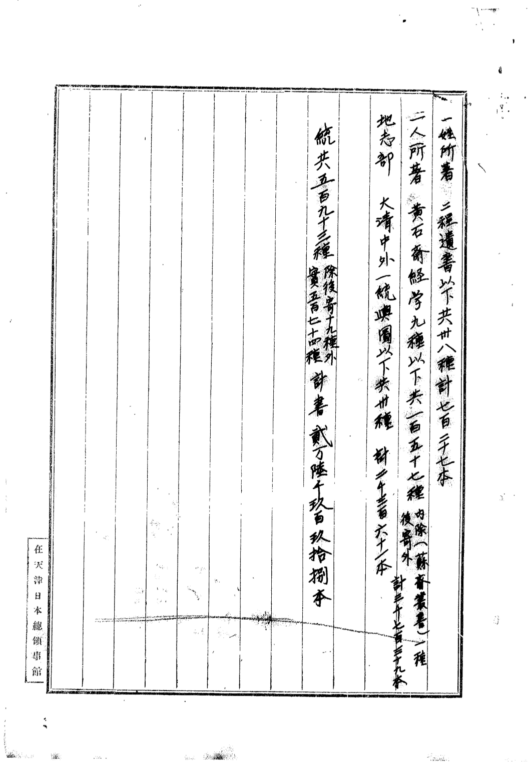
ニ應ジテ帙ヲ用フルモノアリ夾板ニヨルモノアリ又全クコレラヲ具ヘザルモノアリ
コレヲ套數トシテ算出スルコトハ不可能ナルモ包裹ノ數ヨリシテ辛ジテ得
ルモノトセバ實ニ三千六百〇七箇ノ多數ニ上レリ書價ハ當初狩野所
長ヨリ申請サレタルママニシテ異同ナキモ書目ヲ更定セル結果ト
シテハ幾分安價トナレリト云フモ可ナリ點書ノ終ルヲマチテ直ニ裝書
ニ着手シコレ亦前後五日間ヲ費シテ麥酒箱一百八十七箇麥酒箱ニ
略々等シキ書箱一箇合セテ一百八十八箇ニ分裝ヲ了セリ コレガ搬出ニ
ツイテモ細心ノ注意ヲ拂ヒ表面上ハ英租界ノ金城銀行ニ抵當ノ形式ヲ
トリテ同銀行ニ連接セル通成貨棧ニ運搬シ改メテ同處ヨリ三井洋行
ノ手ニヨリテ積出ス可キ準備ヲ具ヘタリ北京ニ在ル十九種ハ北京ニ歸
レル後再ビ之ヲ調査シ更ニ便宜ノ方法ヲ講ジテ逐次發送セントスナホ
詳細ナル書目並ニ箱數、包裹數ノ對照表ハ直ニ京都研究所ニ宛テ
發送、開箱並ニ整理ノ基準タラシメムトス

在天津日本總領事館

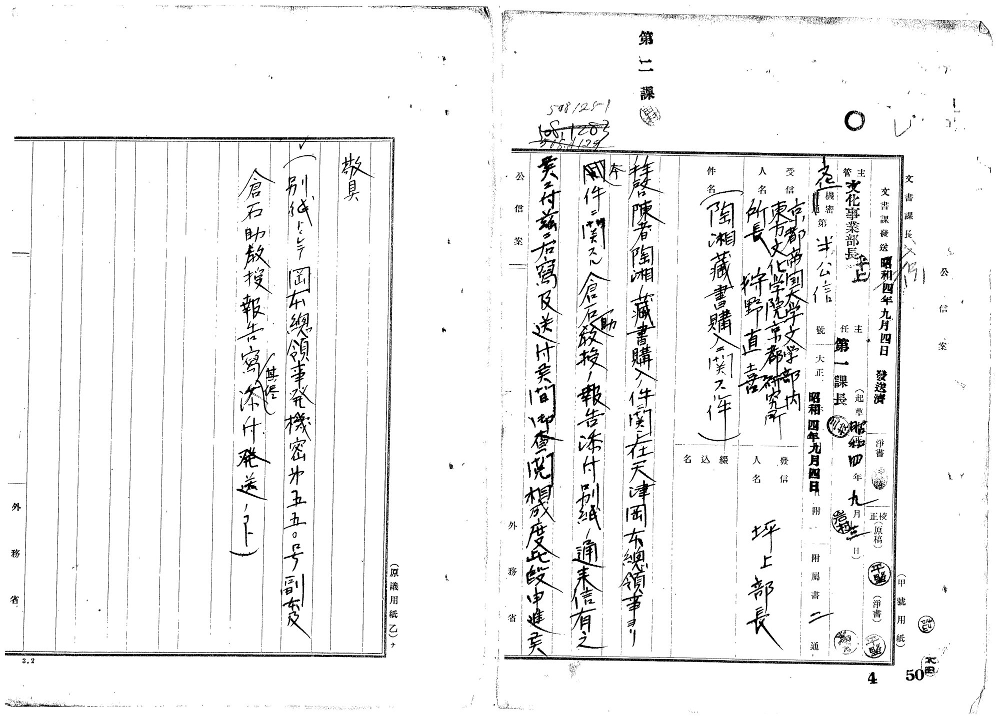
書目總單　詳目另冊
經部　十三經註疏以下共卅九種（内除（通志堂）一種後寄外）　計二千一百七十六本
史部　二十四史以下共廿八種　計三千二百四十九本
子部　十子全書以下共廿八種（内除（十六家墨說）一種後寄外）　計一千七百四十二本
集部　漢魏百三家集以下卅一種　計一千四百八十六本
叢刻部　儒學警悟以下共一百八十二種（内除（秘冊彙函）（珠叢別錄）（潘刻五種）（積學齋叢書）（郘齋叢書）（懷幽雜箸）（誦芬室初二集）（宸翰樓叢書）（玉簡齋）（雲窗叢刻）（吉石盦）（雪堂叢書）共十二種後寄外）　計八千八百八十九本
影仿部　澤存堂五種以下共十五種（内除（隨菴叢書）（隨菴續編）（續古逸叢書）（鳴沙石室佚書）四種後寄外）　計三百十二本
輯佚部　玉函山房輯佚書以下共十種　計二百九十六本
郡邑部　涇川叢書以下共三十五種　計二千〇二十一本

在天津日本總領事館

十七、〔倉石武四郎報告〕（3）


一性所著　二程遺書以下共卅八種計七百二十七本
二人所著　黄石齋経学九種以下共一百五十七種内除（蘇斎叢書）一種後寄外　計二千七百三十九本
地志部　大清中外一統輿図以下共卅種　計二千二百六十一本
統共五百九十三種　除後寄十九種外實五百七十四種　計書貳万陸千玖百玖拾捌本
在天津日本總領事館

十七、〔倉石武四郎報告〕（4）


敬具
（別紙トシテ岡本総領事発機密第五五〇号副本
倉石助教授報告写（其他）添付発送ノコト）

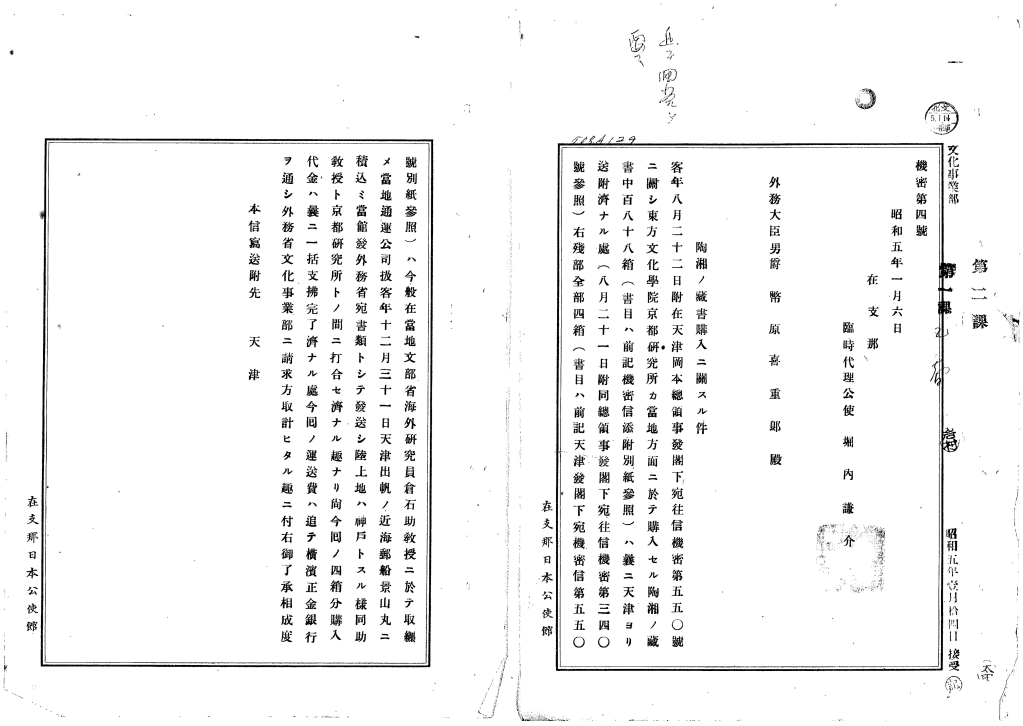
第二課

文書課長
文書課發送　昭和四年九月四日　發送済
主管　文化事業部長
主任　第一課長
機密第　号　公信
大正／昭和四年九月四日
受信人名　京都帝国大学文学部内東方文化学院京都研究所所長　狩野直喜
発信人名　坪上部長
件名　陶湘蔵書購入ニ関スル件
附属書　二通

拝啓陳者陶湘蔵書購入ノ件ニ関シ在天津岡本総領事ヨリ本件ニ関スル倉石助教授ノ報告添付別紙ノ通来信有之候ニ付茲ニ右写及送付候間御査閲相成度此段申進候

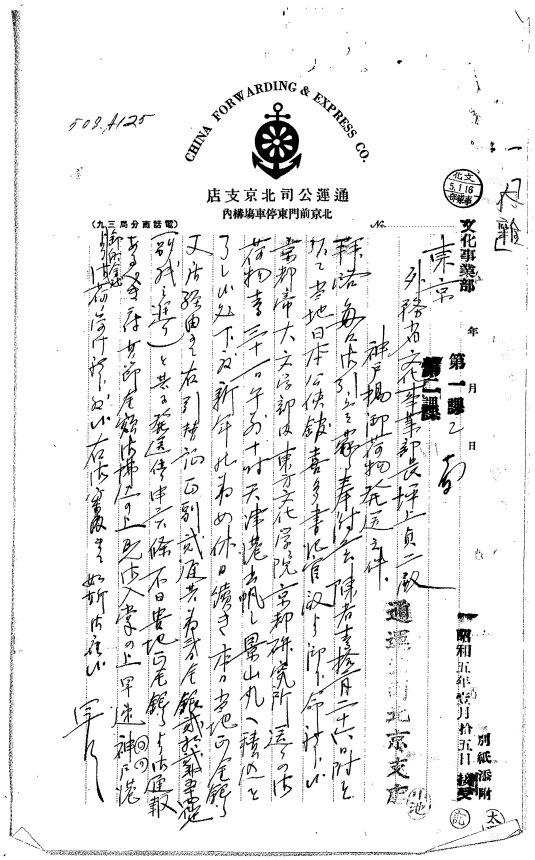
公信案
外務省

十八、（公信案）昭和４年９月４日



機密第四號
昭和五年一月六日
在支部
臨時代理公使　堀内謙介
外務大臣男爵　幣原喜重郎殿
陶湘ノ藏書購入ニ關スル件
客年八月二十二日附在天津岡本總領事發閣下宛往信機密第五五〇號ニ關シ東方文化學院京都研究所カ當地方面ニ於テ購入セル陶湘ノ藏書中百八十八箱（書目ハ前記機密信添附別紙參照）ハ曩ニ天津ヨリ送附濟ナル處（八月二十一日附同總領事發閣下宛往信機密第三四〇號參照）右殘部全部四箱（書目ハ前記天津發閣下宛機密信第五五〇號別紙參照）ハ今般在當地文部省海外研究員倉石助教授ニ於テ取纏メ當地通運公司扱客年十二月三十一日天津出帆ノ近海郵船景山丸ニ積込ミ當館發外務省宛書類トシテ發送シ陸上地ハ神戸トスル樣同助教授ト京都研究所トノ間ニ打合セ濟ナル趣ナリ尚今回ノ四箱分購入代金ハ曩ニ一括支拂完了濟ナル處今回ノ運送費ハ追テ橫濱正金銀行ヲ通シ外務省文化事業部ニ請求方取計ヒタル趣ニ付右御了承相成度
本信寫送附先　天津
在支那日本公使館

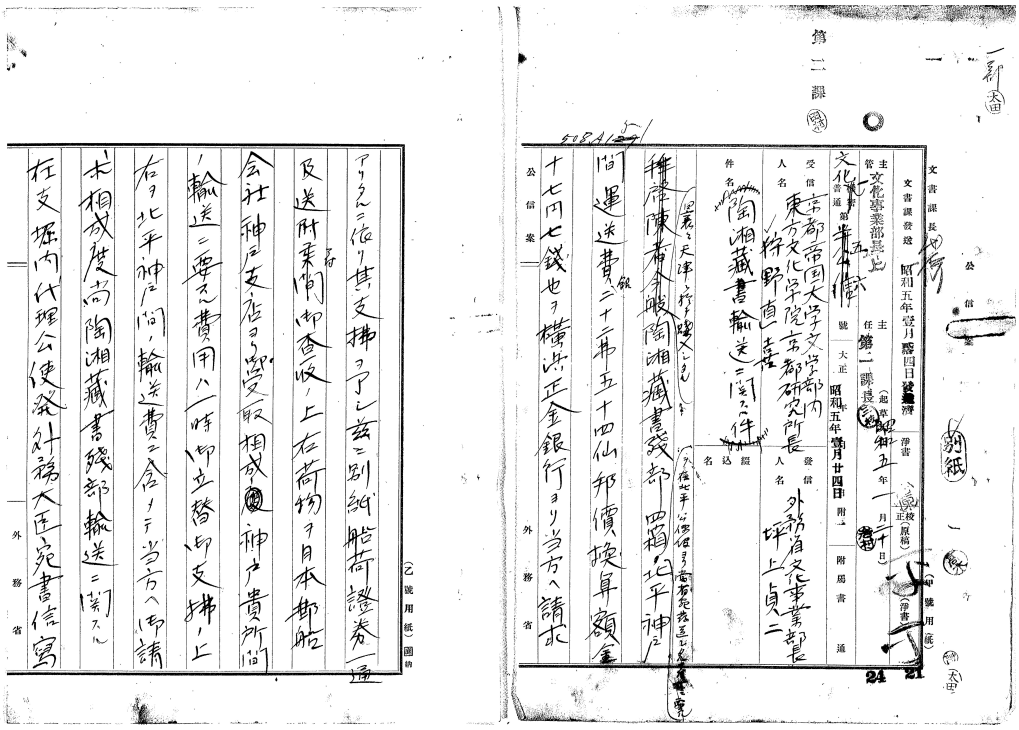
十九、堀内謙介臨時代理公使書信　昭和 5 年 1 月 24 日着



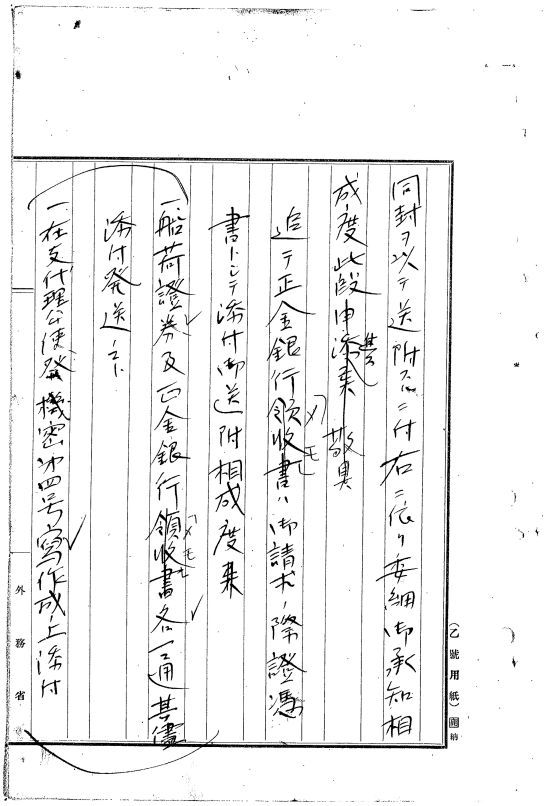
CHINA FORWARDING & EXPRESS CO.
通運公司北京支店
北京前門東車停場内
（九三局分電話）

文化事業部
第一課
昭和五年一月廿五日接受
別紙添附

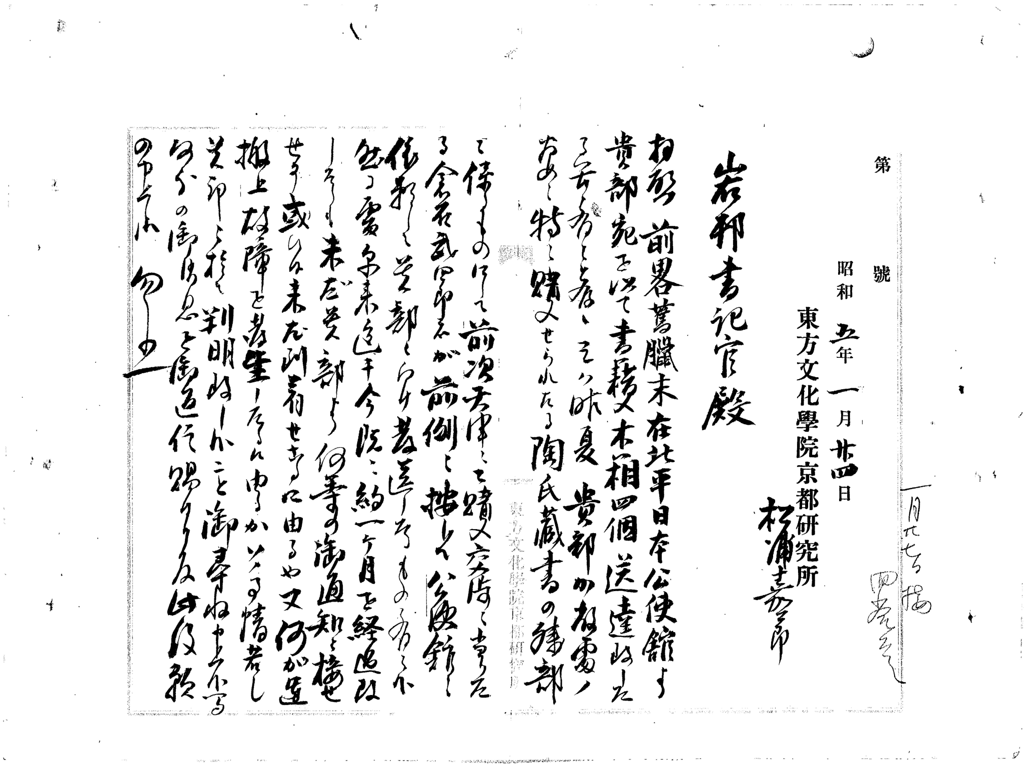
二十、通運公司書信　昭和 5 年 1 月 25 日接受



二十一、（公信案）昭和 5 年 1 月 24 日（1）



二十一、（公信案）昭和 5 年 1 月 24 日（2）



第　號

昭和五年一月廿四日

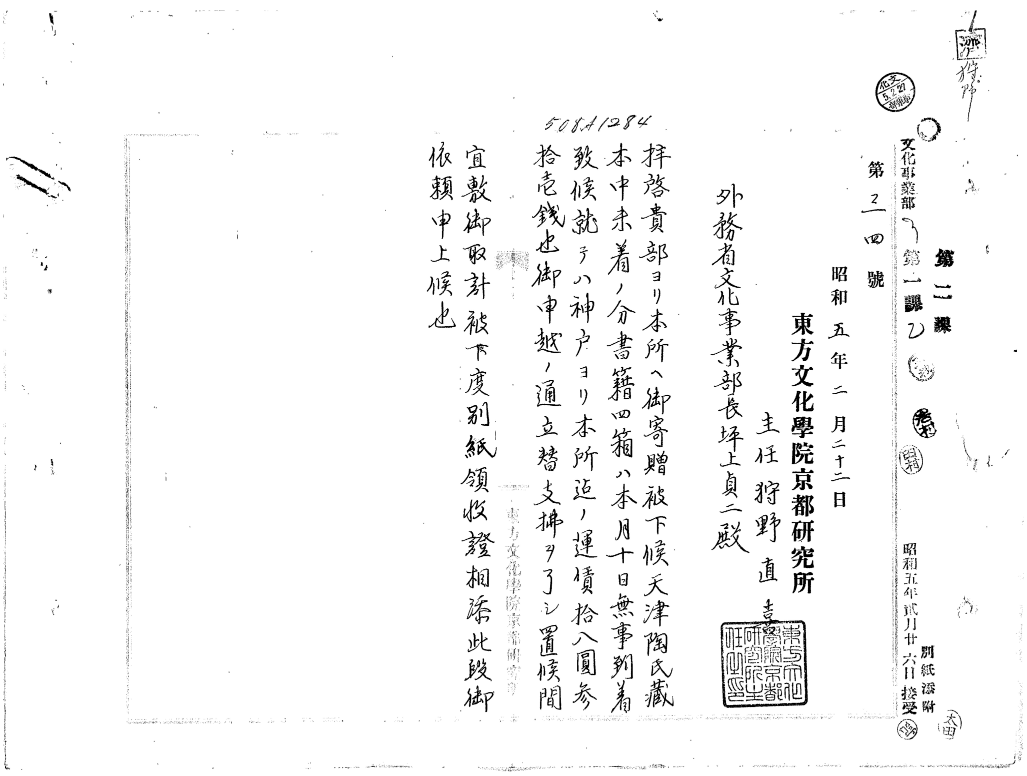
東方文化學院京都研究所

松浦嘉三郎

岩部書記官殿

拝啓 前略 舊臘末在北平日本公使館より
貴部宛を以て書籍入木箱四個送達致した
る旨有之候、之ハ昨夏 貴部が當處ノ
為に特に購入せられたる陶氏藏書の残部
にて候ものにて前次天津にて購入之際[illegible]
る分を武田が前例に據りて公使館に
依頼して貴部に向け發送したるものなるに
既に貴部未達すと今既に約一ヶ月を經過致
し候も未だ貴部より何等の御通知も接せ
ず、或は未だ到着せざるに由るや又何か運
搬上故障を發生したるに由るか、其の情況若し
貴部にて御判明致し候はゞ御尋ね申上げ候
[illegible]の御返事[illegible]
[illegible]　匆々

二十二、松浦嘉三郎致岩部書記官書信　昭和５年１月24日



第二課

文化事業部 第一課

昭和五年貳月廿六日接受 別紙添附

第2一四號

昭和五年二月二十二日

東方文化學院京都研究所

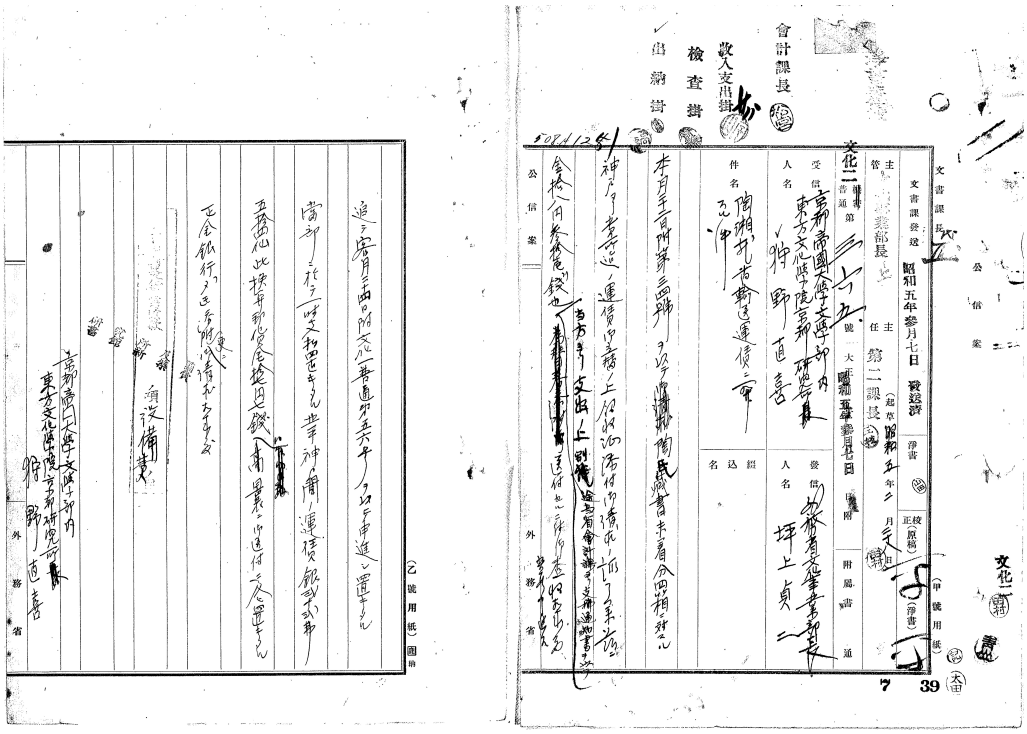
主任 狩野直喜

外務省文化事業部長坪上貞二殿

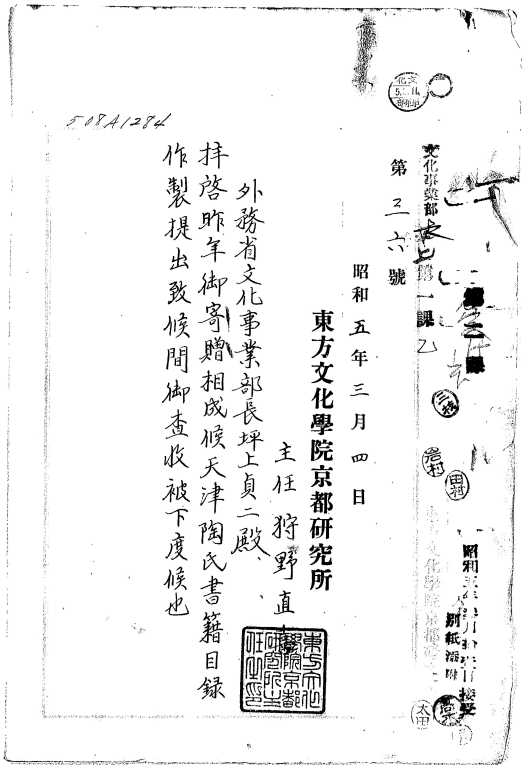
508A1284

拝啓 貴部ヨリ本所ヘ御寄贈被下候天津陶氏藏
本中未着ノ分書籍四箱ハ本月十日無事到着
致候就テハ神戸ヨリ本所迄ノ運賃拾八圓参
拾壱錢也御申越ノ通立替支拂ヲ了シ置候間
宜敷御取計被下度別紙領收證相添此段御
依頼申上候也

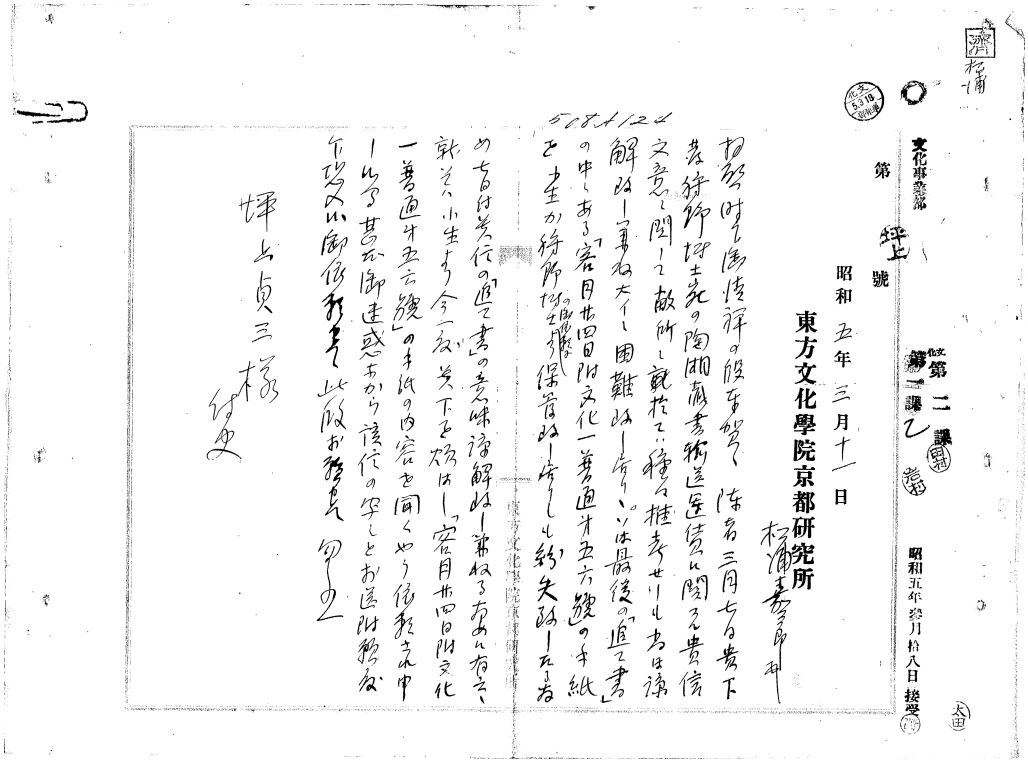
二十三、狩野直喜致外務省文化事業部長坪上貞二書信　昭和５年２月22日



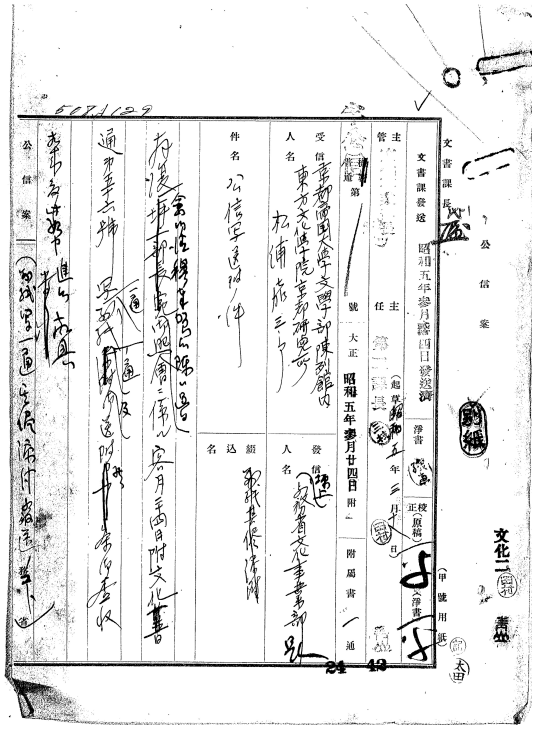
二十四、（公信案）昭和５年３月７日



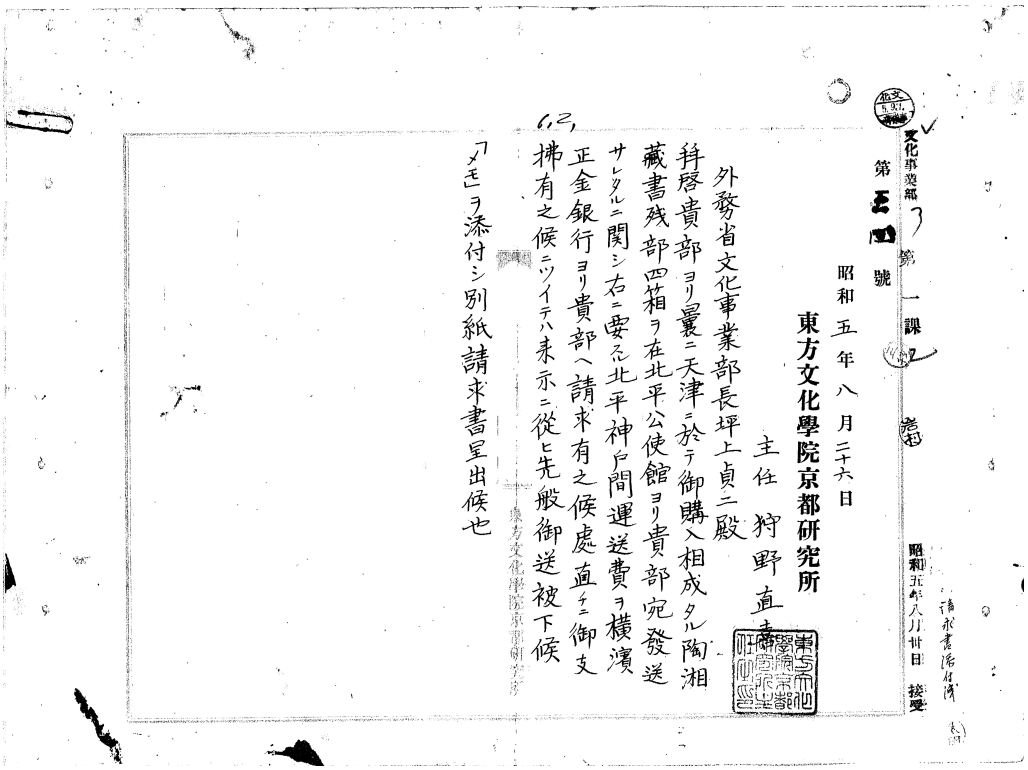
二十五、狩野直喜致外務省文化事業部長坪上貞二書信　昭和５年３月４日



二十六、松浦嘉三郎致外務省文化事業部長坪上貞二書信　昭和 5 年 3 月 11 日



二十七、（公信案）昭和 5 年 3 月 24 日



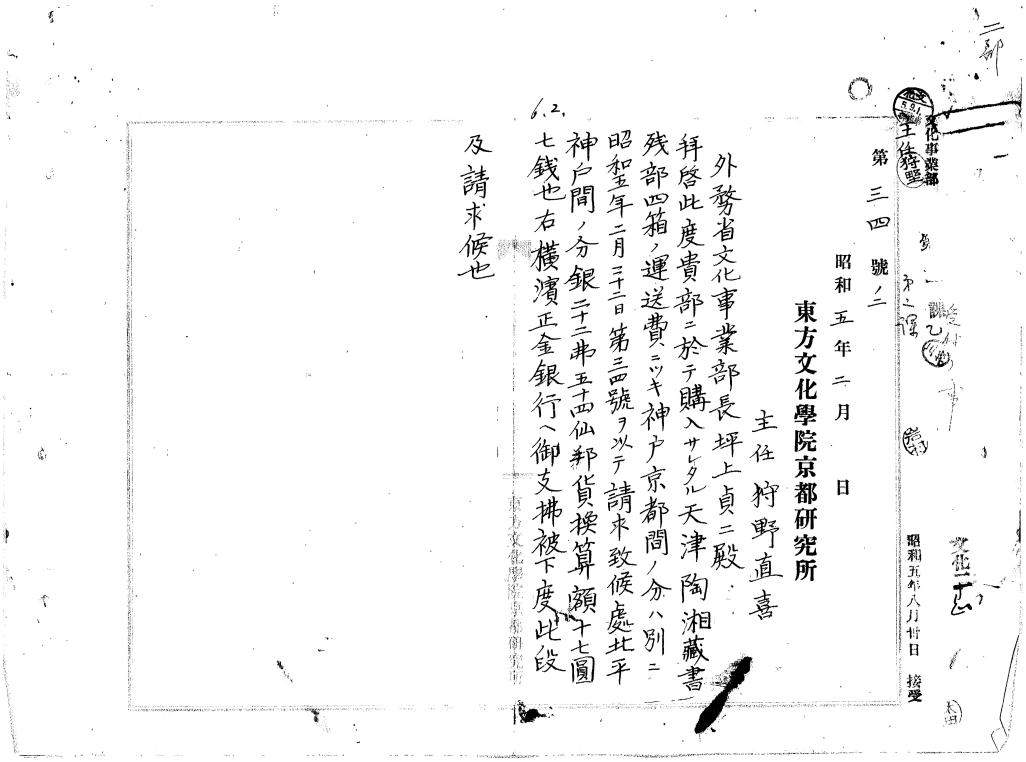
第五四號
昭和五年八月二十六日
東方文化學院京都研究所
主任 狩野直喜

外務省文化事業部長坪上貞二殿

拜啓貴部ヨリ曩ニ天津ニ於テ御購入相成タル陶湘藏書殘部四箱ヲ在北平公使館ヨリ貴部宛發送サレタルニ關シ右ニ要ス北平神戸間運送費ヲ橫濱正金銀行ヨリ貴部ヘ請求有之候處直チニ御支拂有之候ニツイテハ來示ニ從ヒ先般御送被下候「メモ」ヲ添付シ別紙請求書呈出候也

6.2.

二十八、狩野直喜致外務省文化事業部長坪上貞二書信　昭和 5 年 8 月 26 日（1）



第三四號ノ二
昭和五年二月　日
東方文化學院京都研究所
主任 狩野直喜

外務省文化事業部長坪上貞二殿

拜啓此度貴部ニ於テ購入サレタル天津陶湘藏書殘部四箱ノ運送費ニツキ神戸京都間ノ分ハ別ニ昭和五年二月三十日第三四號ヲ以テ請求致候處北平神戸間ノ分銀二十二弗五十四仙邦貨換算額十七圓七錢也右橫濱正金銀行ヘ御支拂被下度此段及請求候也

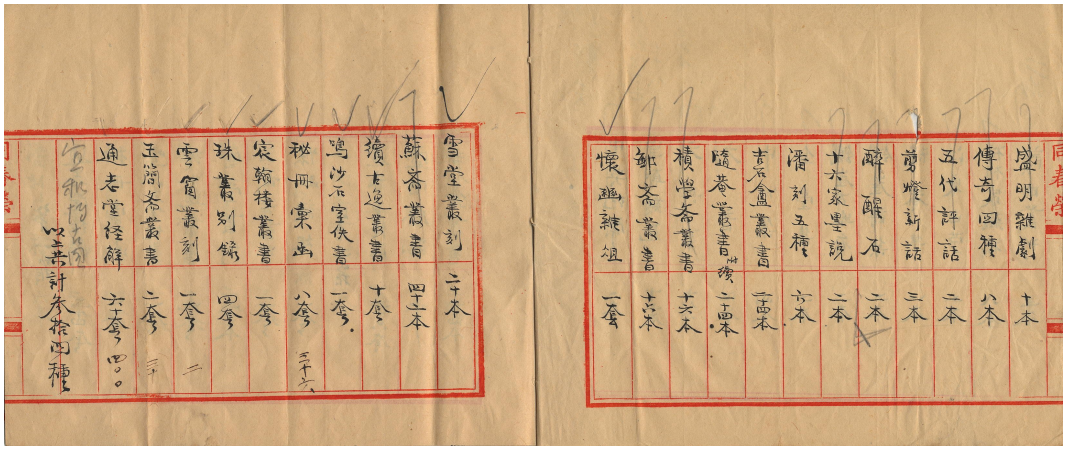
6.2.

二十八、狩野直喜致外務省文化事業部長坪上貞二書信　昭和 5 年 8 月 26 日（2）

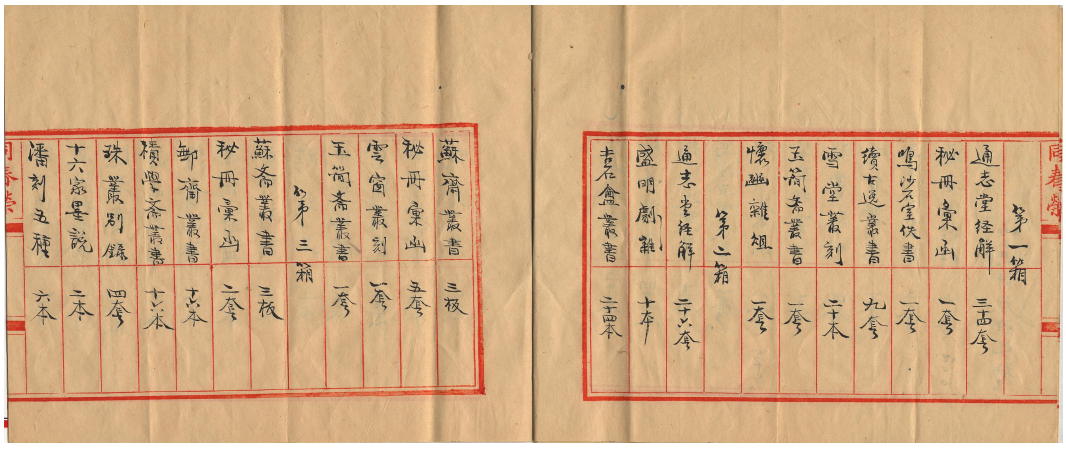
3-3　陶氏叢書第二次送附書目

（京都大學人文科學研究所所藏）

申吳紀聞	二本
皇朝類苑	十二本
元典章	十六本
元音	四本
中州集	四本
金臺集	二本
鐵崖古樂府	二本
鐵崖詩集	二本
悅卷集	一本
江東白苧	二本
楊村家藏稿	八本
讀曲叢刊	三本



雪堂叢刻	二十本
蘇齋叢書	四十本
續古逸叢書	十套
鳴沙石室佚書	一套
秘册彙函	八套
宋賴樓叢書	一套
珠叢別錄	四套
雲窗叢刻	一套
玉簡齋叢書	二套
通志堂經解	六套
盛明雜劇	十本
傳奇四種	八本
五代詞話	二本
剪燈新話	三本
醉醒石	二本
十六家墨說	二本
潛刻五種	六本
古今盒叢書	二函本
隨巷叢書	續二十四本
續學齋叢書	十六本
郘齋叢書	十六本
懷豳雜俎	一套



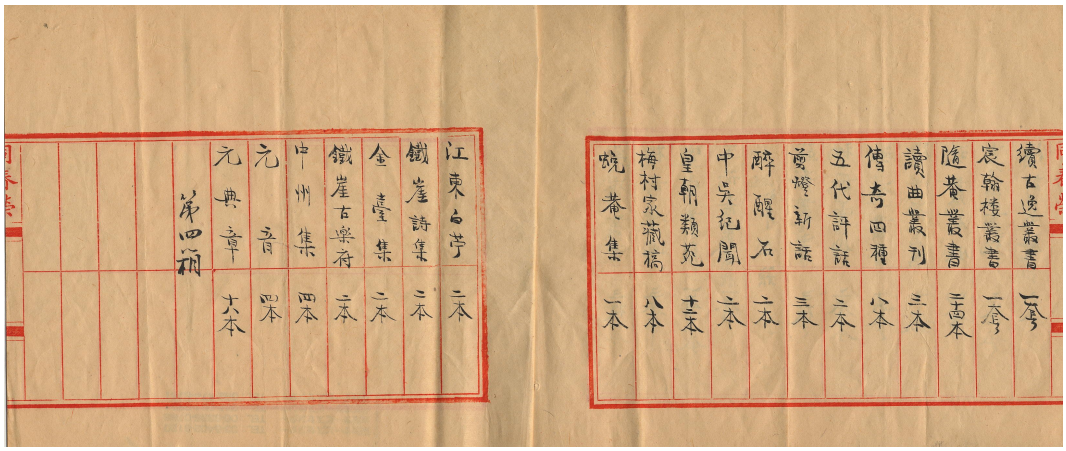
蘇齋叢書	三板
秘册彙函	五套
雲窗叢刻	一套
玉簡齋叢書	一套
蘇齋叢書	三板
秘册彙函	二套
郘齋叢書	十六本
續學齋叢書	十六本
珠叢別錄	四套
十六家墨說	二本
潛刻五種	六本

第一箱

通志堂經解	三函套
秘册彙函	一套
鳴沙石室佚書	一套
續古逸叢書	九套
雪堂叢刻	二十本
玉簡齋叢書	二套
懷豳雜俎	一套

第二箱

通志堂經解	二十六套
盛明劇雜	十本
古今盒叢書	二函本

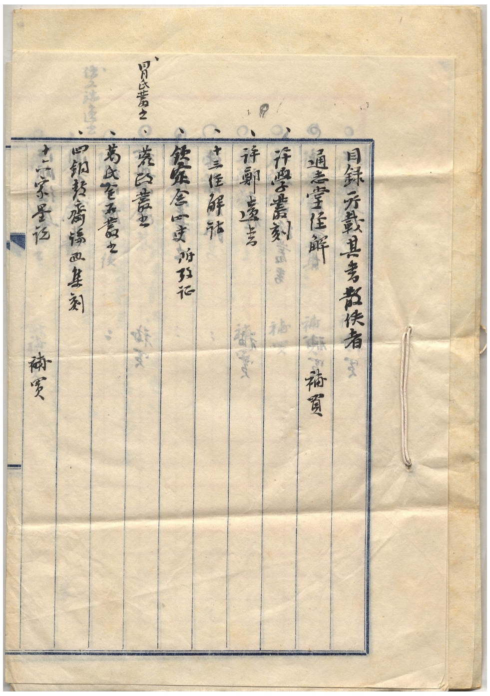


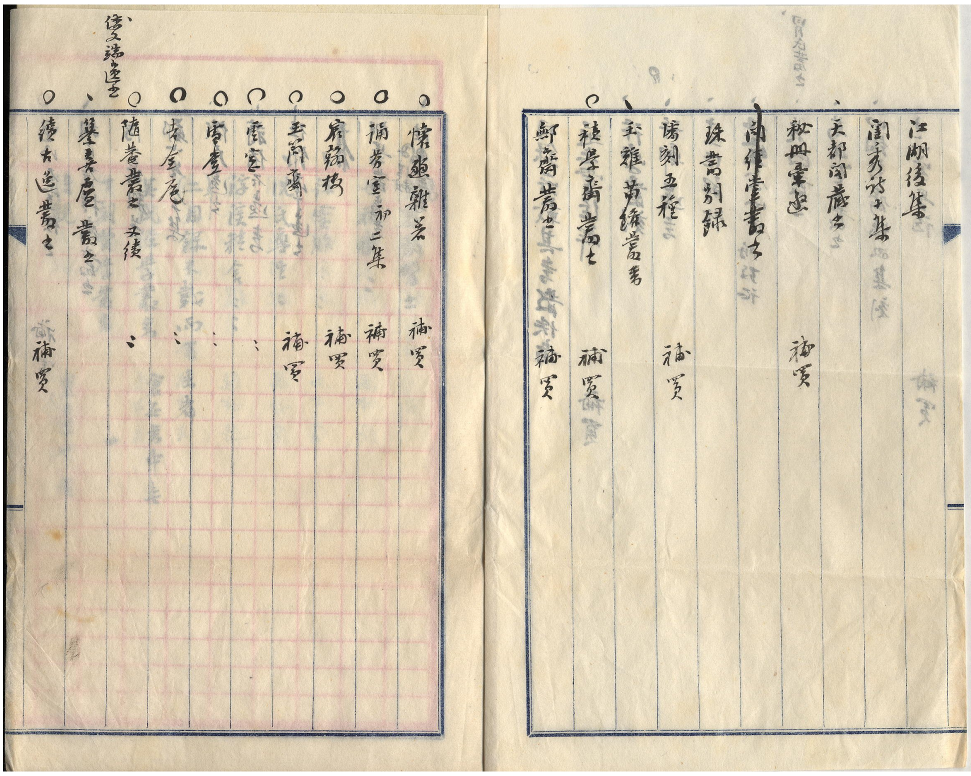
續古逸叢書　一套
宸翰樓叢書　一套
隨菴叢書　三函本
讀曲叢刊　三本
傳奇四種　八本
五代詩話　二本
黃燈新話　三本
醉醒石　二本
中吳紀聞　二本
皇朝類苑　十二本
梅村家藏稿　八本
晚菴集　一本

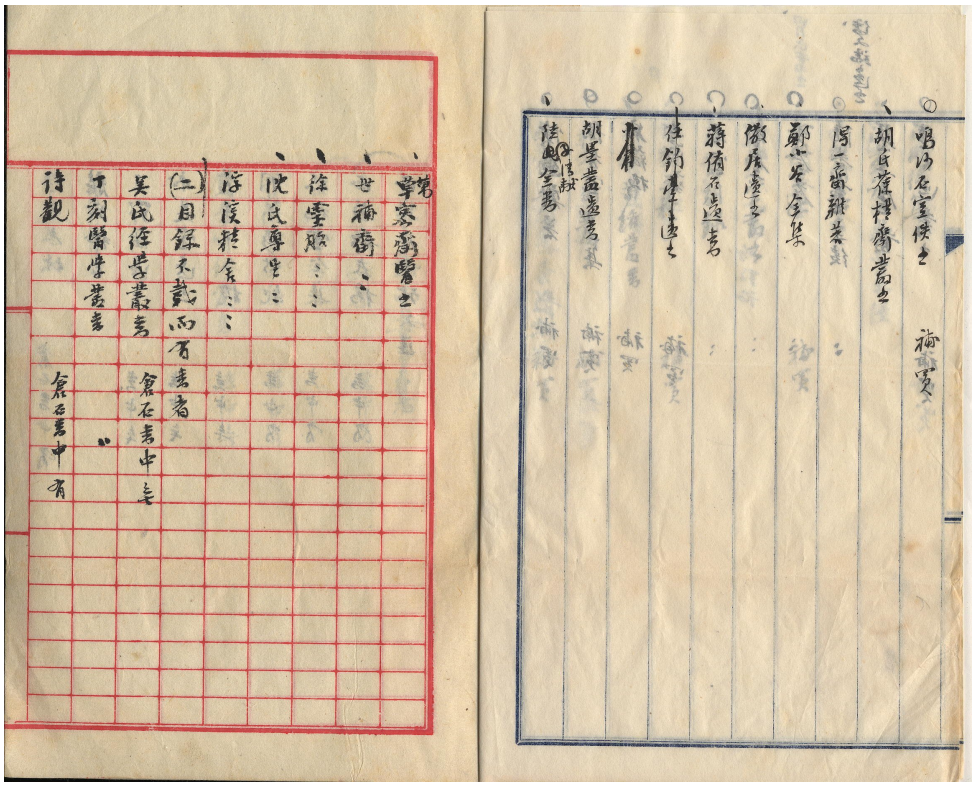
江東白苧　二本
鐵崖詩集　三本
金臺集　二本
鐵崖古樂府　二本
中州集　四本
元音　四本
元典章　十六本

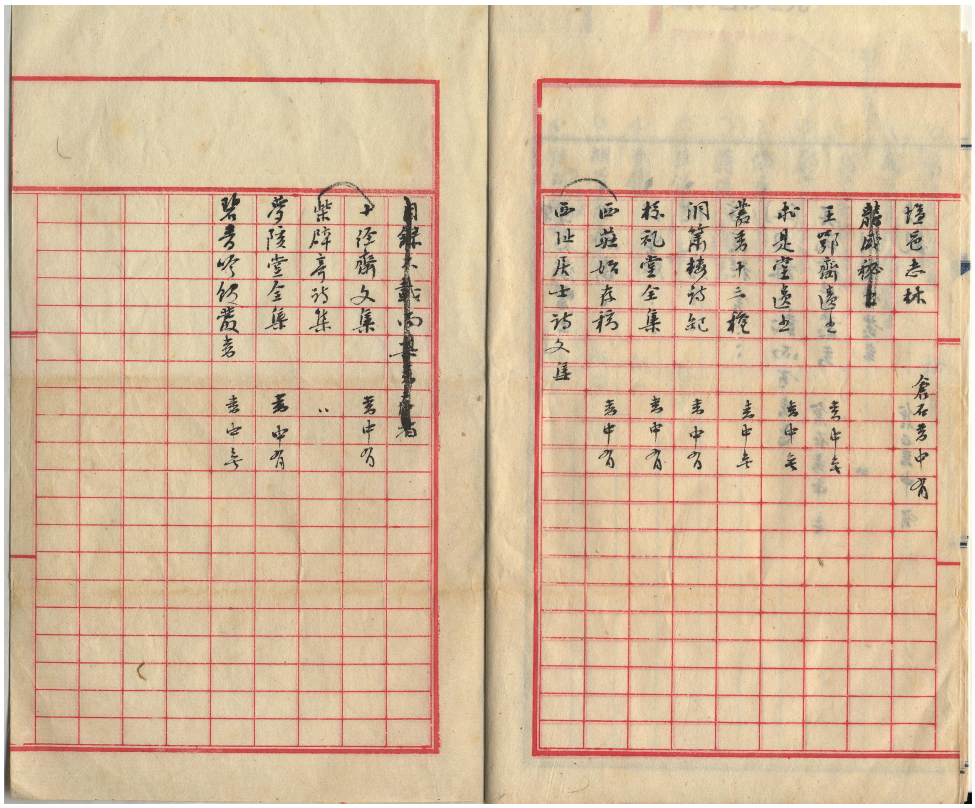
3-4　陶氏叢書點檢目

（京都大學人文科學研究所所藏）


目録所載其書散佚者
通志堂經解 補買
許學叢刻
許鄭遺書
十三經解詁
鈕氏金四史 附校記
莊氏叢書
葛氏金石叢書
四銅鼓齋論畫集刻
十六家墨記 補買
胃氏叢書


懷豳雜著 補買
誦芬室初二集 補買
宸翰樓 補買
玉簡齋 補買
雲窗
雪堂
吉金庵
隨菴叢書 又續
纂喜廬叢書
續古逸叢書 補買
江湖後集
閨秀詩十集
天都閣藏書
松鄰叢書 補買
南陵叢書
殊叢別録
儒刻五種 補買
玉雅堂叢書
積學齋叢書 補買
鄦齋叢書 補買

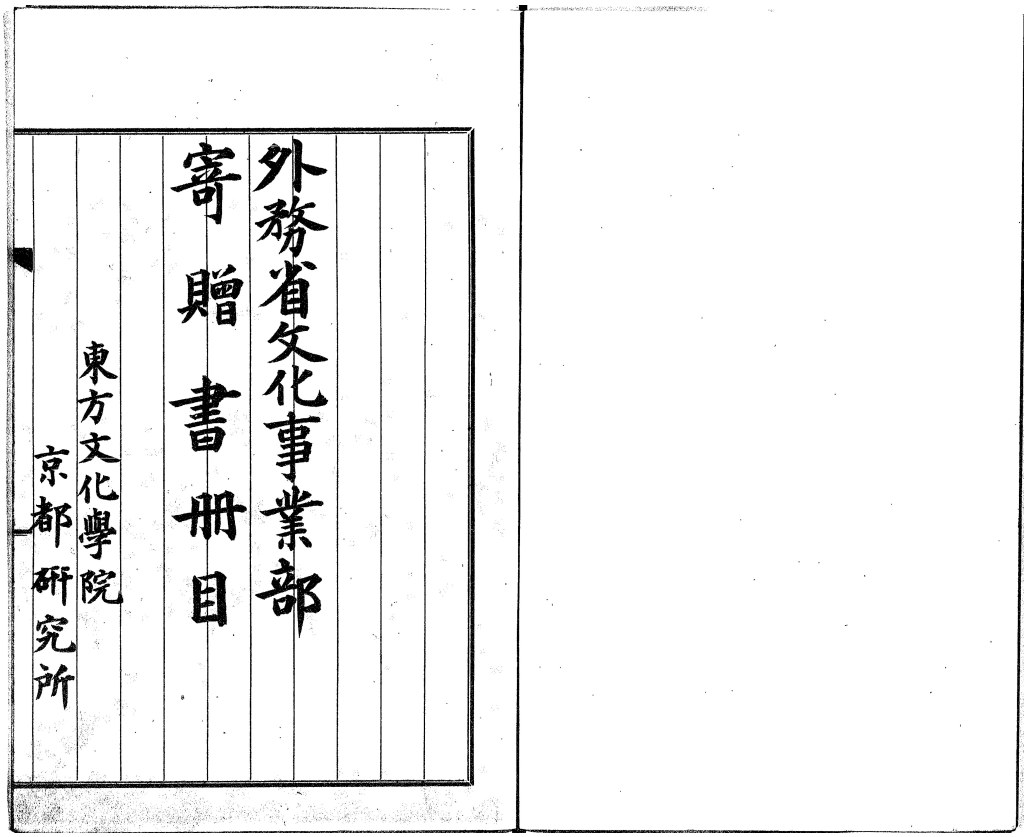


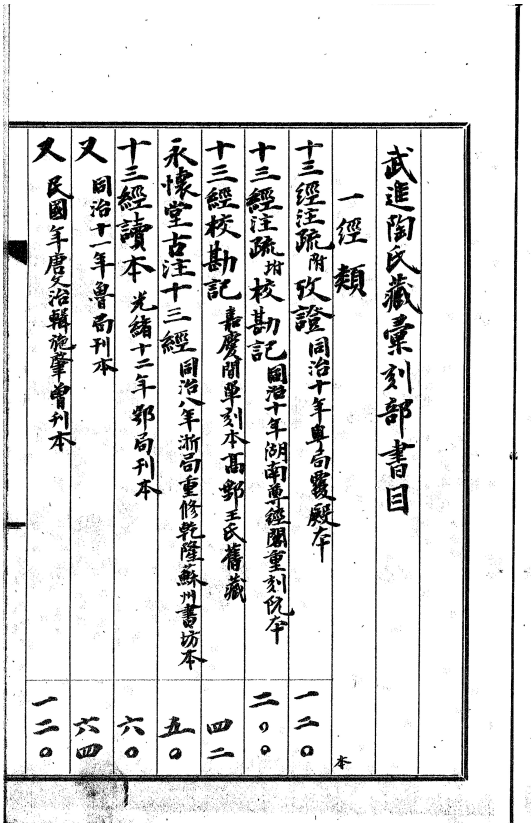


3-5　外務省文化事業部寄贈書册目

東方文化學院京都研究所

（外務省外交史料館所藏外務省記録 H 門東方文化事業關連ファイルより）

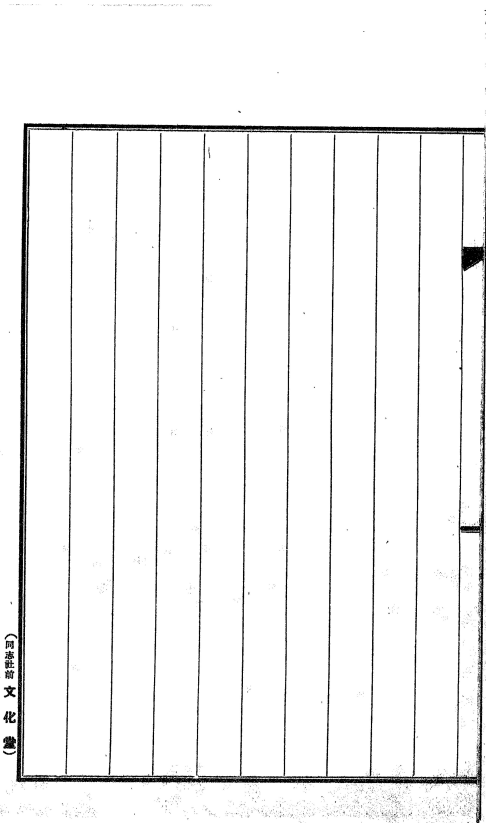

外務省文化事業部
寄贈書冊目
東方文化學院
京都研究所



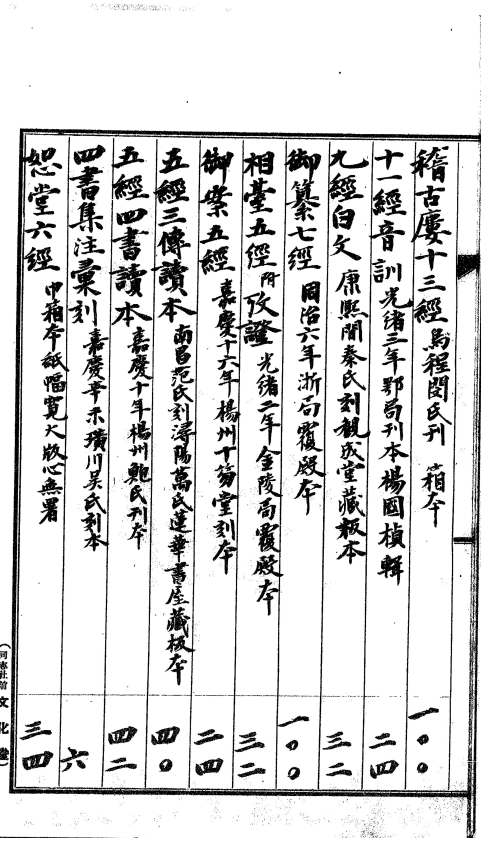
武進陶氏藏彙刻部書目

一經類

十三經注疏附校勘記	同治十年粵西覆殿本	一二〇本
十三經注疏附校勘記	同治十年湖南萬經閣重刻祝本	二一〇
十三經校勘記	嘉慶間單刻本	四二
永懷堂古注十三經	同治六年浙局重修乾隆蘇州書坊本	五〇
十三經讀本	光緒十三年鄂局刊本	六〇
又	同治十一年魯局刊本	六四
又	民國年唐文治輯施肇曾刊本	一二〇

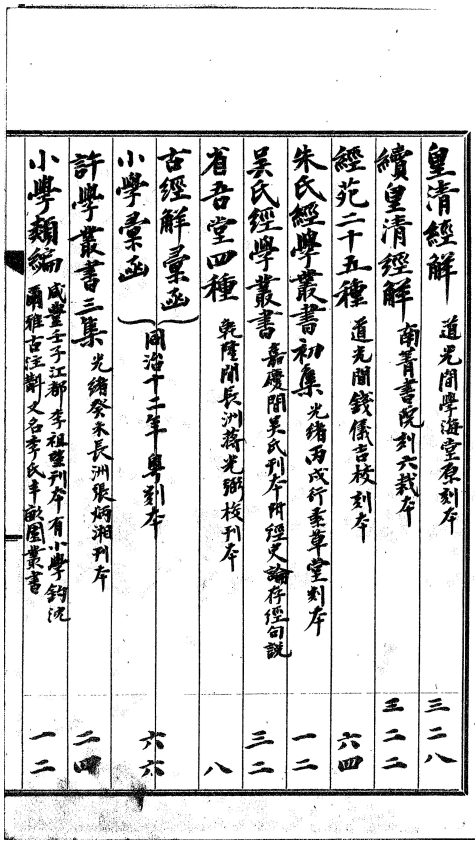


同治壬申 文化堂



稽古慶十三經	烏程閔氏刊	箱本 一〇〇
十一經音訓	光緒三年鄂局刊本	楊國楨輯 二四
九經白文	康熙間秦氏刻	觀妙堂藏板本 三二
御纂七經	同治六年浙局覆殿本	一〇〇
相臺五經附攷證	光緒二年金陵局覆殿本	三二
御纂五經	嘉慶十六年揚州十笏堂刻本	二四
五經三傳讀本	南昌府氏刻	滂喜齋藏板 四〇
五經四書讀本	嘉慶十年揚州鮑氏刊本	四二
四書集注彙刻	嘉慶辛未積川吳氏刻本	六
恕堂六經	中箱本紙幅寬大校心無署	三四

同治壬申 文化堂



皇清經解	道光間學海堂原刻本	三二八
續皇清經解	南菁書院刻六載本	三二二
經苑二十五種	道光間錢儀吉校刻本	六四
朱氏經學叢書初集	光緒丙戌行素草堂刻本	一二
吳氏經學叢書	嘉慶間吳氏刊本附經史論存經句說	三二
省吾堂四種	乾隆間長洲蔣光煦校刊本	八
古經解彙函	同治十二年粵刻本	六六
小學彙函		
許學叢書三集	光緒癸未長洲張鳴珂刊本	二四
小學類編	咸豐壬子江都李祖望刊本有小學鉤沉爾雅古注斠又名李氏半畝園叢書	一二

五經要義 蘇局刊本 魏鶴山輯 四二
胡氏尚書二種 胡渭撰 尚書錐指 洪範正論 康熙己酉刻本 一二
七經精義 黃淦撰 嘉慶元年養正堂藏板本 一四
三禮攷注 吳廷棟訂 萬曆中刻本 一〇
十三經客難 道光丙午南昌縣學文昌祠考棚公函藏板本 二〇
三禮通釋 林昌奕撰 同治三年粵刻本 四八
六藝堂詩禮七篇 丁晏撰 咸豐三年海陵閘刻本 一二
孝經五種 吕鳴謙撰 光緒十九年刊本 八
郘刻五雅 天啟閒堂藁種 宋本 六
禮樂書合刻 光緒丙子菊坡精舍刻本 三六

石經彙函 光緒庚寅粵雅書局刊本 一〇

石三十八種 二千二百七十六本

二、史類

二十四史 五洋局刻本 五五〇
資治通鑑彙刻 蘇局本通鑑垂目錄稽古錄畢氏續 二二九
紀事本末彙刻 廣雅本左傳通鑑宋史遼史金史元史 一二九
紀事本末五種 贛局本左傳通鑑宋史元史明史 一三六
紀事本末彙編 思賢堂刻本左傳通鑑宋史元史明史 一二〇
九通 浙局刊本 一〇〇〇
十朝聖訓 武英殿刊本 三三六

八旗通志 武英殿刊本 一二〇
十朝東華錄 長沙王氏原本 光緒戊子會稽蒓三倉堂藏板本 二六四
國語三種 道光丙午振綺堂刊本 五
兩漢紀合刻 康熙間蔣氏刻樂三堂藏板本 一〇
荊駝逸史 近排印本 四八
明李卓吾史彙編 近排印本 一二
勝朝遺事二集 光緒癸未臧華庵本 三九
南疆書合刻 康熙間蔣氏刻本 七
紀錄彙編 沈萬甫纂 五〇
宋元四明志 咸豐甲寅徐氏煙嶼樓刊本 四〇

宋元鎮江志彙刻 道光壬寅丹徒包氏刊本 二二
太倉舊志彙刻五種 宣統間刊本 六
地志中書 開封開華書局刻本 五
續補河道水利叢書 道光四年刊本 一〇
閒影廔輿地叢書 並輿地叢刻初編 光緒戊申京師排印本 一四
浙江圖書館輿地叢書二集 一六
邈園叢編 西冷印社排印本 一三
行素草堂金石叢書 光緒戊子刊本 四〇
金石三例合刻 光緒戊寅讀有用書齋刊本 排印本 四
百一廬金石叢書 陳氏刊本 一〇

理堂金石文字 揚守敬撰		一七
右二十八種 三千二百四十九卷		
三、子類		
十子全書 嘉慶甲子重刻姚江蘇聚文堂藏板	卷	二八
百子全書 郭面刊本		七六
二十二子 光緒二年浙局刊本		六〇
聖門十六子全書 道光壬辰昌平書院藏板	卷	六
東垣十書 日本刻本		一七
周刻醫學叢書 光緒辛卯池陽周氏校刊本 欠三集		六〇
丁刻醫學叢書 初稿 光緒四年當歸草堂刊本		一〇

古今醫統正脈全書 光緒丁亥來鶴醫局重印本 有民國十二年序		八〇
六醴齋醫書十種 修敬堂		二〇
瓶華書屋醫書五種 道光己巳瓶花書屋刊本		一六
韓園醫學六種 光緒癸未江西書局刊本		一二
萬氏醫學十種 順治年刊本		二四
上海製造局譯書彙刻		四三九
白芙堂纂學全書 同治十三年長沙古荷花池精舍本		三十
觀我生室彙稿 道光戊子文選樓刊本		二四
篆學瑣著 道光庚子顧氏刊本		六
葬書五種 咸豐四年刊本		一〇

宋元檢驗三錄 嘉慶十七年仝敬吳氏藏板		四
農政全書 山東書局刊本		二〇
五朝小說		四〇
明六十家小說		八
皇明十六家小品 羣娛閣評選 峭雪館藏板		一〇
天學初函 不足本		二二
道藏精要二十八集		二六八
方壺外史 隆慶間原刻本		一二
雲笈七籤		二四
大藏經典 哈同石印本		四一四

右二十七種 一千七百四十二卷		
四、集類		
漢魏百三名家集 光緒閒湘刻本		一〇〇
乾坤正氣集 道光戊申秉江帥署求是齋刻本		一四〇
曹陶謝三家詩 振山來卓尒堪編刊本		四
初唐四傑文集 光緒五年淮南書局		四
三唐人集 光緒乙亥讀有用齋校梓本		四
唐十三人詩選、八劉詩集 九曲堂選 金閶綠堂刊本 缺心		八
小檀樂室閨秀詞十集 閨秀詞鈔		二四
唐四家詩 康熙乙亥汪立名刻本		五

唐人五十家小集 靈鶼閣刊板新書社印本 一〇
韓柳文合刻 蔣氏學山堂藏板本版心署三經藏書 三二
三宋人集 万功惠光緒辛巳慶抄刊本 六
宋詩鈔 吳之振等撰 二〇
宋百家詩存 乾隆六年三六書堂藏板本 二〇
南宋羣賢小集 江湖後集 讀畫齋本 三八
宋五十家詩選 日本官版 一六
宋人詩甲乙丙丁編 乙卯年宜秋館印本 六四
宋六十名家詞 光緒間錢唐汪氏重刻本 三〇
宋元名家詩 萬曆刊本 四二

唐氏百家唐詩 八〇
石倉歷代詩選 六三八
私正四傑集 光緒乙未長沙張氏湘雨樓刊本 一六
邱海二公集合刻 康熙四十七年仿宋字本 八
國朝三家文鈔 宋犖編刊本 一〇
國初十家詩鈔 道光十年信芳閣本 一八
皇清百名家詩 閻甲魏惟 蒙刻聚錦堂藏板本 二六
百名家詞鈔 金閶綠蔭堂刻本 二六
詩觀三集 鄧孝儀選漸柳讀書堂藏板 四〇
十家宮詞 貞曜堂補板本 一

詞學叢書 光緒六年重修刊江承啓堂本 八
四印齋景刻詞 宋元三十一家詞 光緒戊子王氏家塾刊本 一六
彊村叢書 宣統年刊本 三二
右三十一種一千四百八十六本
五叢刊類
儒學警悟七集 閻氏羣刻本 八
百川學海 明刻本 二四
續百川學海 明刻本 二三
廣百川學海 明刻本 二四
津逮秘書十五集 汲古閣刻本 一六〇

秘書二十一種 康熙甲辰汪士漢校刊本 一六
說郛 宛委山房藏版本 六三
續說郛 四七
稗海 明刻本 九六
古今逸史 明刻本 四八
寶顏堂秘笈 明刻本 一八
又續 三六
又彙 四八
又廣 三六
又普 四二

又雅雅 一八
墟邑志林 天啟刊本 三〇
程刻漢魏叢書 萬曆刊本 八四
何刻漢魏叢書 崇禎刊本 五六
王刻漢魏叢書 九六
漢魏遺書鈔 汲古閣校本 二〇
學海類編 道光中排印本 一一二
昭代叢書五十卷 一一二
檀几叢書 震擧堂刊本 一一
晚翠叢書十集 世楷堂刊本 一六〇

李氏函海 嘉慶十四年校刊本 一六〇
重訂李氏函海 光緒七年樂道齋重刊本 一二〇
藝海珠塵八集 聽彝堂藏板本 八〇
又壬癸集 一二三
浙局重刻武英殿聚珍版叢書三十九種 四六八
粵雅重刻武英殿聚珍版叢書 光緒二十五年刊本 三五〇
粵刻古香齋十種 一六
奇晉齋叢書 乾隆刊本 一六
賀園叢書 乾隆刊本 三二
雅雨堂叢書 乾隆丙子刊本

抱經堂叢書 乾隆刊本 五四
經訓堂叢書 乾隆刊本 三二
平津館叢書十集 光緒乙酉朱槐廬藏板本 四八
咫進齋叢書 嘉慶刊本 四〇
又申箱本 嘉慶刊本 一〇
文選樓叢書 道光壬寅刊本 一二二
知不足齋叢書三十集 道光刊本 二四〇
續知不足齋叢書二集 道光刊本 一六
後知不足齋叢書八集 光緒甲申鄭氏刊本 六四
硯雲甲乙編 乾隆己未刊本 一四

汗筠齋叢書 八
守山閣叢書 道光閒刊本 一〇〇
學津討原 嘉慶十年刊本 二八〇
真意堂三種 嘉慶辛未漢川吳氏排印本 三
正誼齋叢書 道光二十年天心閣藏板本 二二
正誼堂叢書 同治五年左宗棠刊福州正誼書院藏板本 一六〇
湖海樓叢書 嘉慶三十四年刊本 二〇
得月簃叢書初次刻 道光十年刊本 二八
約園叢書 嘉慶丁卯刊本 二四
賜硯堂叢書甲乙丙丁集 道光庚寅刊本 三二

拜經樓叢書 即愚石叢書 乾隆丙午刊本 一六
重校拜經樓十種 光緒十九年朱氏刊本 一〇
別下齋叢書 丙辰重編本 三六
海山仙館叢書 咸豐年重刊本 三六
宜稼堂叢書 道光辛丑刊本 五二
惜陰軒叢書 正續 光緒丙申長沙重刊本 一〇二
天壤閣叢書 光緒癸未刊本 二八
十萬卷樓叢書 光緒己卯刊本 一一二
小萬卷樓叢書 咸豐五年刊本 一二
當歸草堂叢書 同治二年丁氏刊本 一六
三長物齋叢書 道光二十七年重校本 六四
棟亭十二種 康熙中揚州詩局刊本 二〇
石研齋四種 道光庚寅年帶經舍刊本 六
藤花榭經學五種 嘉慶甲戌刊本 一二
讀畫齋叢書四十六種 六四
粵雅堂叢書三十集 道光間刊本 四〇〇
海山仙館叢書 道光間刊本 一二八
述古叢鈔四集 同治九年刊本 四〇
碧琳琅館叢書 宣統元年印本 一二
翠琅玕館叢書四編 四〇

華陽叢書 附硃批駢體文鈔 六〇
亟覺樓叢書 光緒間刊本 三六
啸園叢書 六〇
益雅堂叢書 己亥年文選樓歸刊本 即玲瓏山館叢書 三二
榕園叢書 同治甲戌刊本 六〇
甘雨亭叢書 日本刊本 三二
怡進齋叢書三集 光緒七年刊本 二四
小石山房叢書 同治甲戌虞山顧氏藏本 一六
玲瓏山館叢刻 道光二十九年顧湘刻本 一〇
連筠簃叢書 道光廿八年暨石楊氏藏 附記文義記 永樂大典目錄 七二

觀華書屋叢書 咸豐初江夏童智億校刊本 二〇
琳琅秘室叢書四集 光緒戊子會稽董氏誦芬室重栞 二四
兵恩書室叢書甲乙編 咸豐四年栞 一二
清芬堂叢書 光緒十四年慎自吾軒栞 三二
青照堂叢書續 道光乙未朝邑劉氏栞 三〇
借月山房彙鈔 嘉慶甲栞本 一〇四
澤古齋重鈔 道光甲栞本 九六
指海二十集 原缺若干本補以石印借月山房 一六〇
式古居彙鈔 五四
春暉堂叢書 光緒間栞本 一〇

荔墻叢刻 光緒己卯栞本 一二
傳硯齋叢書 光緒栞本 九
清頌堂叢書 一六
滂喜齋叢書 三二
功順堂叢書 二四
武訓堂叢書三集 三〇
校經山房叢書 光緒三十年栞本 三二
望三益齋刊書三種 同治光緒間栞本 一〇
獨抱廬叢書 道光五年陳栄倉華廬栞本 一八
清風堂叢書 光緒八年錢保塘栞本 一〇

佚存叢書 六〇
振綺堂叢書 宣統庚戌京師活字本 一二
集虛草堂叢書 光緒甲辰合肥李氏栞本 一八
半厂叢書 光緒己丑栞本 一二
結一廬叢書 甲辰丁丙兩辰栞本 一〇
古棠書屋叢書 道光十四年鴛溪村舍蔡氏訂栞本 二八
観自得齋叢書 光緒十八年栞本 二四
南菁書院叢書 四〇
大亭山館叢書 光緒四年刊本 八
職華盦叢書 光緒丁亥山陰朱氏栞 六四

唐石經館叢書 洪氏公善堂栞本 一〇八
心矩齋叢書 蔣氏栞本 一二
吳氏半畝園叢書 新建吳坤修栞本 四八
受經堂叢書 道光三年山陰楊紹文栞本 八
遜敏堂叢書 咸豐元年活字本 一四
仰視千之百二十九鶴齋叢書五集 光緒二年栞本 三〇
粟香室叢書 五六
玉雨堂叢書一集 八
邵武徐氏叢書初集 二〇
槐廬叢書 光緒丁亥朱氏栞本 八〇

愛陀羅華閣叢書 光緒中伊葉山房栞本 四〇
娛園叢刻 光緒癸丑刊本 二
榆園叢書 光緒間刊本 附唐文粹 四〇
靈鵲閣叢書 振新書社印本 四八
知服齋叢書五集 光緒十八年栞本 一五
木犀軒叢書 三〇
五經歲徧齋叢書 道光十二年栞本三種 一〇
詒經堂叢書七種 嘉慶十八年栞本 八
愛園叢書 成都張慎儀栞本 一六
螺樹山房叢書 順德龍裕光校栞本 一四

知足齋叢書 黃爽棻本 一〇
止園叢書 光緒乙巳刻本 四八
敘果齋七種 道光間刊本 二〇
暘園叢書甲集 光緒甲午四明刊本 四
棠文書局彙刻書 光緒三年刊本 四二
廣雅書局彙刻書 有民國九年序 四二〇
來舍書庫叢刻 光緒辛丑繆朝荃棻本 一二
求實齋叢書初集 光緒十七年湘鄉蔣氏棻本 二〇
有福讀書堂叢書 光緒辛巳揚州吳氏棻本 二
靜園叢書 戊子十月治字本 一六

觀古閣叢刻 同治癸酉棻本 二四
觀古堂彙刻書 戊申年棻本 八
雙梅景闇叢書 光緒丁未棻本 六
麗廔叢刻 光緒丁未棻本 四
思賢書局刊書十五種 一一三
雲自在龕叢書 二〇
藕香零拾 三二
峭帆樓叢刻 趙氏棻本 二〇
又滿樓叢書 趙氏棻本 一〇
適園叢書 一九二

涉園叢刻 治字本 六
聚學軒叢書 一〇〇
晨風閣叢書 一六
漸學廬叢書 光緒丁酉不印本 一一
漸西村舍叢刻 八〇
燉煌石室遺書 宣統己酉棻 四
松鄰甲乙編 丁巳年棻本 一二
融經館叢書 光緒十三年六杉齋校本 三六
月河精舍叢鈔 光緒六年 一六
明辨齋叢書 同治丁卯棻本 二四

新陽趙氏所刻書九種 一〇
廣仁堂所刻書 光緒八年棻本 一二
劉氏傳經堂叢書 光緒元年棻本 一六五
龍威秘書十集 乾隆甲寅刊本 八〇
右一百六十九種八千八百九十九本
六 影仿類
澤存堂五種 吳鄒張氏棻 一二
曹棟亭五種 四〇
士禮居叢書 原刻本 三二
古逸叢書 葉石印本 四九

鐵華館叢書 長洲蔣氏刻本 六
擇是居叢書 吳興張氏刻本 四六
洪氏公善堂叢書 光緒六年刻本 二〇
繆氏對雨樓叢書 八
影汲古抄南宋六十名家小集 古書流通處影印本 五八
海源閣五種 咸豐三年刻本 一二
千金方合刻 江户醫學館影北宋本 光緒戊寅上海印本 二一
右十一種 三百四本
七類 佚類
玉函山房叢書 同治刻本 六三

又 光緒甲申楚南書局重刻本 六九
二酉堂叢書 道光元年家刻本 一〇
漢學堂叢書 八〇
鄭氏佚書 光緒戊子浙局刻本 一〇
問經堂叢書附八種 二四
又二十種 二〇
十種古逸書 道光壬寅梅瑞軒刻本 六
漢魏二十一家注周易 八
七家後漢書 光緒八年刻本 六
右十種 二百九十六本

八郡邑類

徑川叢書正續 五〇
台州叢書 嘉慶間刻本 一八
浦城遺書 嘉慶十六年留香寶祝氏刻本 二〇
鐵輔叢書初編 二九一
豫章叢書 一五二
金華叢書 民國十四年浙江圖書館印本 二七六
又續 一〇〇
嶺南遺書 道光辛卯刻本 九六
永嘉叢書 同治間徐友言校刻本 四二

樵李叢書 光緒四年孫氏守雲仙館刻本 二〇
湖北叢書 光緒辛卯三餘草堂刻本 六四
金陵叢書 蔣氏慎修書屋活字本 甲至丁集 一二八
金陵叢刻 光緒三十二年 一二
湖州叢書 湖州義塾刻本 二〇
棣香齋叢書 道光癸巳刻本 附叢桂雜著 八
武林往哲遺書前後編 九六
湖北先正遺書 慎始書齋影印本 一八〇
紹興先正遺書 四〇
徐州二遺民集 光緒十九年刻本 五

中州名賢文表 康熙中梨棗 八
毘陵六逸詩鈔 壽南堂梨棗 八
梅會詩人遺集 康熙六十一年梨棗 一二
嶺南三大家詩選 一〇
浙西六家詞 原刻本 四
江左十五子詩選 原刻本 八
歷城三子詩 乾隆辛巳相香堂藏板 三
江西詩派韓饒二集合刻 宣統庚戌沈氏仿宋梨棗 四
粵十三家集 道光丁亥伍氏梨棗 四八
武林掌故叢編廿六集 光緒癸未丁氏刊本 二〇八

京口掌故叢書 戊申十月丹徒王氏梨棗 二
新安二布衣詩 康熙刊本 四
練川十二家詩 乾隆刊本 王鳴盛選 六
永嘉詩人詞堂叢刻 宣統乙卯會廣生梨棗 八
石蓮庵彙刻山左人詞 光緒辛丑金陵梨棗 一〇
貴池先哲遺書 六〇
右三十五種 二千三十一本
九一姓所著
二程遺書 一六
二范全集 宣統庚戌歲寒堂梨棗 一六

三蘇全集 道光壬辰詞堂本 六二
三沈文集 杭白梨棗 一〇
高安三劉集 道光戊申梨棗 二
豫章三洪集 一
雲間二韓集 上海 咸豐堂曹氏刻本 六
洪氏晦木齋叢書 宣統三年梨棗 七二
寧都三魏集 易堂梨棗 五〇
馬氏叢刻 同治庚午敦倫堂藏板本 二〇
海虞三陶集 光緒七年楊同福梨棗 八
梁氏叢書 梁同梁玉繩等 三四

黃氏家集初編 辛卯家祠梨棗 八
二藍集 四
述本堂集 乾隆刊本 一二
毘陵伍氏合集 二
長洲彭氏家集 光緒年家刻本 四五
陽湖錢氏家集 活字本 四
湖墅錢氏家集 光緒丙申梨棗 一八
蓮義黎氏家集 光緒己丑日本使署梨棗 一〇
江都陳氏著書 裘露軒藏板本 三六
倭官陳氏著書 即在海全集五小瑯環叢書 七〇

顧氏六世詩文集	雍正中桂雲堂藏板本	一七
帥氏清芬集	綠窗重槧本	三〇
畢氏三先生集	明刻本	四
新喻三劉文集	乾隆廿五年水西藏板	三
高郵王氏四種		四〇
江都汪氏遺書	原刻本	一〇
董氏叢書	取斯家塾槧本	一二
德州田氏叢書	田雯田同之等	三〇
新安二江集	嘉慶間槧本	四
求可堂兩世遺書	咸豐二年槧本	三

(同志社前 文化堂)

毘陵謝氏著書	光緒丙戌槧本	二五
吴氏一家稿	咸豐五年槧本	一六
金陵朱氏家集	道光庚子刊本	四
朱氏傳芳集	粵刻本	五
丹徒張氏合集		六
潘氏叢刻	家刻本	一二

右三十八種 皆二十七本

十 一人所著類

黄石齋經學九種	閩中槧本	二八
萬氏經學五種	原刻本	四

顧氏音樂五書	原刻本	一二
雷氏說文四種	光緒甲申家刻本	六
王氏說文三種	同治四年槧本	二二
苗氏音韵四種	咸豐辛亥漢磚亭藏板本	五
錢氏四種	嘉慶壬戌椎萬堂槧本	四
王鄂宰遺書十種		八
凌氏叢書	嘉慶戊辰蜑雪閣槧本	一二
朱氏羣書	臨嘯閣刊本	四
味經齋遺書	原刻本	一二
珍藝宧遺書	嘉慶十四年原刻本	一一

(同志社前 文化堂)

經韻樓叢書	說文段注、六書音均表	三四
傳經堂叢書	洪氏槧本	三二
戴氏遺書	並算經十種	四九
微波榭叢書兩種		
孔顨軒著書	原刻本	一〇
拜經堂叢書	臧氏家刻本	一〇
孔叢伯著書	光緒庚寅山東書局槧本	八
邵位西遺書	即半巖廬遺集	三
寫礼廎遺書	乙卯王氏槧本	四
茹三樵著書	會稽茹氏家刻本	一〇

求己堂八種 家刻本 一二
樓山堂遺書 同治四年永寧官廨刻本 一二
蘅嶼裘七種 嘉慶十三年刻本 八
喬勤恪公全集 光緒三年强恕堂刊本 三二
拙尊園叢稿 不印本 一六
閱微草堂五種 盛氏刻本 一〇
思雅堂彙刻 三二
五種遺規 道光二年重刊本 八
蕉窗九錄 西印令社聚本 一
二曲全集 道光戊子雲蔭堂藏板本 八

（同志社前 文化堂）

燕禧堂五種 五
聽彝堂偶存稿 乾隆中吳省蘭聚本 一〇
柚堂全集 乾隆家刻本 一四
讀易屢彙刻 欠三種 八
大興徐氏三種 八
黃黎洲先生集 西爽堂聚本 一〇
皮鹿門著書 一三
南野堂全集 八
章實齋遺書 道光壬辰冬聚 五
武陵山人遺書 光緒癸未十月 六

施愚山全集 原刻本 二〇
藤花亭雜著十種 一二
鮚綺亭全集 嘉慶間姚江借樹山房藏板本 二四
沈歸愚全集 乾隆間教忠堂聚本 一四
郭靈芬全集 嘉慶刊本 一八
古愚老人消夏錄 古愚山房刊本 二〇
湯子遺書 六
周孟侯全集 道光原刻 光緒刊本 八
楊荇蒼七種 乾隆間復初堂藏板 二四
鄧孚菴遺書 近刻本 三八

（同志社前 文化堂）

繆藝風叢書 二一
石林遺書 一二
率祖堂叢書 即金仁山遺書 乾隆二年婺東藕塘賢裔祠藏板本 二二
還硯齋全集 一四
郭侍郎全集 光緒壬辰刊本 二八
味義根齋著書 光緒己卯刊本 八
汪龍莊遺書 光緒八年山東書局重刊本 六
徐氏志學齋全集 光緒十三年聚本 一四
梅氏曆算全書 兼濟堂刊本 一六
李氏遺書 文選樓聚本 五

董方立遺書 三
翼微山房數學 原刻本 一四
汪堯峯全集 雍正刻本 三二
梅莊雜著 四
梅谷十種書 原刻本 六
窳雅堂著書 道光元年 張學俠著 聚本 二四
柚海樓雜著 道光十八年嘉定西谿草廬聚本 四
潛園總集 光緒甲申刻本 二〇
徽季雜著 一〇
煙嶼樓集 同治六年虎林山房葉氏聚本 一四

道古堂全集 光緒十四年振綺堂重修本 一六
古香堂六種 乾隆癸未刊本 五
綿津山人原刻本 一〇
西陂類稿 原刻本 二〇
坦園全集 三六
甘泉鄉人稿 同治壬申重聚本 七
香蘇山館全集 道光癸卯石溪舫藏板本 一二
鄧甫先人雜著 道光己丑重悟江氏藏板本 四
二思堂叢書 光緒元年杭局本 一六
中復堂全集 同治丁卯重校刊本 二〇

安吳四種 道光丙午治字本 一六
魏稼孫全集 光緒癸未羊城聚本 四
周松靄遺書 嘉慶刊本 一二
魚氏叢書 光緒丙子重刻衡陽魏家藏板本 四〇
張皋文全書 嘉慶八年陽湖張琦仙館聚本 一六
郝蘭皋全書 光緒七年聚本 五六
竹柏山房十五種 咸豐六年福州合刻本 三二
修本堂叢書 一二
曾文正公全集 光緒二年傳忠書局聚本 七一
石泉書屋全集 同治辛未利津李氏藏板本 二

顧志齋叢書 同治元年刻本 一六
羅忠節公遺集 同治二年長沙刻本 八
影山草堂六種 同治二年 一二
李氏五種 同治九年合肥李氏 六
東塾遺書初函 八
春在堂全書 光緒三十八年聚本 一六〇
柏堂遺書 四〇
舒藝室全集 同治十三年金陵白城賓館聚本 一〇
汪双池遺書 同治癸酉徽郡父書局校聚本 一三二
趙歐北七種 湛貽堂藏板本 四

文通遺書 康熙刊本 六
方望溪全書 湖南刊本 一六
潛研堂全書 光緒十六年長洲龍氏家塾重刊本 四〇
鹿洲全集 詞堂本 二〇
通藝錄 二〇
果堂全集 乾隆原刻本 九
陳司業四種 乾隆甲辰刊本 六
清芬樓遺稿 光緒戊子家塾刊本 三
授堂全集 道光癸卯重栞本 一五
洪北江全集 光緒丁丑鄂局本 八四

（同志註册）文化堂

徐位山六種 光緒三年補修本 二四
杭氏七種 原刻本 八
嚴鐵橋四種 嘉慶甲辰原刻本 鐵橋漫稿旧抄本 一二
樊榭山房全集 光緒甲申汪氏振綺堂栞本 一二
隨園三十種 家刻本 九六
求是堂遺書 三六
惜抱全集 即十種本 同治丙寅省心閣重栞本 二二
崔東壁遺書 道光二年遺經樓栞全本書面存板本 二六
廬陵歐陽文忠公全集 嘉慶己卯梅鼎書屋藏板本 二四
李忠定公全集 光緒戊申湘御愛日堂栞本 八

（同志註册）文化堂

周益國文忠公全集 道光十二年歐陽棨重刊本 四〇
王氏玉海附刻 浙局本 一二〇
西山全集 乾隆栞本 五六
明王文成公全書 二四
高忠憲公全書 光緒二年無錫東林書院重栞本 八
顧端文公遺書 六
陸清獻公全書 浙局刻本 三六
澳洋著述 九八
李文貞公全集 道光九年詞堂 一二〇
王船山遺書 同治四年金陵節署栞本 一一二

（同志註册）文化堂

毛維黃遺書 乾隆五年栞本 一二
張楊園全集 同治辛未蘇局本 一六
顧亭林遺書 前後集 光緒乙酉朱氏栞本 二〇
毛西河全集 原刻本 九四
尤西堂全集 原刻本 一六
清吟堂集 即高江村全集 翫澗堂藏版本 一二
高安朱氏藏書 光緒二十二年家刻本 六〇
蔡睦汪氏遺書 光緒十五年長沙重刻本 三二
叢書十三種 嘉慶庚辰書業藏板本 八
洞簫樓詩紀 道光十年刻本 重整雲龕閒樂府餘論 一〇

校禮堂全集 一四
西莊始存稿 西沚居士詩文集 道光刻本 並附乳峰賦說
十經齋文集 柴辟亭詩集 道光刻本 一二
夢陔堂全集 咸豐刻本 六
三影閣叢書 三四
觀象廬叢書 光緒戊子吳氏藏板本 二四
學壽堂叢書 四八
香海盦叢書 光緒十二年梁本 二四
六譯館叢書 民國十年存古書局彙本 六
觀古堂所著書 丁未重編本 五八
右一百五十六種 三千七百三十九本 八

陶廬叢刻 三四
碧聲吟館叢書 光緒丁丑刻本 一二
庸盦全集 光緒十四年刻本 三〇
章氏叢書 民國六年浙江圖館排印本 二四
右一百五十六種 三千七百三十九本
附 地志類
大清中外一統輿圖 同治二年刊本 三二
盛京通志 宣統三年重排印本 六四
吉林通志 光緒刊本 四六
欽定盛京通志 光緒十年刊本 二〇〇

河南通志 光緒庚寅補刊本 六〇
山西通志 光緒十八年刊本 九六
山東通志 乙卯山東公司排印本 一二八
江南通志 乾隆刊本 六四
安徽通志 光緒四年刊本 八四
江西通志 光緒六年重修本 一二〇
浙江通志 光緒己亥浙局刊本 一二〇
福建通志 同治戊辰三謁書院刊本 一七六
湖北通志 民國十年湖北省長公署藏板本 一〇八
湖南通志 光緒十一年重修本 一六〇

湖廣通志 康熙刊本 三二
廣東通志 道光原本 一二〇
廣西通志 光緒十七年補刊本 八〇
雲南通志 光緒二十七年四川岳池縣刊本 一〇〇
貴州通志 乾隆修本 三二
四川通志 嘉慶刊本 九六
陝西通志 雍正刊本 一〇〇
甘肅通志 八〇
新疆圖志 天津東方房會印本 三四
順天府志 光緒刊本 六四

承德府志 光緒十三年重刊本 二四
黑龍江述畧 光緒辛卯徐氏觀自得齋校刊本 二
蒙古游牧記 同治六年 寿陽祁氏校刊本 四
西藏圖考 光緒丙戌刊本 四
讀史方輿紀要 光緒庚子廣雅書局刊本 七三
天下郡國利病書 今上 五八
右三十種 二千三百卅六本
粤雅堂叢書 同治十二年廣東重刊本 四六〇
以上經部

十六家墨說 二
以上子部
秘册彙函 萬曆癸卯刊本 三冊
珠叢別錄 錢錫氏輯 二四
潘刻五種 鮑文耀刊本 六
積學齋叢書 徐乃昌刊本 一六
鄦齋叢書 徐乃昌刊本 一六
懷舊雜著 宣統元年徐乃昌刊本 八
誦芬室初二集 民國丙辰董康校本 八五
宸翰廬叢書 羅振玉校刊本 六

玉簡齋叢書 羅振玉校刊本 二〇
雲窗叢刻 羅振玉校刊本 一〇
雪堂叢刻 羅振玉校刊本 二〇
吉石盦叢書 羅振玉校刊本 二四
以上叢書
隨庵叢書 正編 徐乃昌刊本 一四
又續篇 徐乃昌刊本
續古逸叢書 滂喜齋校刊本 五〇
鳴沙石室佚書 羅振玉刊 四
以上影仿

蘇齋叢書 乾隆五十四年南昌刊本 四二
以上一人所著
右十九種 後寄八百五十三本
總計五百九十一種 二万七千八百六十三本

〔東方學資料叢刊　第 17 册〕

陶湘叢書購入關連資料

Materials on the Purchase of Tao Xiang’s Collection of the Reprints of Old Chinese Books

2010 年 3 月 31 日發行

編　者　　高田時雄

發行者　　京都大學人文科學研究所附屬東アジア人文情報學研究センター

〒 606-8265 京都市左京區北白川東小倉町 47

http://www.kita.zinbun.kyoto-u.ac.jp/

ISSN 1343-4241

ORIENTAL STUDIES REFERENCE SERIES
No.17

Materials on the Purchase of Tao Xiang's Collection of the Reprints of Old Chinese Books

Compiled by

TAKATA Tokio

Center for Informatics in East Asian Studies
Institute for Research in Humanities
Kyoto University

2010